

第65図 J 3区出土土器 (10)

26~29、148~169は第VI群から第VII群の注口土器である。26、158~162、169はソロバン玉形の、27~29、163、164は球形状の注口土器で、第VI群土器と思われる。26は注口部を境に左右対称的な網状の文様を平行沈線で描き、区画内に綾織状沈線の十字文を施文する。注口部には漆の補修が施されている。29も注口部を中心に左右

対称の弧線文を平行沈線で描いている。注口部の裏側の把手の付け根からは、動物の尻尾状の文様が続いている。170は幅広の受け口を持つ広口壺の口縁部で、時期不詳である。

171~197は第VI群から第VIII群の底部で、188~196は鉢の底部、197は注口土器の底部と思われる。

A 1区の土器群 (第66、67図)

A 1区は狭小な調査区で、掲載土器3点、非掲載土器7点の合計10点が出土した。

第67図1は無文の口縁部が開き、膨らむ胴部に縄文が施文され、筒状の底部へと移行する斜線文系土器の器形を呈する土器である。無文の口縁部にはナデ整形が施され、胴部は刻文帯で区画される。この刻文帯は器形の括れ部ではなく、胴部ふくらみの中央位に施されている。

2は鉢の胴部破片で、沈線で上端が区画された胴部文様帯に横位の刺突文列が6列に施文され、底部付近に横位のナデ整形が施される。後期の第VII群土器と思われるが、後期前葉の可能性もある。

3は鉢の底部で、小さい底部に大きく開く体部が付く器形である。

A 2区の土器群 (第66、68~70)

台地部へと湾入する谷部の中心部にあたり、グリッド内に台地の裾部は続いていない。出土遺物も少なく、掲載土器が74点、非掲載土器が356点出土した。土器群は第VII群と第VIII群を中心とする。

13、14は口縁部に「8」字状の貼付文が施文される第VI群土器で、14は貼付文が低平化し、口縁部に縄文帯が施文されることから、第VII群となる可能性もある。

15、16は第VII群土器の3単位突起深鉢の左右対称形となる突起で、15は「の」字状文から変化した3本沈線、16は伸びた対弧状沈線が施文される。

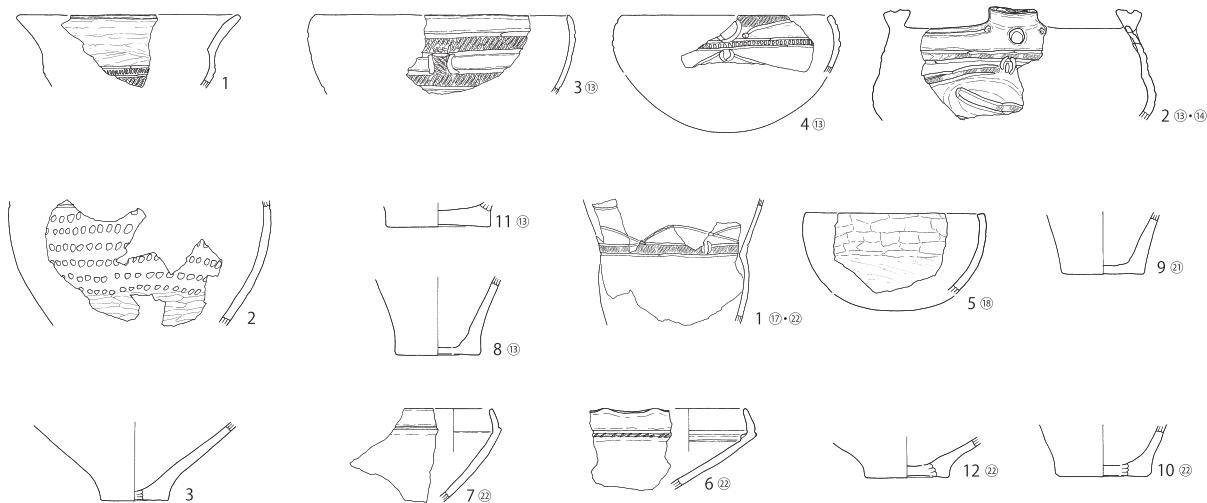
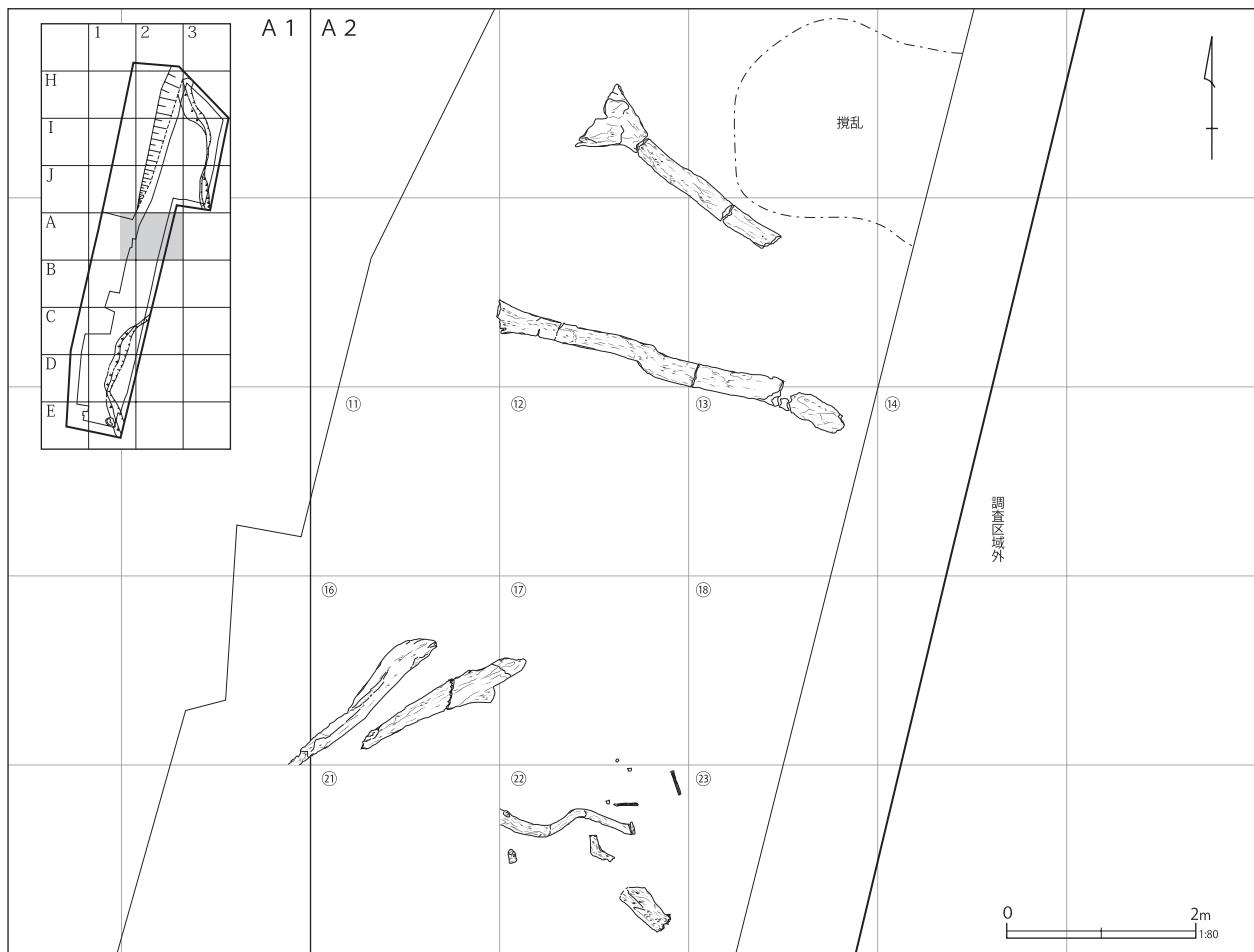
17~20、22、23は口縁部が内折し、胴部で括れる第VIII群の深鉢で、17~20は口縁部が縄文帯で区画され、22、23は刻文帯で区画されている。17、

第9表 A 1区非掲載土器分類表

A 1						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提式				0
小計			0	0	0	0
III群	中期	五領ヶ台2				0
		貉沢 / 勝坂 I				0
		加曾利E III				0
		加曾利E IV				0
小計			0	0	0	0
IV群	後期	称名寺1				0
		称名寺2				0
			0	0	0	0
V群	後期	堀之内1式				0
		堀之内2式				0
小計			0	0	0	0
VI群	後期	加曾利B 1				0
		加曾利B 2		4		4
小計			0	4	0	4
IX群	後期	縄文のみ		1		1
		無文		1	1	2
小計			0	2	1	3
合計			0	6	1	7

第10表 A 2区非掲載土器分類表

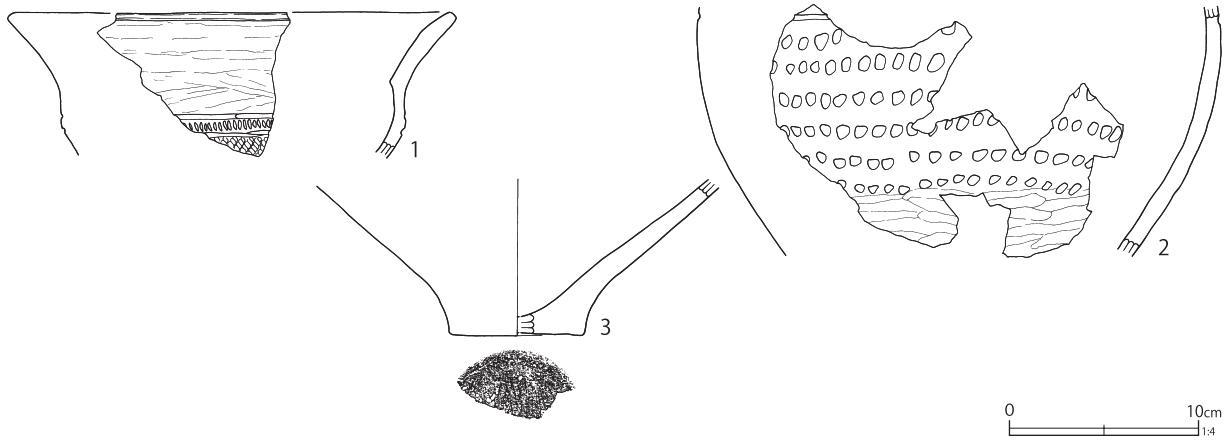
A 2区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III群	中期	五領ヶ台2				0
		貉沢 / 勝坂 I				0
		加曾利E III				0
		加曾利E IV				0
小計			0	0	0	0
IV群	後期	称名寺1				0
		称名寺2				0
			0	0	0	0
V群	後期	堀之内1式			2	2
		堀之内2式			8	8
小計			0	10	0	10
VI群	後期	加曾利B 1	13	58		71
		加曾利B 2	16	43		59
小計			29	101	0	130
IX群	後期	縄文のみ	1	45		46
		無文	2	162	6	170
小計			3	207	6	216
合計			32	318	6	356



第 66 図 A 1・A 2 区土器分布図

19、22、23は胴部に弧線及び斜行沈線によるモチーフが描かれる。20の縄文帯には口縁部の貼付隆帯に続く対弧文が施され、22の口縁部には縦長の対弧文、その下の胴部にも左右で長さの違う対

弧文が施文され、それを起点としてモチーフが分かれている。23は対弧文を起点に縄文帯で菱形状のモチーフが描かれる。21は直線的に開く口縁部に縄文帯を施文し、口縁部裏面に風化して不明瞭で



第67図 A 1区出土土器

あるが、2本沈線が施文されているようである。

1、24～38は深鉢の胴部破片で、24～27は第VII群土器である。24は平行沈線帯下に「の」字状の単位文を施文するもので、25は平行沈線が対向する鉤状文で区切られる。26、27は渦巻状のモチーフが施文されるもので、27は向きの異なる鉤状文が部分的に施されている。28～30は横位の縄文帯が施文されるもので、28は対弧文で区切られている。1は胴部の括れ部を縄文帯で区画し、部分的に対弧文が施文されるが、胴部の上下対向弧線文の起点にはなっていない。31～34は対弧文を起点として弧線文や菱形文が施文されるもので、31の対弧文は縦長となっている。

39～44は無地文上に沈線文が施文される土器群で、41～44は第VII群の格子目文が描かれる土器群である。41は口縁部に沈線区画が施されて格子目文が施文されるもので、口縁部裏面にも沈線が施される。42は口唇部下から格子目文が施文されるもので、裏面にも沈線が施文される。43は細かな格子目文施文後、平行沈線が施文される。

39、40は口縁部が直線的に立ち、沈線の縦長の弧線文を垂下させるもので、沈線施文は浅い。第VIII群土器と思われる。

45～51は紐線文土器で第VII群から第VIII群にかけての土器群である。45は平行沈線間に左にずれる縦位の区切り文が施され、46、47、53～55は平行

沈線の鋸歯状文と弧線文が組み合わさるものである。第VII群と思われる。

48は粗い地文縄文上に斜行垂下する沈線が施文され、49は無地文上に垂下する条線文を施文する。第VIII群土器と思われる。

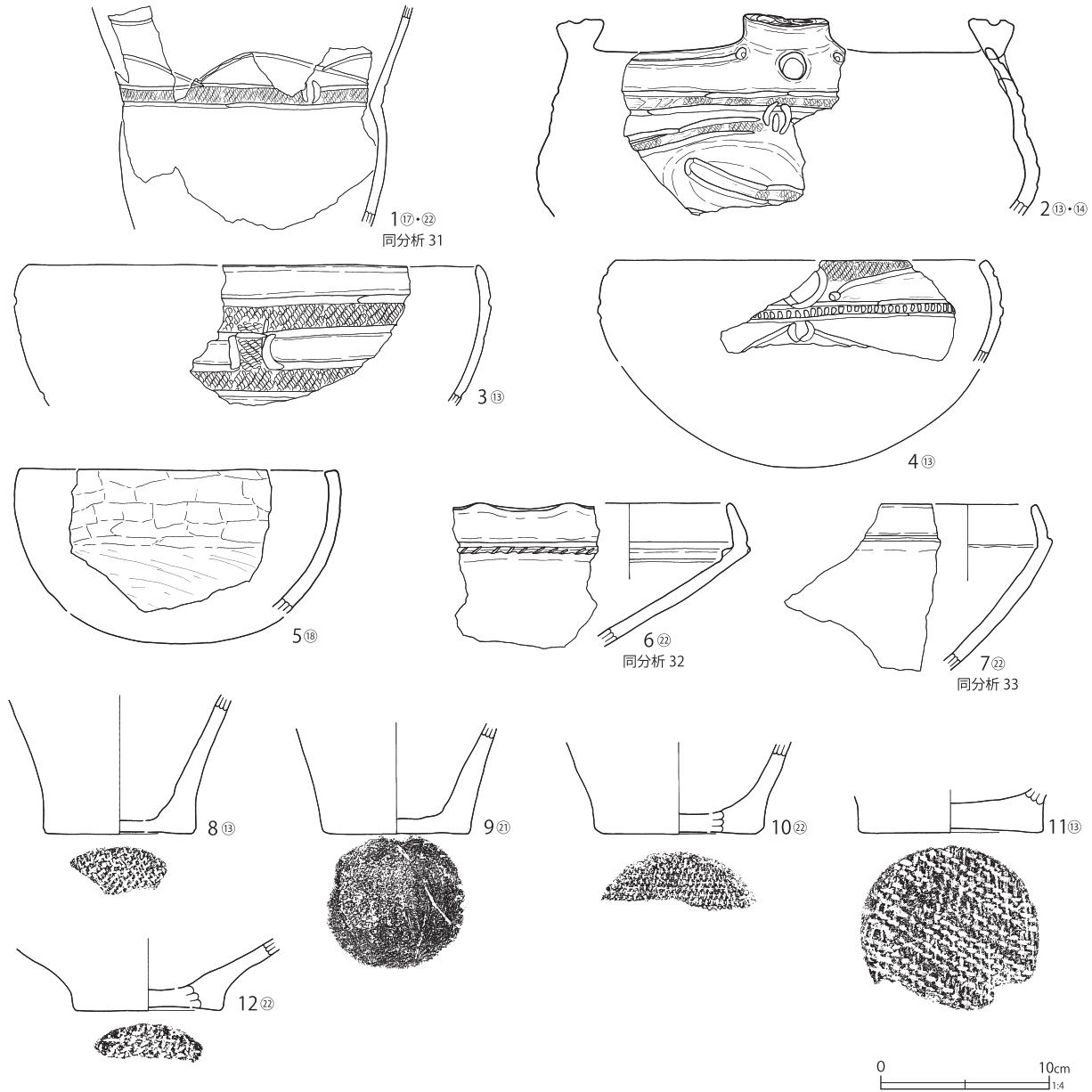
52、56、61は条線文が施文される深鉢で、第VI群土器と思われる。

57～60、62～64は第IX群土器の深鉢で、57、62、63は縄文土器、59、60、64は無文土器である。59、60には炭化物が多量に付着している。

2～5、35～38、65～72は第VII群から第VIII群土器の鉢である。3は底部が張り出す鉢と思われ、縄文帯間の無文部が括弧状の縦位沈線で区画されて、長方形区画文が構成されている。第VII群土器である。

2は3単位の突起が付き、把手下の胴部に袋状の張り出しが付く鉢で、把手下部の3本沈線の対弧文を起点として菱形状、もしくは袋状張り出し部の上に施文された縄文帯と組み合うような入組状文が構成されているものと思われる。第VIII群土器と思われる。35～38は文様帯下端の縄文帯に対弧文が施文されている。

65～68は口縁部に突起や貼付隆帯が付く鉢で、65は山形の板状の把手が付き、把手部の円孔から刻みが施される隆帯が垂下され、その下部に綾織状対弧文が施文されている。肩部の区画は刺突状



第68図 A 2区出土土器（1）

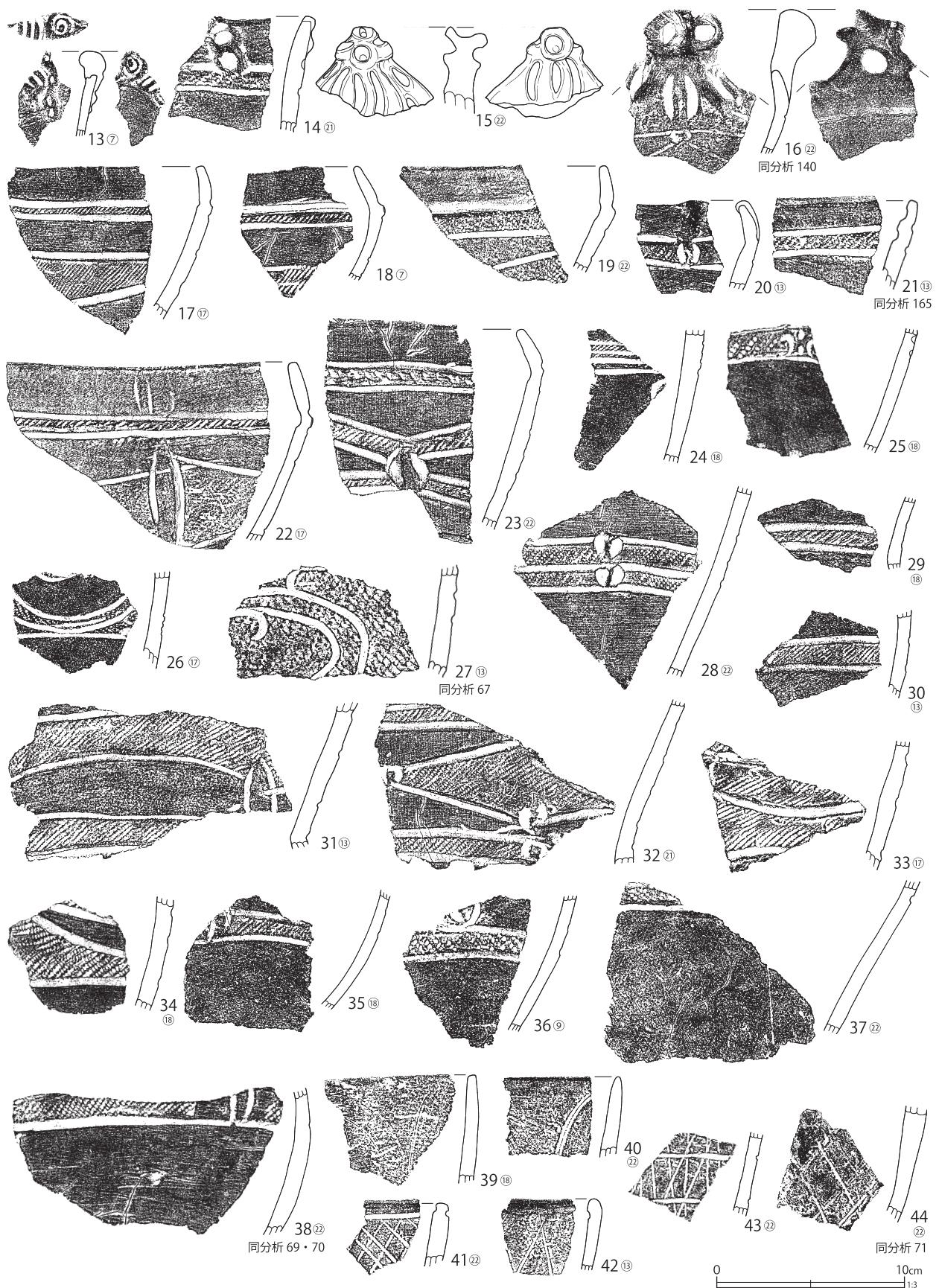
の刻文帯2帯で行われている。66は口縁部に扁平な突起が付き、67は口縁部に、68は波状口縁波頂部から隆帯が貼付される。66、69～71は肩部が刻文帯で、67、68は縄文帯で区画される。

4、72は内湾の強い鉢で、4は肩部が刻文帯で区画され、口縁部に円形状の大きな対弧文その下部に小さな対弧文が施文されて、モチーフの起点とされている。口縁部には対弧文の脇の盲孔を起点として上向きの弧線文が、胴部には対弧文を起点として菱形状に斜行沈線が施文されている。72

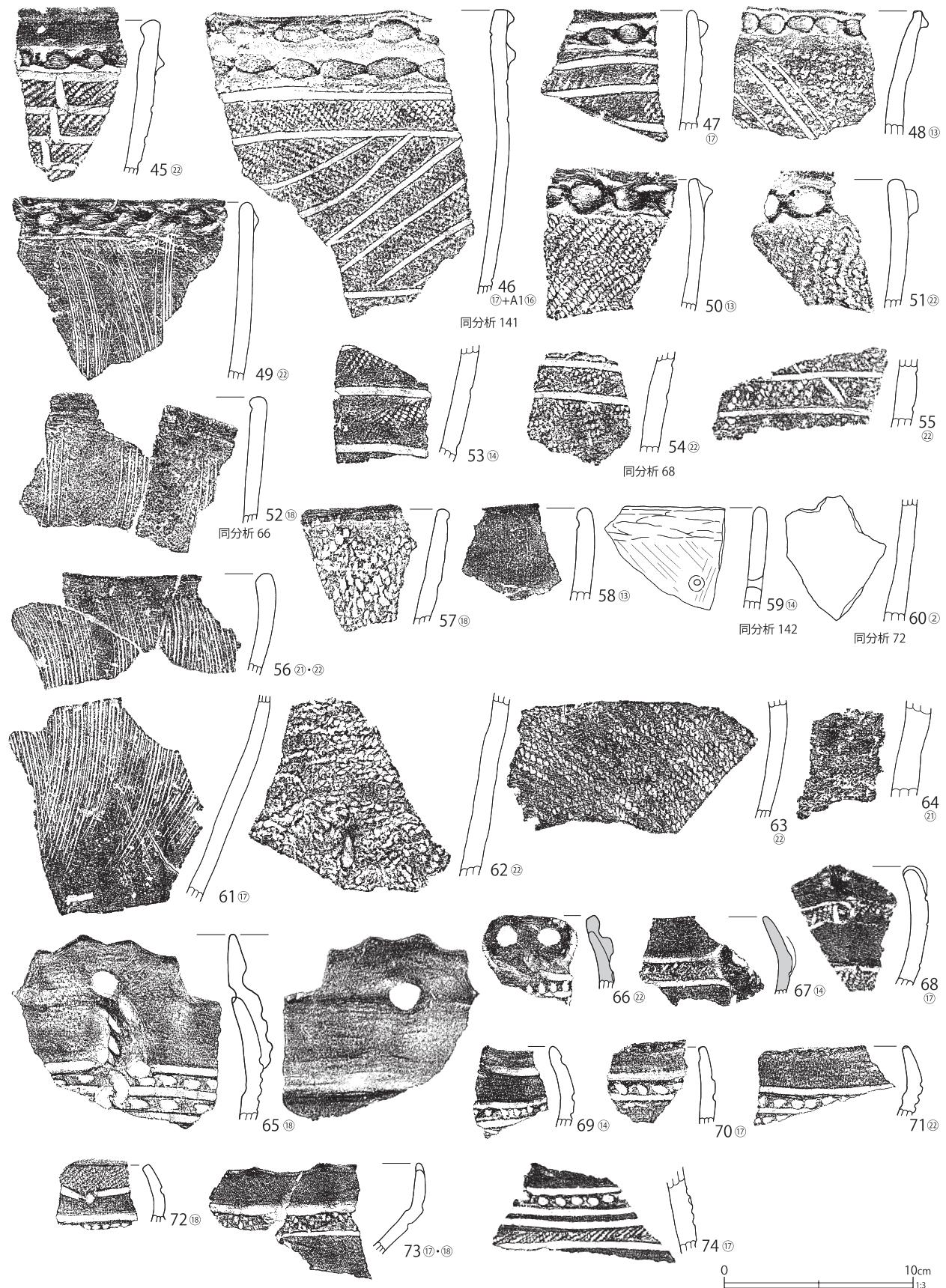
も口縁部の盲孔を起点に、弧線文の方向が変化している。5は無文の鉢で、器面にケズリ状の整形が施されている。以上は、第VIII群土器と思われる。

6、7、73は浅鉢である。6、73は小波状口縁を呈し、6は内面に突帯を持ち、肩部に刻みが施され、73は縄文帯で区画されている。6は第VII群、7、73は第VIII土器であろう。

74は壺もしくは注口土器の破片と思われ、肩部が刺突文帯で区画される。8～12は底部で、8～11は深鉢、12は鉢の底部と思われる。



第69図 A2区出土土器(2)



第70図 A2区出土土器(3)

B 1 区の土器群 (第71~74図)

A 1・2 区と同様に台地へと湾入する谷部の中あたり、土器の出土量はそれほど多くない。掲載土器61点、非掲載土器443点の合計504点が出土した。

第74図42、43は第I群第2類の条痕文系土器群であるが、43は裏面に条痕が施され、表面には条痕地文上に縄文が施文されている。早期終末の土器群である。

第73図12は第IV群第1類称名寺1式土器の深鉢の口縁部破片である。肥厚する口縁部に太くて深い沈線区画が施され、縄文LRが施文される。

13は第V群土器の深鉢口縁部で、口縁波頂部に弧線で囲まれる円孔があり、胴部に沈線と列点状の沈線が垂下する。

第11表 B 1 区非掲載土器分類表

B 1 区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III群	中期	五領ヶ台2				0
		洛沢 / 勝坂 I				0
		加曾利E III		1		1
		加曾利E IV				0
小計			0	1	0	1
IV群	後期	称名寺1	2			2
		称名寺2				0
小計			2	0	0	2
V群	後期	堀之内1		6		6
VI群		堀之内2	9	13		22
小計			9	19	0	28
VII群	後期	加曾利B 1	19	61		80
VIII群		加曾利B 2	8	40		48
小計			27	101	0	128
IX群	後期	縄文のみ	1	55		56
		無文	1	210	17	228
小計			2	265	17	284
合計			40	386	17	443

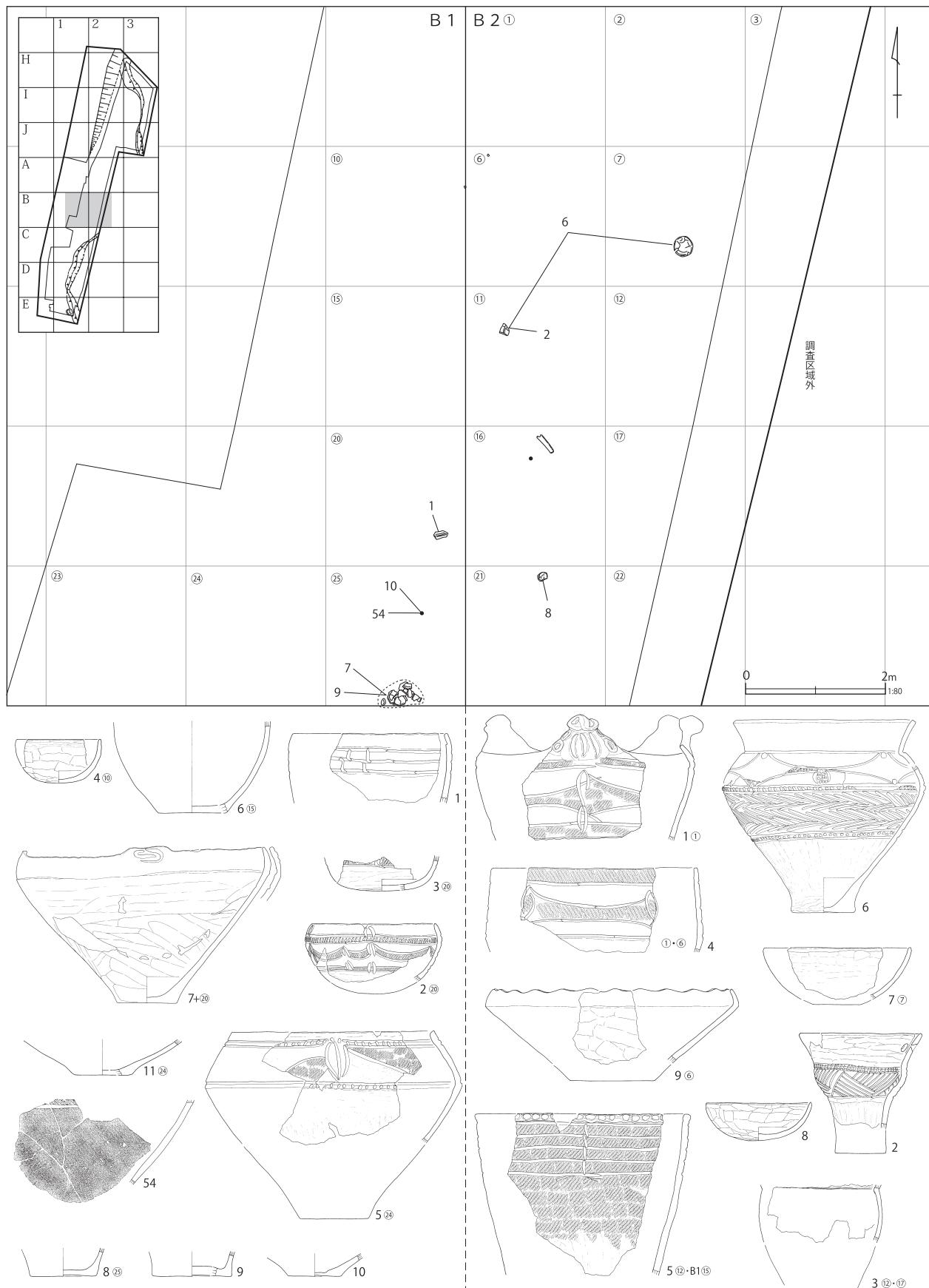
14は非対称の突起が付き、口縁部に隆帯が巡る第VI群土器の深鉢である。

15~19は精製深鉢の口縁部破片で、15、17、19は内文を持つ。15は縦位沈線で、16は左へずれる2本沈線で沈線帯が区切られ、19は鉤状に短い区切り線が施文されている。第VII群土器である。

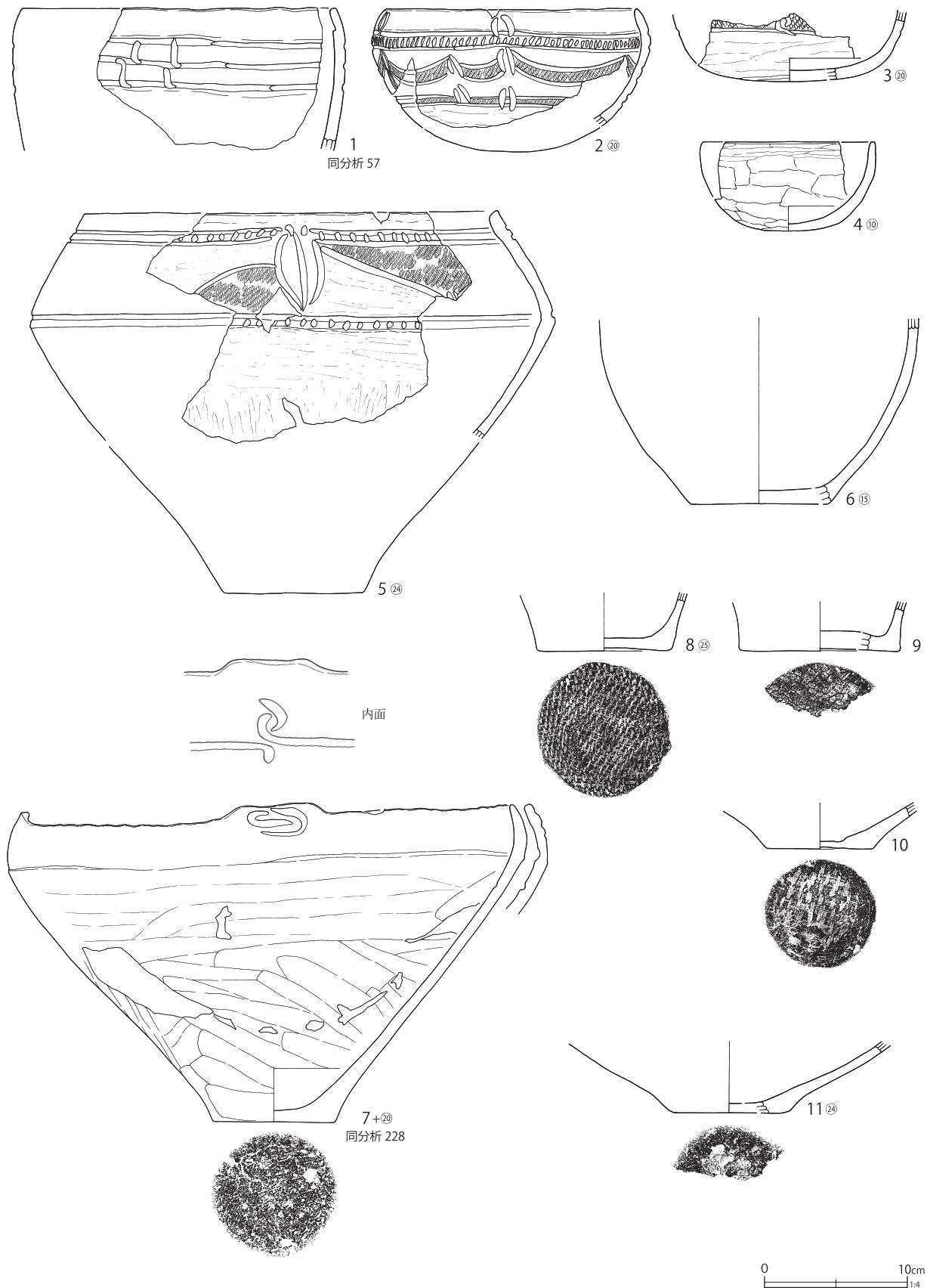
7は内湾気味に口縁が立つ器形で、無地文上の平行沈線が左へずれる平行の縦位沈線で区切られる。20は小波状を呈する短い口縁が内接する器形で、肩部が縄文帯で区画される。第VIII群土器であろう。21は口縁部が開き、胴部で括れる器形で、上半部に矢羽状沈線が施文される。22は縄文帯に小さな円形状の対弧文、23は縦長の綾縞状文が施文されており、いずれも第VIII群段階の土器群と思われる。

第12表 B 2 区非掲載土器分類表

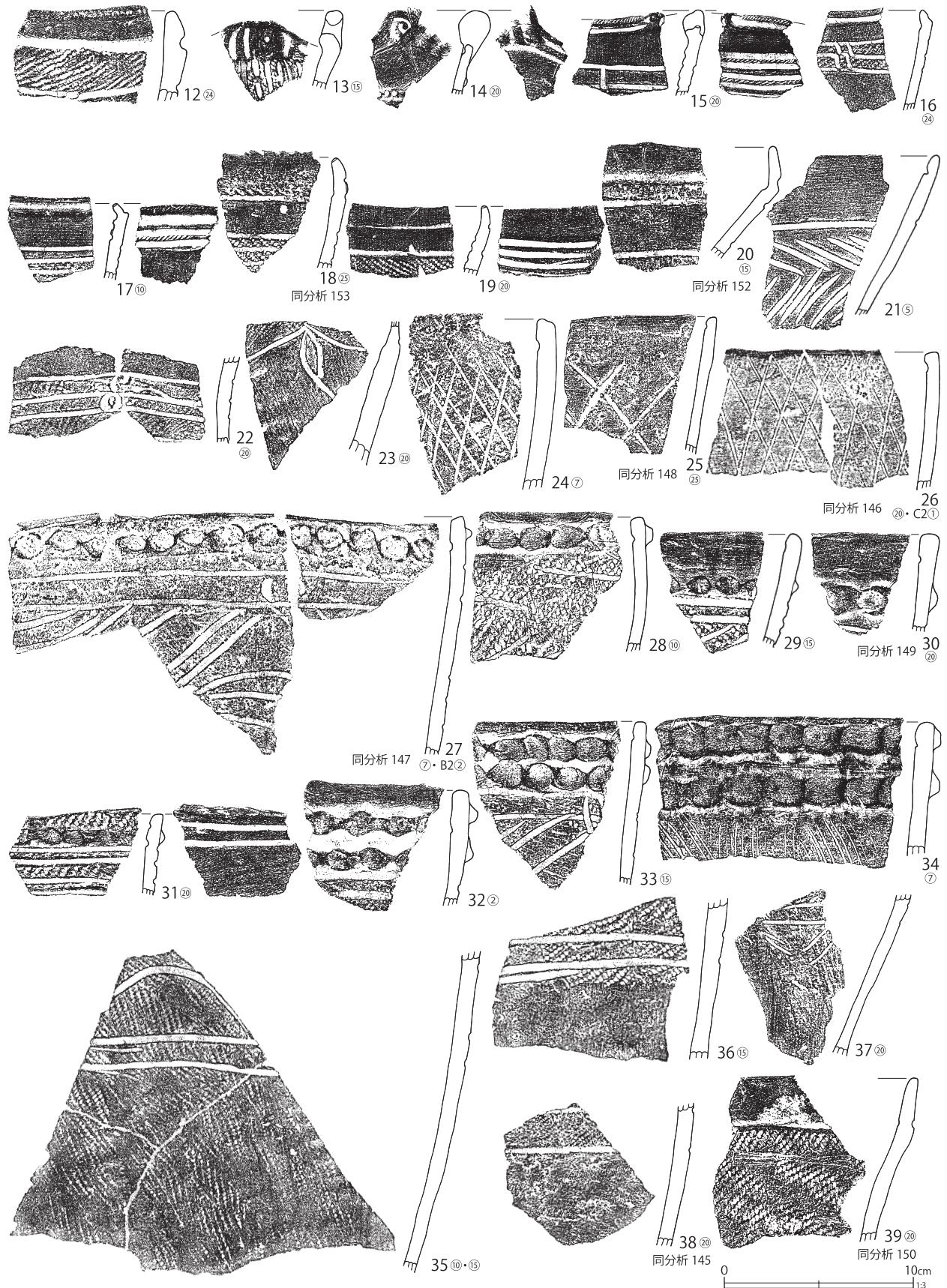
B 2 区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文		1		1
		条痕文				0
小計			0	1	0	1
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III群	中期	五領ヶ台2				0
		洛沢 / 勝坂 I				0
		加曾利E III		1		1
		加曾利E IV				0
小計			0	1	0	1
IV群	後期	称名寺1				0
		称名寺2				2
			0	2	0	2
		堀之内1	4	11		15
V群	後期	堀之内2	27	55		82
小計			31	66	0	97
VII群	後期	加曾利B 1	20	92		112
VIII群		加曾利B 2	18	54		72
小計			38	146	0	184
IX群	後期	縄文のみ	3	100		103
		無文	5	323	40	368
小計			8	423	40	471
合計			77	639	40	756



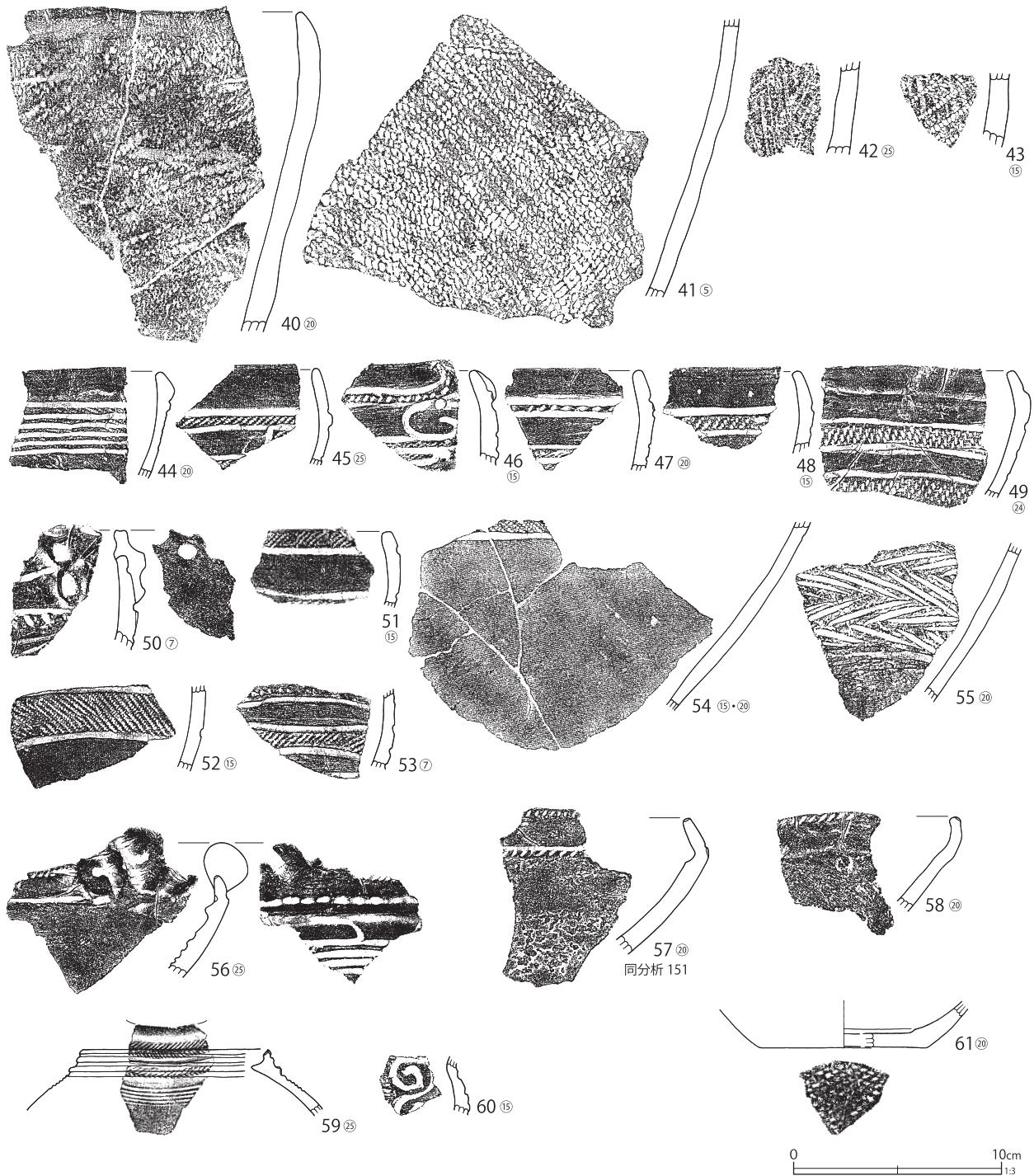
第71図 B1・B2区土器分布図



第 72 図 B 1 区出土土器 (1)



第73図 B 1区出土土器 (2)



第74図 B1区出土土器(3)

24～26は格子目文が施文される深鉢で、第VII群土器である。

27～34は紐線文土器で、17、29、30、32、33、35、37、38は鋸歯状文と弧線文が組み合わさる土器である。27は地文縄文が磨消されており、口縁区画の沈線帯に対弧文が施文されている。31は縄

文施文後に紐線文を施している。34は条線文が施文される。39は無文の口縁部がやや内折する器形で、胴部に縄文が施文される。31は第VII群、他は第VIII群土器と思われる。

40～43は第IX群土器で、縄文が施文される。

2~7、44~53は鉢で、44~49は第VII群土器で

ある。44は肥厚する口縁部下に沈線帯が設けられる。45は肩部の縄文帯下に「の」字状文が施文される。46は口縁部から垂下する隆帯文下に円形刺突文を起点とする「の」字状文が施される。

50は低平な「8」字状貼付文が付く突起を持ち、刻文帯下部に斜行する沈線が施される。51は口縁部が縄文帯で区画され、胴部の縄文帯がやや湾曲して描かれる。第VII群土器である。

2～4はボウル状の鉢で、3は文様帯下端部の区画縄文帯に掛かって、「の」字状文が施文されている。第VII群土器である。2は刻文帯で区画される口縁部に対弧文が施文され、その下部に2段の対弧文を施文し、中央の対弧文を起点とした弧状の縄文帯が連結される。4は無文の鉢で、横位のケズリ状整形が施される。以上、第VII群土器である。6は無文の底部、52～54は鉢の胴部で、52、54は第VII群、53は第VIII群土器と思われる。

5、55はソロバン玉形の鉢で、5は刻文帯で区画された文様帯に「の」字文から変化した三本沈線の縦長対弧文が施文され、これが起点となって斜線や弧線による区画文が施される。下半部は無文で、ナデ整形が施される。55は4段の綾杉状斜沈線が施文されている。第VII群土器である。

7、56～58は浅鉢で、7は口縁部が内湾するやや背の高い浅鉢で、入組状の沈線が施文される突起が付く。また、突起下の内面には区画文へと続く入組状沈線が施文される。第VII群土器である。56は非対称の突起が付く浅鉢で、楕円区画された内文を持ち、突起下の内折口縁部には刺突文列が施文される。第VII群土器である。57は口縁部が内折する浅鉢で、肩部に刻みが施される。58口縁部が緩く内接する。

59、60は注口土器で、60は渦巻文が上下に連結するモチーフで、第VII群の可能性もある。

8～11、61は底部で、10、11、61は鉢の底部と思われる。61の底部内面は段状に作られている。

B 2 区の土器群 (第71、75～79図)

調査区東側の谷部の南側の湾口部に近いため、古い時期の土器群も流れ込んでいる。掲載土器108点、非掲載土器756点の合計864点が出土した。

第76図10は第I群第2類の鶴ヶ島台式土器の口縁部破片である。

11は第II群第5類の十三菩提式土器で、三角印刻が施される。

12、13は第III群土器第3類の加曾利E III式土器で、12は口縁部文様帯下端の破片、13は胴部破片で、条線文が施文される。

14は第IV群第2類の称名寺2式土器の深鉢胴部で、区画文内に円形の刺突文列が施文される。

15は第V群の堀之内1式土器で、隆帯で無文の口縁部が区画される。

16～23は第VI群のバケツ形の深鉢で、17～20は口縁部に隆帯が巡る。16、17は突起を持つ波状口縁で、突起下に「8」字状貼付文が施文される。19、20は内文が施文される。21～23は隆帯が施文されず、22、26は文様帯内に格子目文を、23は2段に区画された文様帯内に、斜線と弧線が組み合わされた文様が描かれる。第VII群の紐線文土器の祖形になるモチーフ構成と思われる。

24、25は胴部の膨らむ器形で、24は渦巻文、25は口縁部の隆帯下に幅狭な縄文帯が構成される。

29、30は第VII群土器の深鉢で、29は口縁部の平行沈線帯にやや左にずれて連続する鉤状の区切り文が施文される。30は口唇部が内折する3単位波状口縁深鉢で、内折部に円形刺突文列を施文する。

1、3、27、28、31は口縁部が内接して胴部が括れる第VII群の深鉢である。1は3単位突起の深鉢で、対称形の把手の両脇には円形の瘤状貼付文が付けられ、突起の内外面には「の」字状文から変化した非対称の3本構成の対弧文が施文される。突起下の胴部には綾織状区切り文が垂下され、

区画線に沿って連結する上下対向弧線文の起点となっている。3は括れ部から下で、無文である。27は区画の刻文帶下に対弧文を施文し、31は口縁部の貼付隆帶文下に縦長の対弧文を施文する。

2、32～35は口縁部が開く器形の深鉢である。2は遠部系の斜線文土器である。無文の口縁が開き、胴部が膨れ、筒状の底部へ移行する器形で、刻文帶で区画された胴部に斜線を組み合わせた集合鋸歯状文が施文される。32は沈線で区画された口縁部に格子目文が施文される。33はやや内湾気味に口縁部が開き、斜行沈線のモチーフが施文される。34、35は無文の口縁部が開き、胴部に縦長の対弧文を起点とした弧線文が施文される。

36～45は第VIII群深鉢の胴部破片で、36、40、41、43、44は弧線を基調にしたモチーフが、39、42は対弧文を起点とするモチーフが施文されている。45は括れ部下に3段の矢羽状集合沈線が施文される。

46、47は格子目文が描かれる深鉢で、49、50は条線文が施文される深鉢である。

5、48、51～60は紐線文系土器である。5は直線的に開く深鉢で、口縁端部に紐線文が施される。間隔の広い平行沈線が直線的に連続して施文される縦位の短沈線で区切られている、第VIII群土器と思われる。51～53、58～60は平行沈線の鋸歯状文と弧線文が組み合わさるものである。54は条線文が施文される。地文の縄文は、いずれも隆帶施文後の施文である。

61～66は第VII群土器の鉢である。61は刻文帶で肩部が区画され、縄文施文の平行沈線帶が設かれている。62は平行沈線帶を2本対の短沈線の区切り文が、左にずれながら施文される。63は沈線帶が2帯、64は縄文帶が2帯施文されている。65、66は同一個体で、肩部の縄文帶の区画帶上側の沈線が、蕨手状を呈している。

4、6、67～76は第VIII群土器の鉢である。4は平口縁の口縁部が縄文帶で区画され、縦長の入

組状対弧文を起点として、上下の区画線に沿って対向の弧線文が施文され、対弧文内と弧線区画文外側の菱形状区画内に縄文が施文される。67～70は口縁部が内湾する鉢で、それぞれ縄文帶で区画が行われ、67は肩部の縄文帶下に対弧文が施文される。71、72は刻文帶を境に、71は口縁部に弧線文が施文され、72は胴部に斜行集合沈線が施文される。

73～75は突起の付く鉢で、73、75は隆帶の貼付文が付き、74は左右対称の突起が付く。75は胴部の縦長の縦位平行沈線を境に弧線区画が施される。76は口縁部の「の」字単位文を施し、その下部の縄文帶から綾繩状の対弧文が垂下する。第VIII群土器と思われる。

6は口縁部を欠損するが、体部が丸みを帯びたソロバン玉形を呈し、上半部に弧線文が施文され、上下対弧線文の接点部下に対弧文が施文されて、刺突文が充填される。刺突文は菱形状区画にも施文される。下半部は綾杉状集合斜線が4段に施文される。

77～85は鉢の胴部破片で、77～79は第VII群、80～83は第VIII群土器と思われる。

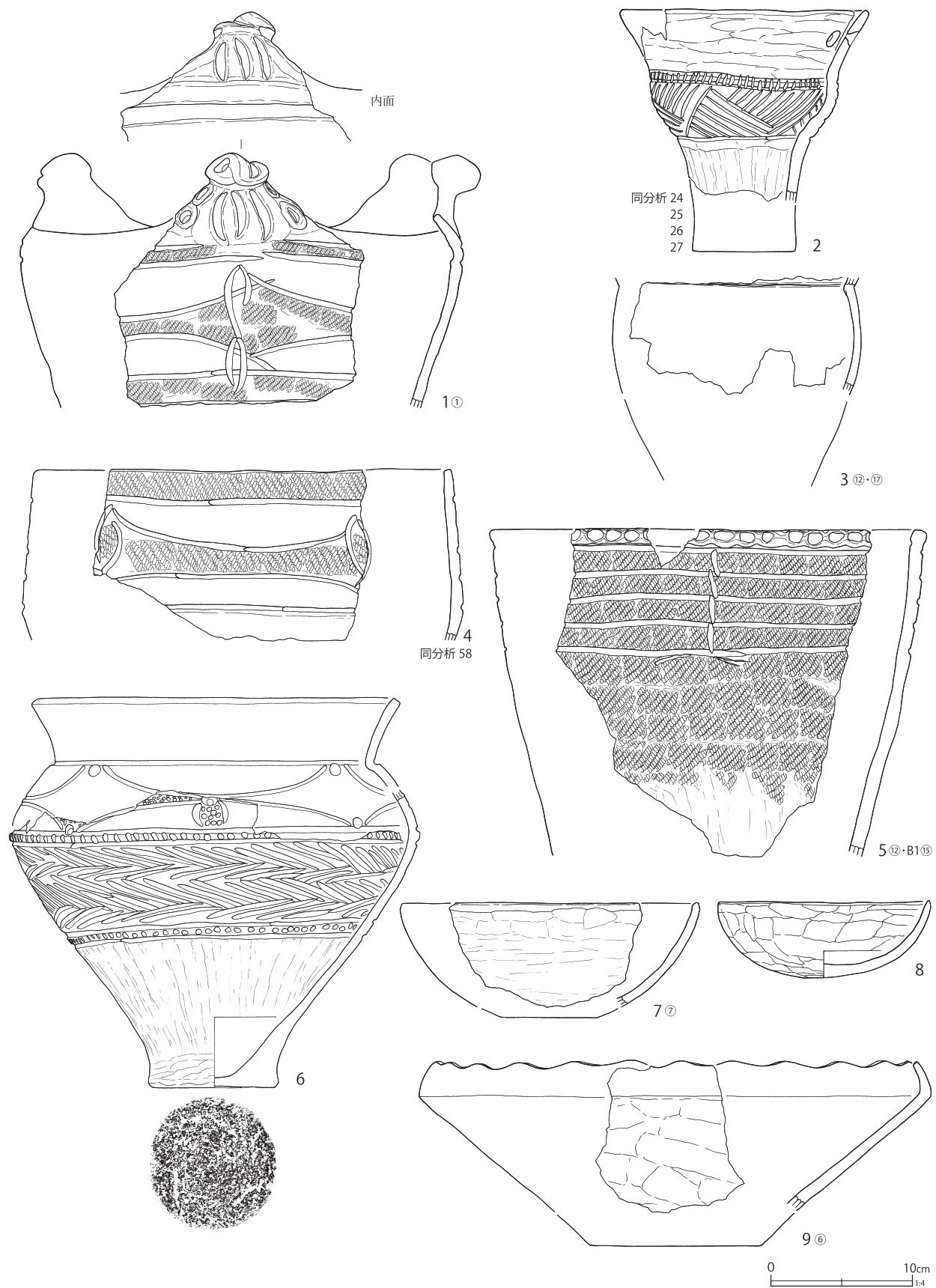
7、8、84は無文のボウル状の鉢で、7、8には横位のケズリ状整形が施される。85は底部であるが、漆が塗られ、光沢を放っている。

9、86～89は浅鉢で、88～89は口縁部が直線的に開き、渦巻文を起点とした内文が施文される第VI群土器である。口縁部周りには、まだ抉り状の沈線は施文されていない。小波状で口縁部が内接する9や86は、第VII群から第VIII群の浅鉢である。

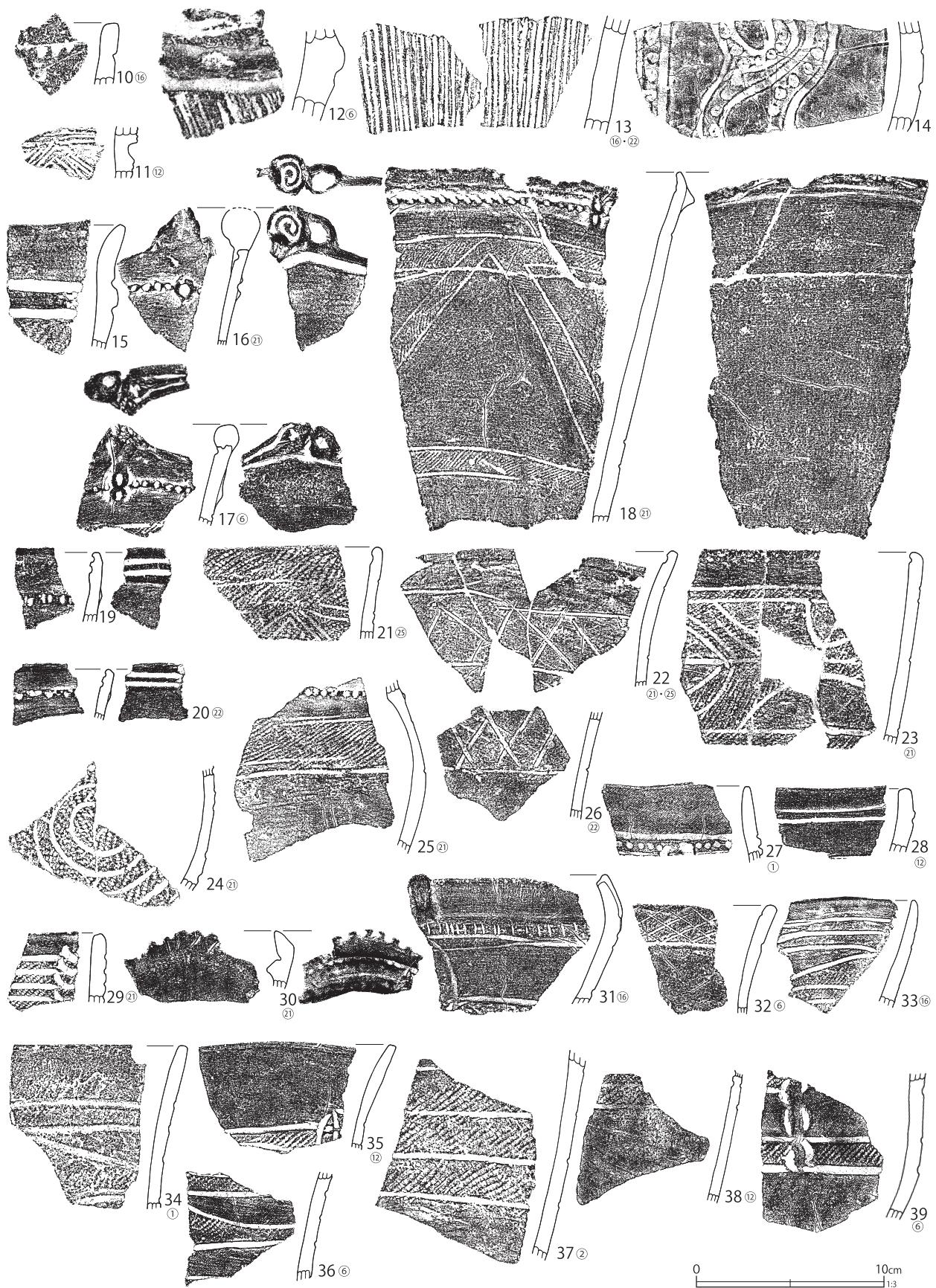
95、96は第IX群土器の深鉢である。

90～94は注口土器で、90、91の把手、94の胴部は第VI群の可能性が高く、92、93は第VII群の胴部破片である。

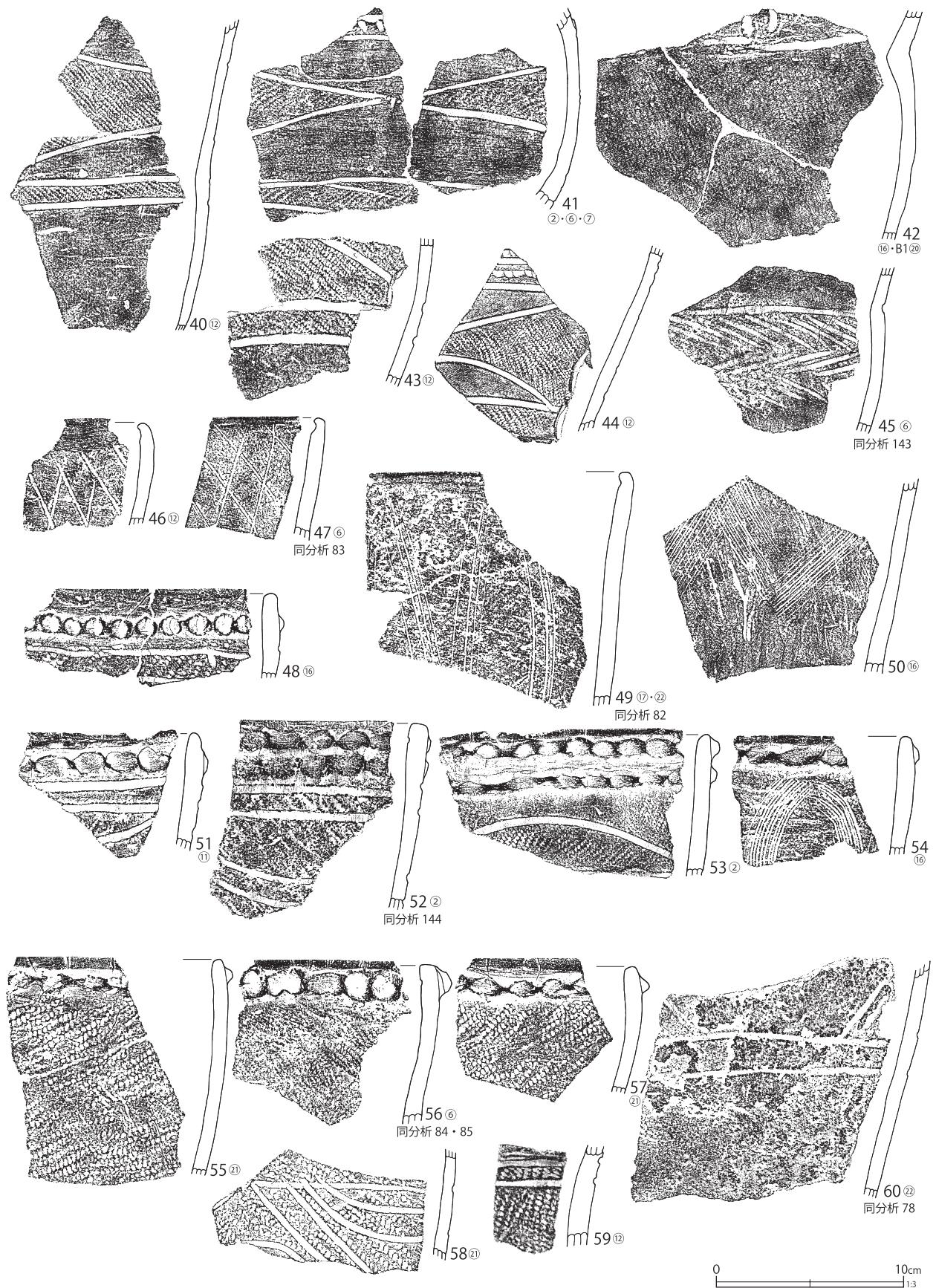
97～108は底部で、97～105は深鉢の底部、106～108は鉢の底部と思われる。



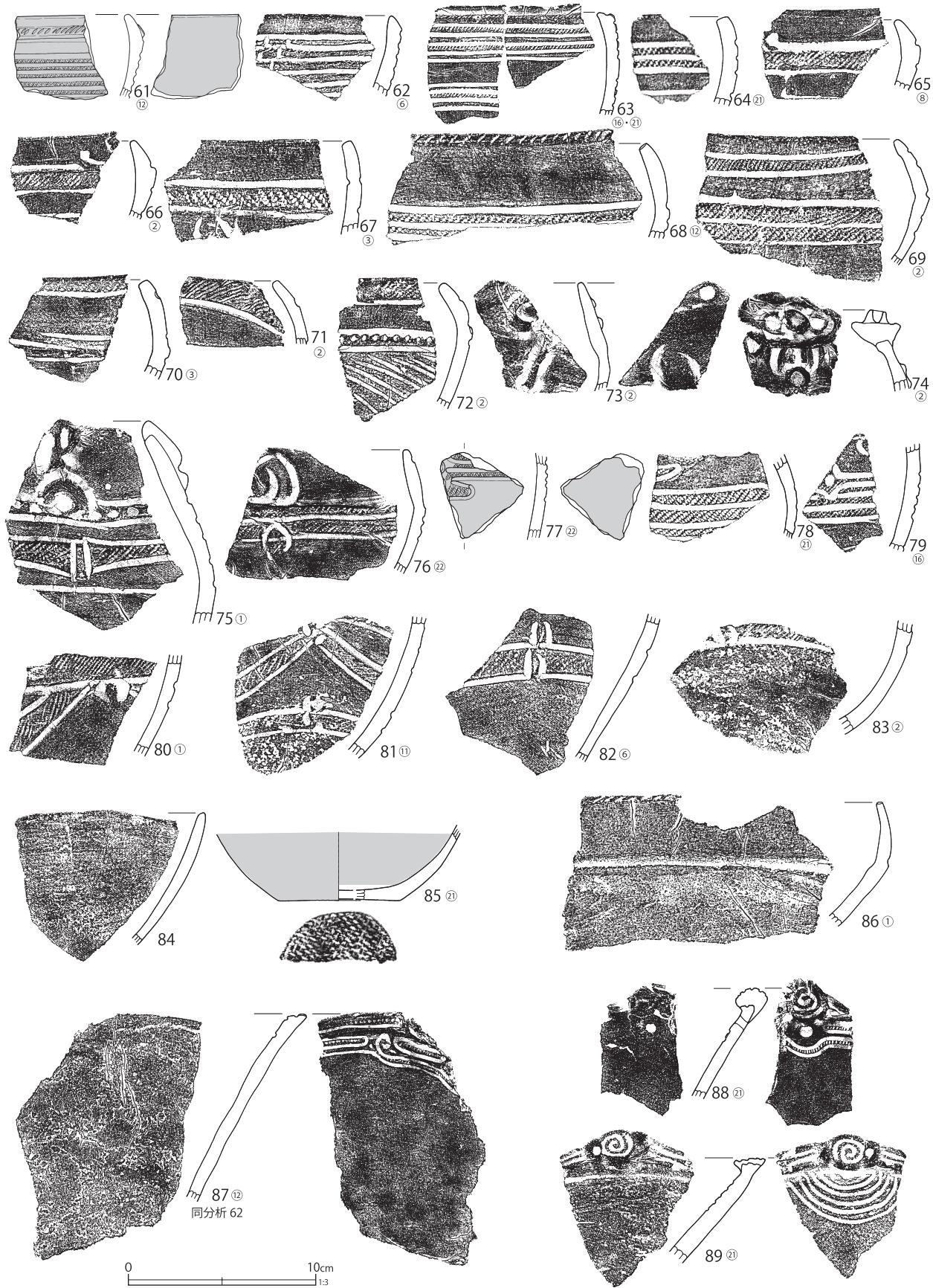
第75図 B2区出土土器 (1)



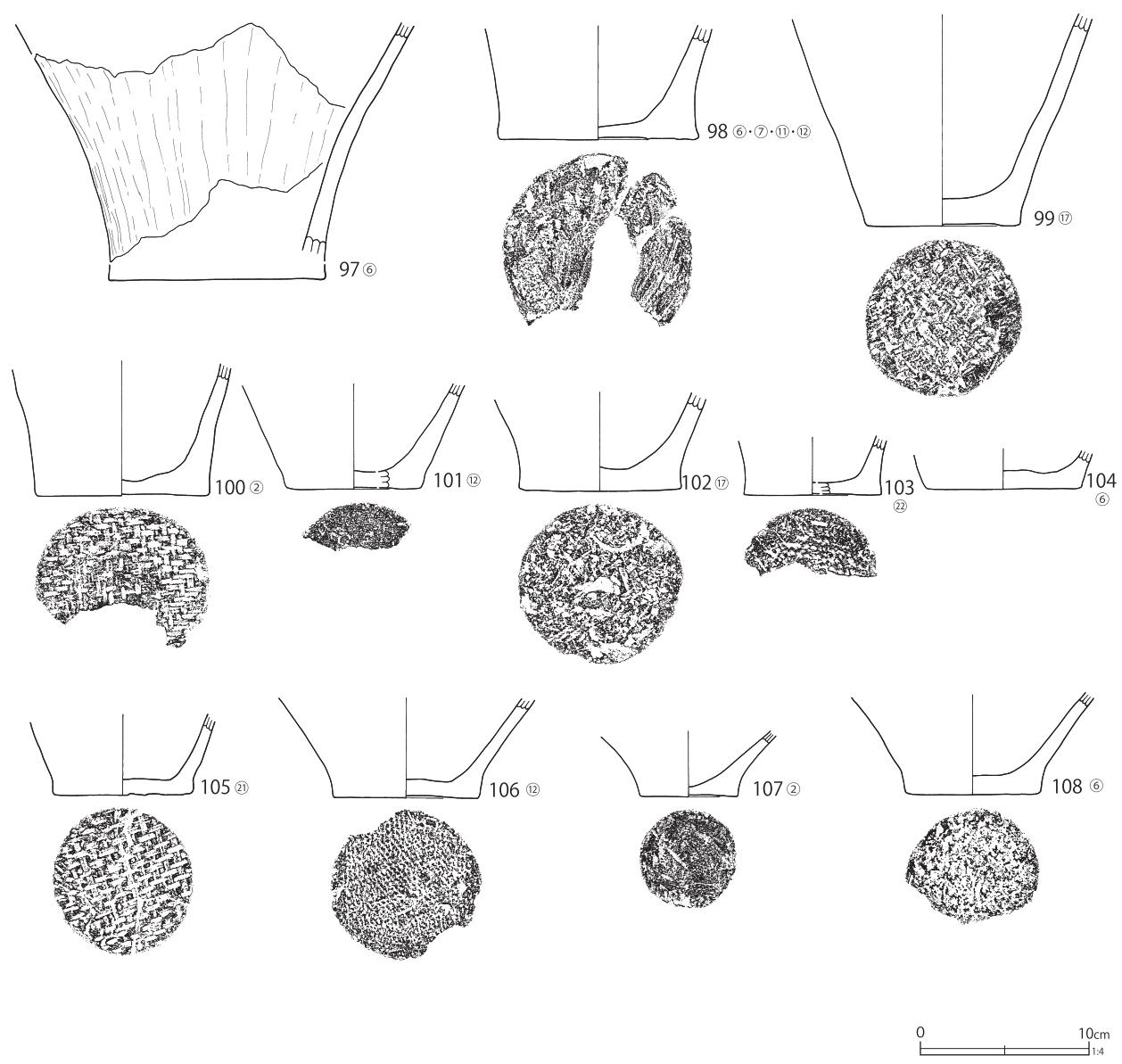
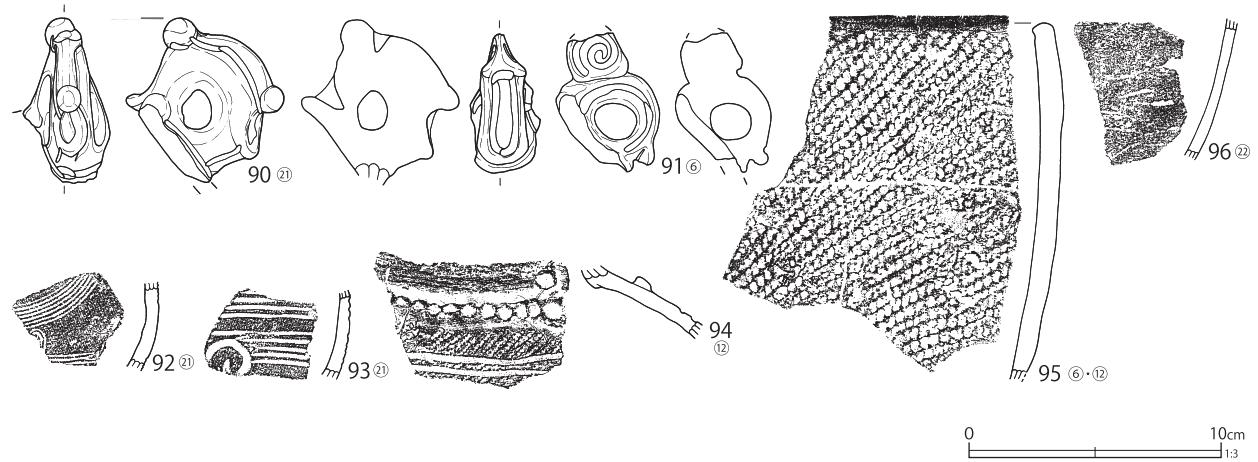
第76図 B2区出土土器(2)



第77図 B 2区出土土器 (3)



第78図 B2区出土土器(4)



第79図 B2区出土土器(5)

C 1 区の土器群 (第80~87図)

C 1 区は調査区東側に湾入する谷の南側の湾口部にあたり、後期第VI群から第VII群土器群を中心として、早期の第 I 群土器や中期の第III群土器も若干出土している。掲載土器157点、非掲載土器2,254点の合計2,411点が出土した。

第84図34は第 I 群第 2 類の早期条痕文系土器である。内外面に貝殻条痕が施文され、若干纖維が含まれる。

105は地文縄文上に蛇行する隆帶が施文されるもので、第 II 群土器の大木 5 式に相当する破片である。隆帶は指先で折られながら張り付けられる。

35~38は第 II 群第 5 類の十三菩提式とそれに伴う土器群である。35~37は集合沈線でモチーフが描かれ、35は三角印刻が施される。38は結束の羽

状縄文が施文される。

39、40は第 III 群第 2 類の中期中葉の土器群である。39は隆帶に沿って 2 列の細かな角押文が施されるもので、40は縦位沈線に沿って角押文が施文される。

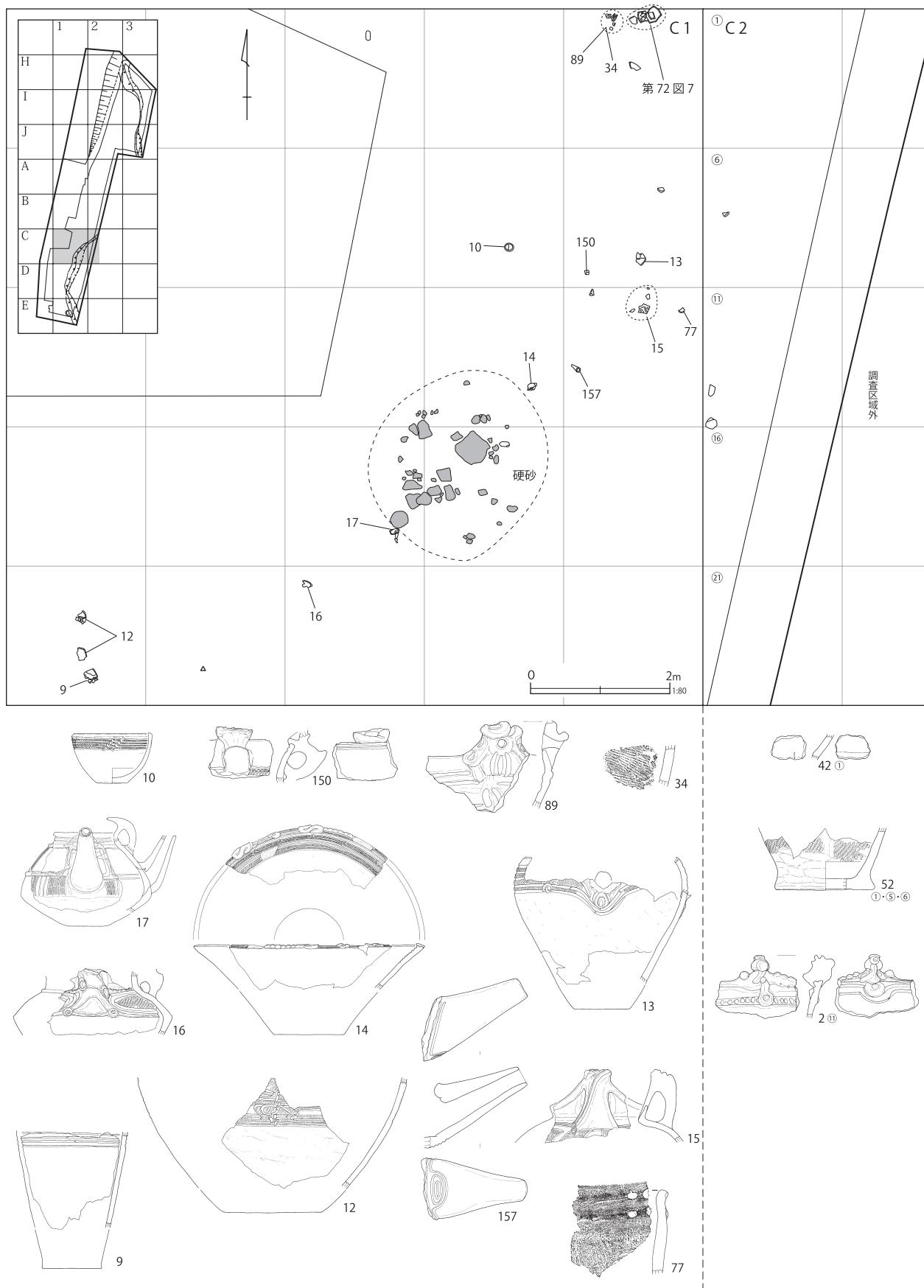
1、2、41~46は第 V 群土器の堀之内 1 式土器である。1は短い波状の口縁部が立ち、頸部で大きく括れて、膨らむ胴部へと移行する器形で、口縁部には円孔を囲む対弧状の沈線と盲孔を繋ぐ沈線が巡っている。胴部には 3 本沈線の渦巻文を連携するモチーフが施文される。2は縦位の太沈線と 2 本対の縦羽状の沈線が組み合わされる。41は盲孔を繋ぐ対沈線が施文される耳状把手である。42は曲線的な磨消縄文を施文するもので、43~46は多条の沈線で文様を描くものである。45は無地

第 13 表 C 1 区非掲載土器分類表

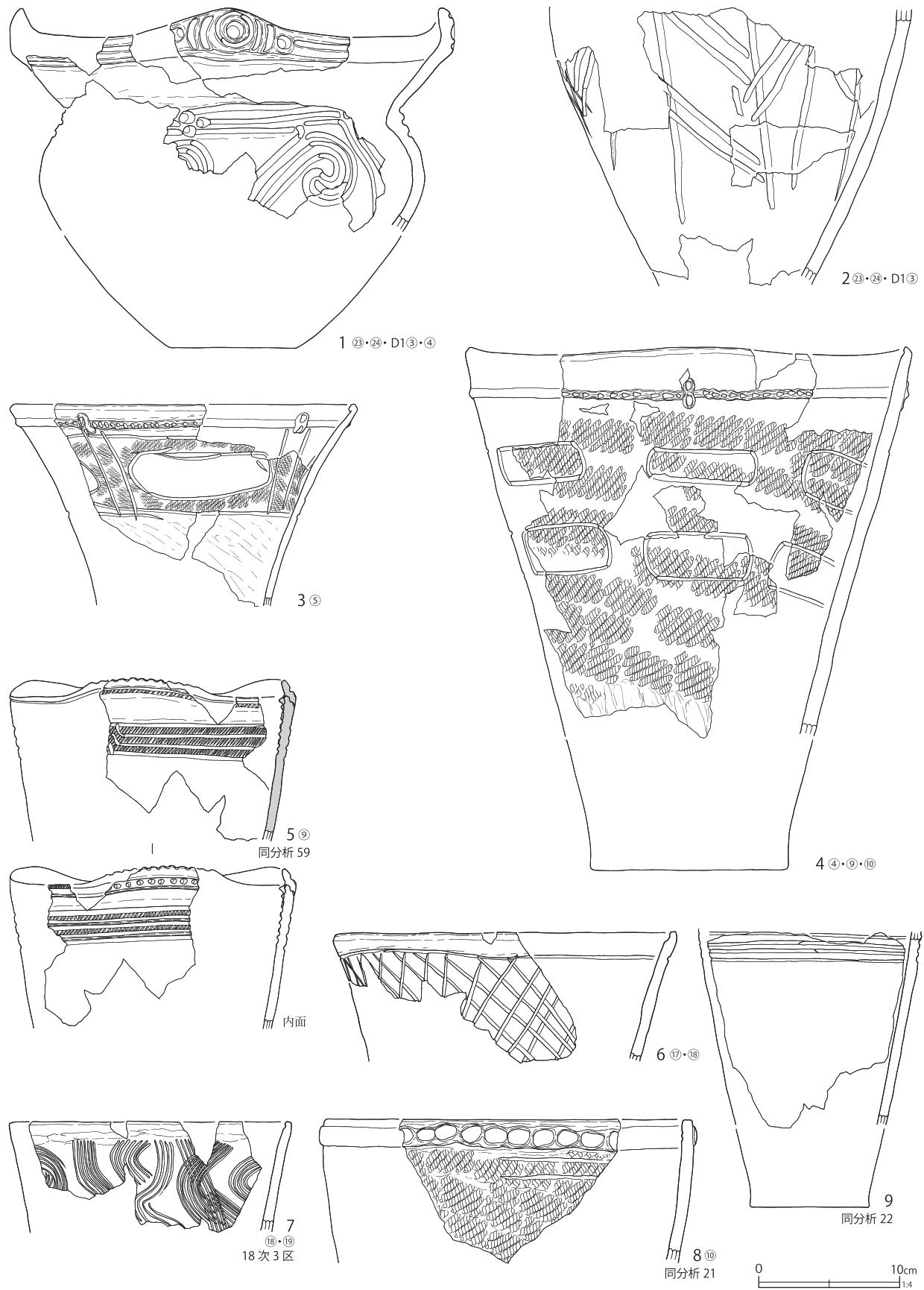
C 1 区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I 群	早期	撚糸文	1	1		2
		条痕文		1		1
小計			1	2	0	3
II 群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III 群	中期	五領ヶ台 2		1		1
		洛沢 / 勝坂 I				
		加曾利 E III		4		4
		加曾利 E IV				0
小計			0	5	0	5
IV 群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2		11		11
			0	11	0	11
V 群	後期	堀之内 1	17	61		78
		堀之内 2	99	275		374
小計			116	336	0	452
VI 群	後期	加曾利 B 1	54	199		253
		加曾利 B 2	11	21		32
小計			65	220	0	285
VII 群	後期	繩文のみ		172	1	173
		無文	10	1213	102	1325
小計			10	1385	103	1498
合計			192	1959	103	2254

第 14 表 C 2 区非掲載土器分類表

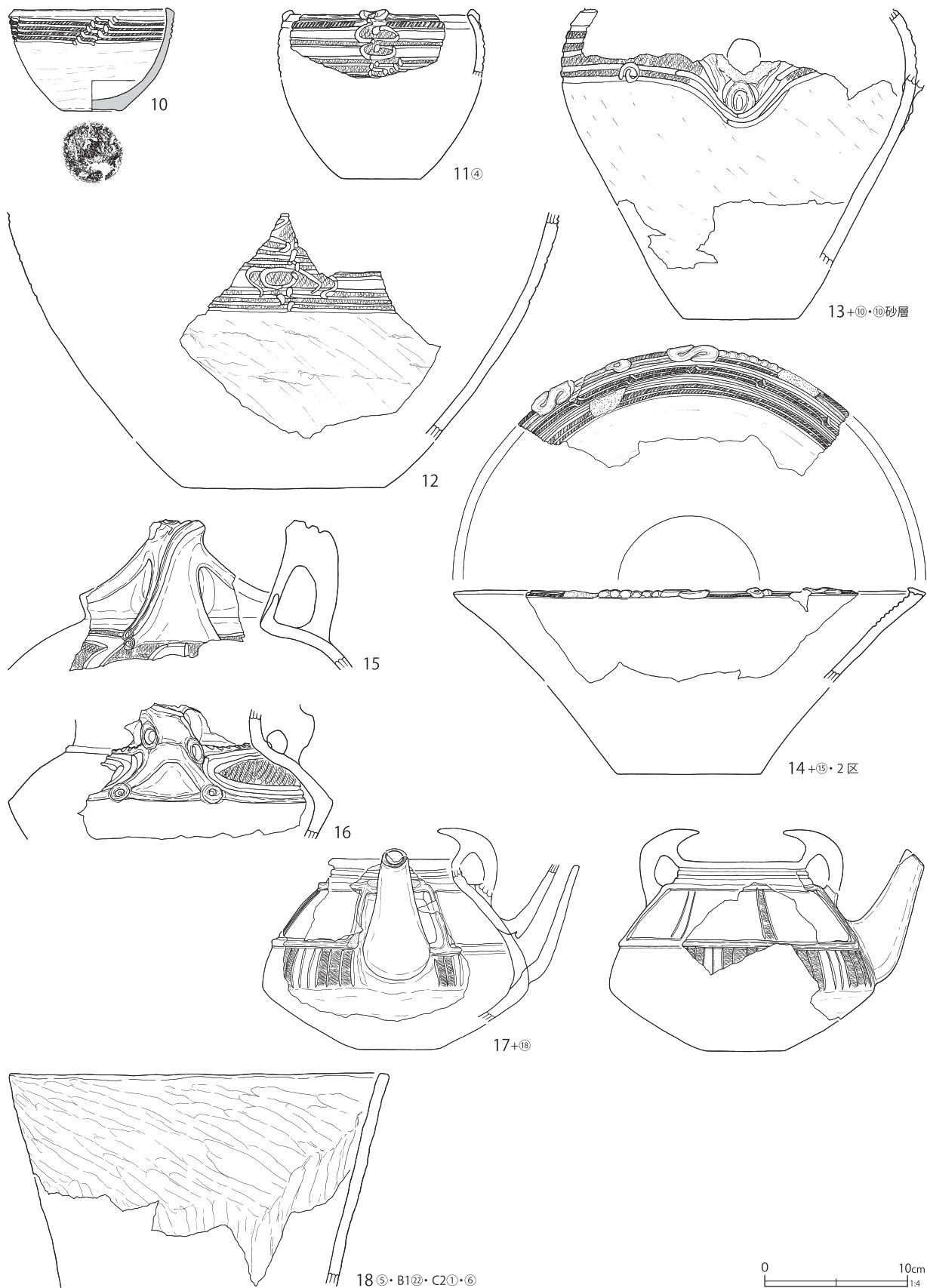
C 2 区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I 群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II 群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III 群	中期	五領ヶ台 2				0
		洛沢 / 勝坂 I				0
		加曾利 E III				0
		加曾利 E IV				0
小計			0	0	0	0
IV 群	後期	五領ヶ台 2				0
		洛沢 / 勝坂 I				0
		加曾利 E III				0
小計			0	0	0	0
V 群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2				0
小計			0	0	0	0
VI 群	後期	堀之内 1	1	10		11
		堀之内 2	17	51		68
小計			18	61	0	79
VII 群	後期	加曾利 B 1	12	43		55
		加曾利 B 2		18		18
小計			12	61	0	73
VIII 群	後期	繩文のみ		58		58
		無文	5	255	18	278
小計			5	313	18	336
合計			35	435	18	488



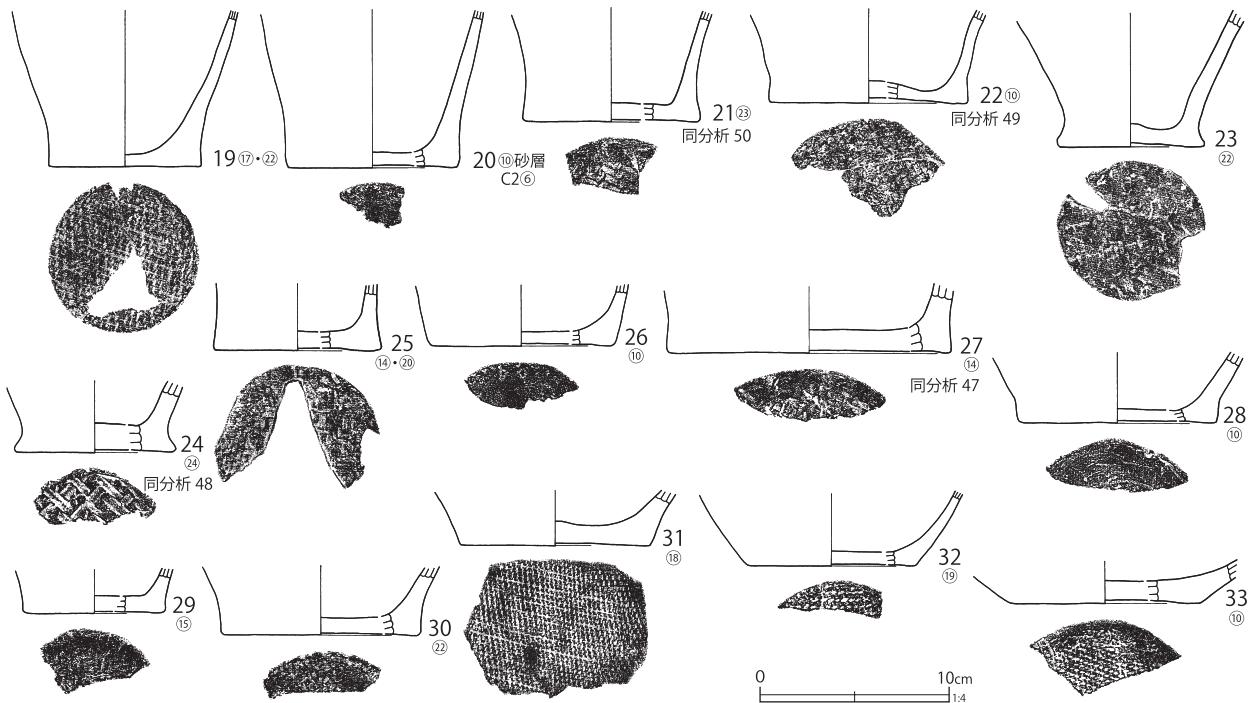
第80図 C1・C2区土器分布図



第 81 図 C 1 区出土土器 (1)



第 82 図 C 1 区出土土器 (2)



第83図 C 1 区出土土器 (3)

文上に、46は深い縄文上に施文されている。

3、4、47~70、77は第VI群土器のバケツ形の深鉢で、3、4、47~60は口縁部に刻みのある隆帶と「8」字状貼付文が施される。3は縦位区画と橢円区画文、4は地文縄文上に長方形区画文が施される。53~54は内文が施文され、54、55の口唇部には刻みが施される。61~70は胴部破片で、70は胴部で括れる器形の土器である。77は口縁部に太い隆帶が巡り、口唇部と対になる円形刺突文が4カ所に施文される。

71~76は無地文上に沈線の文様が描かれる第VI群の深鉢で、71から74は西関東系の土器群である。

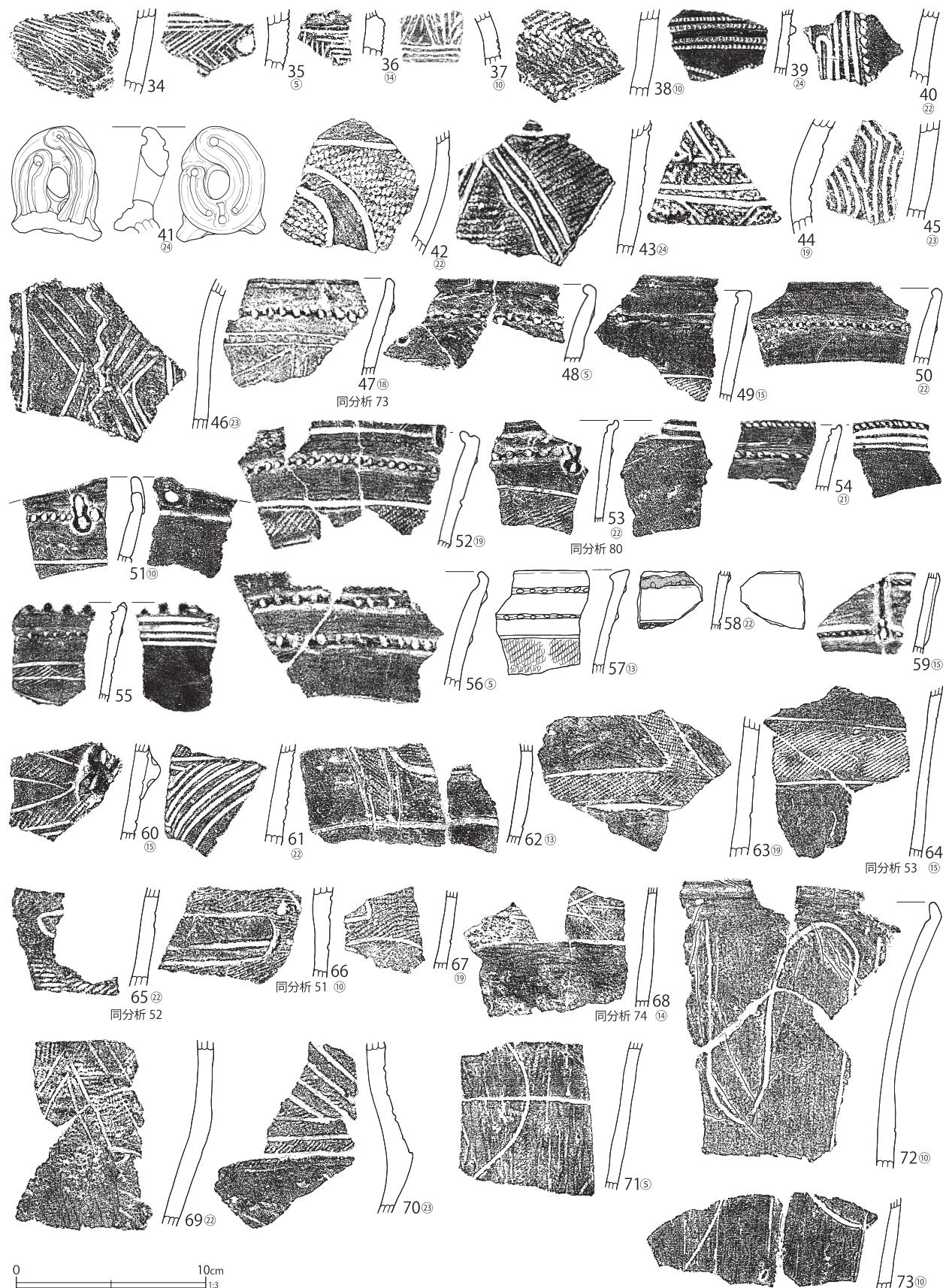
7は条線の曲線文が垂下する第VI群の深鉢で、口縁部がナデ整形で区画されている。第VI群土器である。

78、79、81、82は型式学的に第VII群の加曾利B 1式成立直前段階の、第VI群の深鉢である。78、79、81は同一個体で、口縁部に円形突起が付き、内文が施文される。円形突起には異方向の刻みが施され、角頭状の口唇部上には沈線が巡る。口唇部周りには、挟り込む沈線は施文されていない。

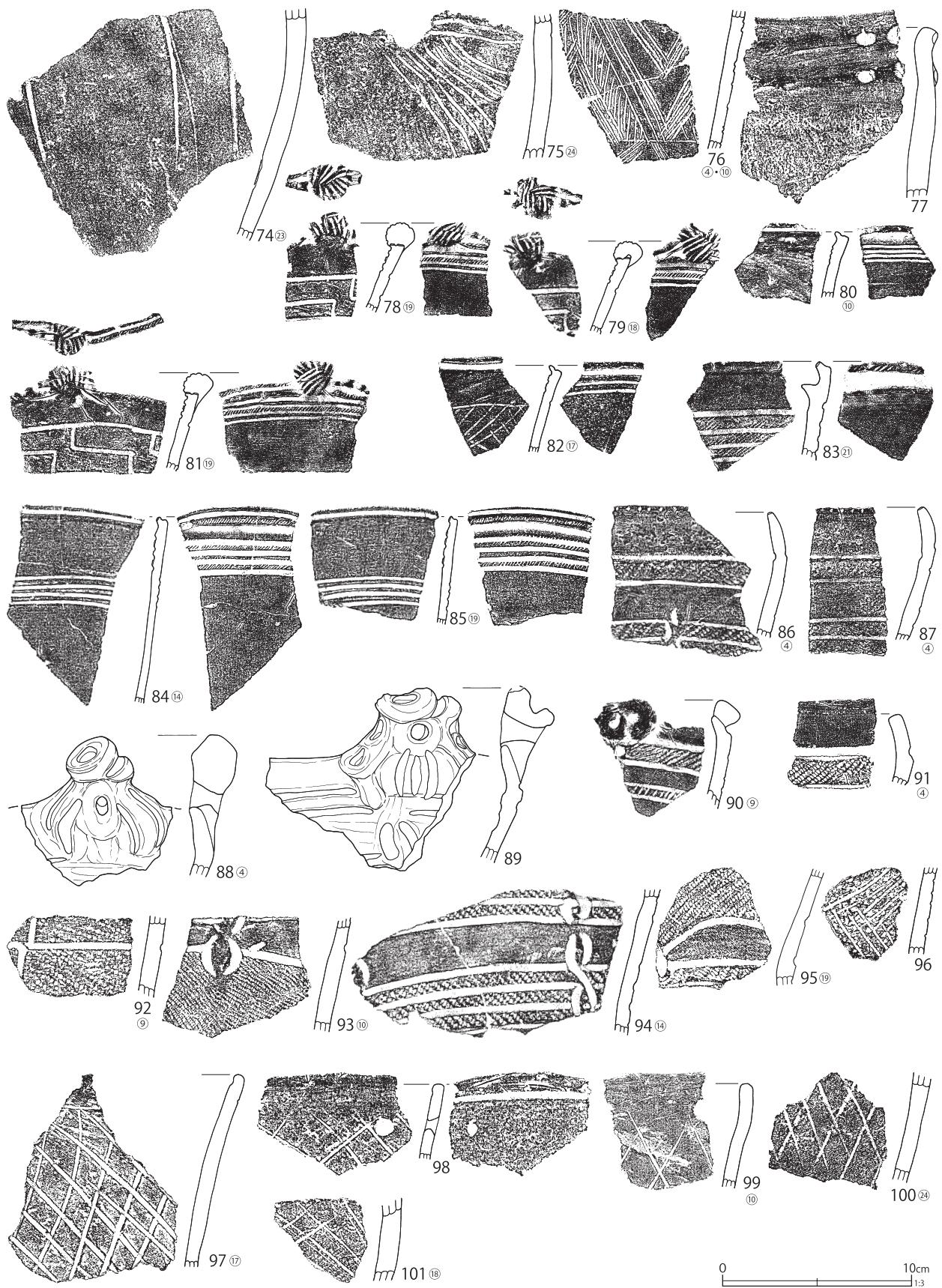
81は破片下端部が沈線部分で欠損していることから、文様帶にはクランク状の沈線文を持つ幅狭な文様帶が区画されるか、もしくはもう1段の施文帶が区画される可能性がある。クランク状文は平行沈線間を区切る手法ではなく、一筆書きで施文されており、加曾利B 1式の区切り文とは異なる。加曾利B 1式の区切り文の祖形になる可能性がある。また、81は突起間で大きな刻みを施す口唇部では、口唇上の沈線内に細かな円形刺突列が施されており、同時期の浅鉢や直後の加曾利B 1式成立期の口唇部形態の祖形になっている。82も同様で、口唇上や内文に沈線が使用され、口唇内端部が突出する様相も、加曾利B 1式成立直前段階を示している。

これに対して、80は同様の口唇部形態と沈線の内文を持ち、突出する口唇内端部下に抉り状の沈線が施文され、加曾利B 1式成立期の様相を示している。型式学的に堀之内2式と加曾利B 1式を区分する基準となろう。

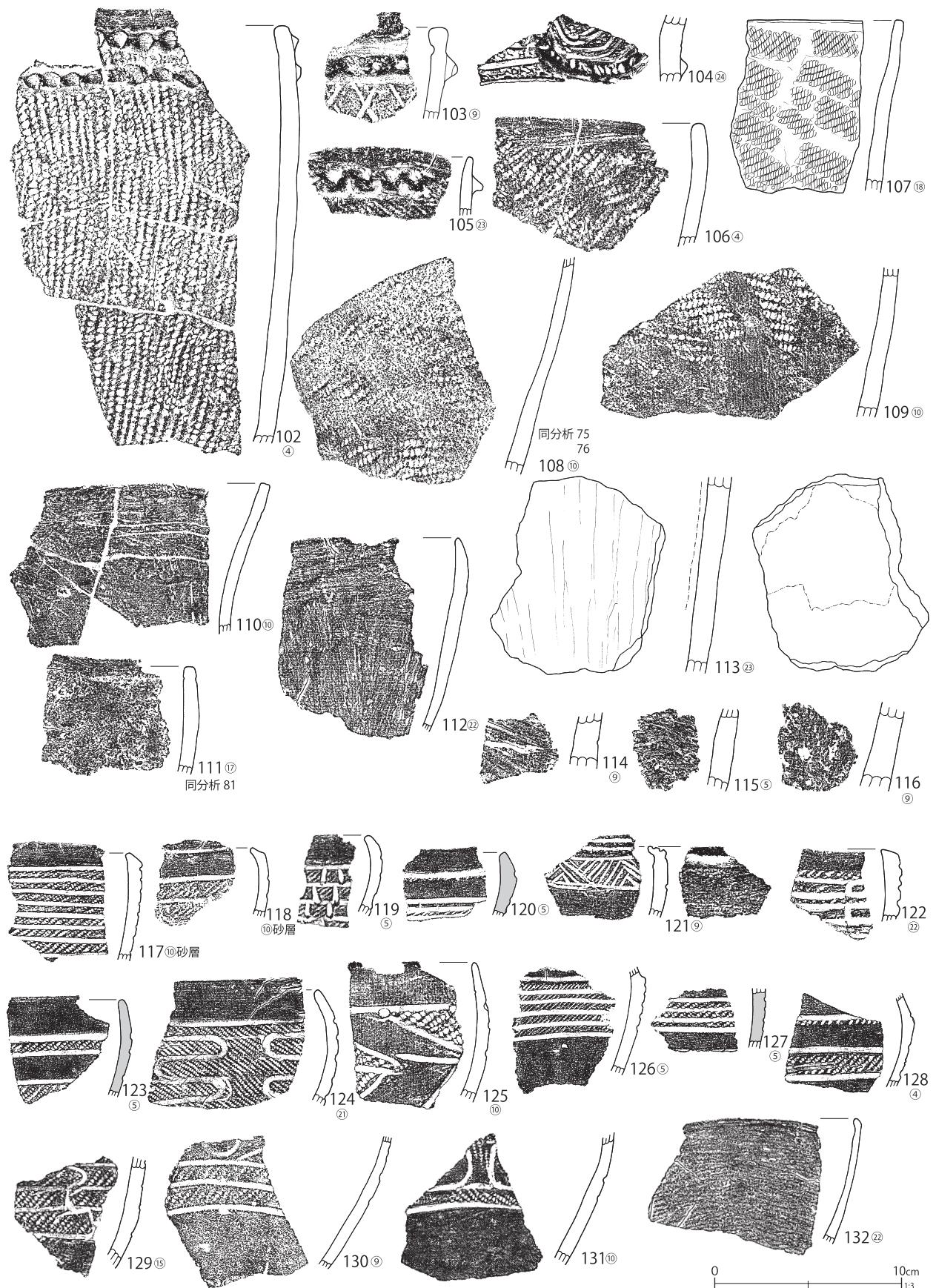
5、80、83~85は第VII群のバケツ形を呈する深鉢で、5は3単位の小波状を呈する。波状部の口



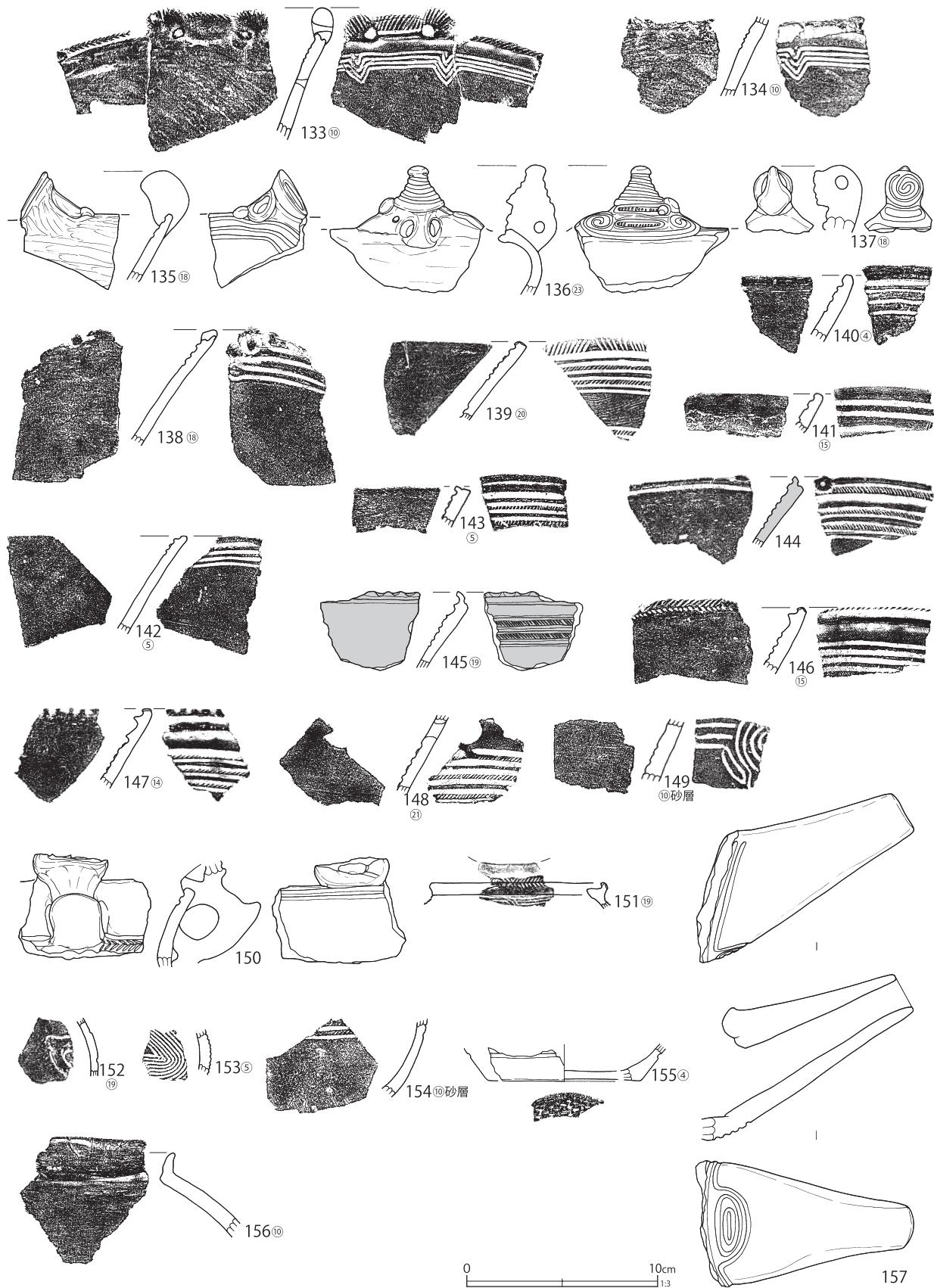
第84図 C1区出土土器(4)



第85図 C1区出土土器(5)



第86図 C1区出土土器 (6)



第 87 図 C 1 区出土土器 (7)

縁内湾部には、円形刺突文列が施される。84、85は同一個体であり、内文が施文される口縁部裏面には抉り込みの沈線が施文される。

86、87、90、91は胴部で括れる第VII群の深鉢で、86は鉤状の区切り文が施文され、90には非対称の突起が付く。

88、89は対称形の突起が付く3単位突起深鉢で、88は突起部の円孔に対弧状の沈線が沿って施文され、89は円孔下に川字状の3本沈線が垂下する。第VIII群土器である。

92～95は深鉢の胴部破片で、クランク状の区切り文が施文される土器群で、92は第VII群、対弧文や綾繩状対弧文が施文される93～95は第VIII群土器である。

6、97～100は格子目文が描かれる第VII群の深鉢で、6、97は同一個体である。口縁部が沈線で区画され、胴部に幅広く格子目文が施文される。

96は地文縄文上に矢羽状の細い集合沈線が施文されるもので、東関東系の土器である。

8、102、103は紐線文土器で、8は口縁部に平行沈線文の名残が施文されており、102は地文縄文施文後に、隆帶が施文されている。103は格子目文が施文される。8、103は第VII群土器と思われる。104は楕円の隆帶区画文が施文されるもので、時期は不詳である。

18、106～113は第IX群土器の深鉢で、107は縄文施文土器、18、110～116は無文土器で、113は裏面に厚く炭化物が付着する。

10～12、117～137は第VI群～第VIII群の鉢である。

133～137は第VI群の鉢で、133、134は同一個体であり、円形突起2連で突起を構成し、円形突起下の内文沈線が山形状に突出して施文されている。135～137は突起の付く鉢で、135は口縁部が外反する器形で、136と137は口縁部が内湾する器形である。

10～12、117～124、126～129、131は第VII群の

鉢である。10、117、120、126は幅の狭い平行沈線帯のみが施文されるもので、10は2個対の区画文が1段ずつずれて右下がりのクランク状に組み合わされ、さらに全体的に左へずれる構成の区画文が施文される。117、126には区切り文はみられない。

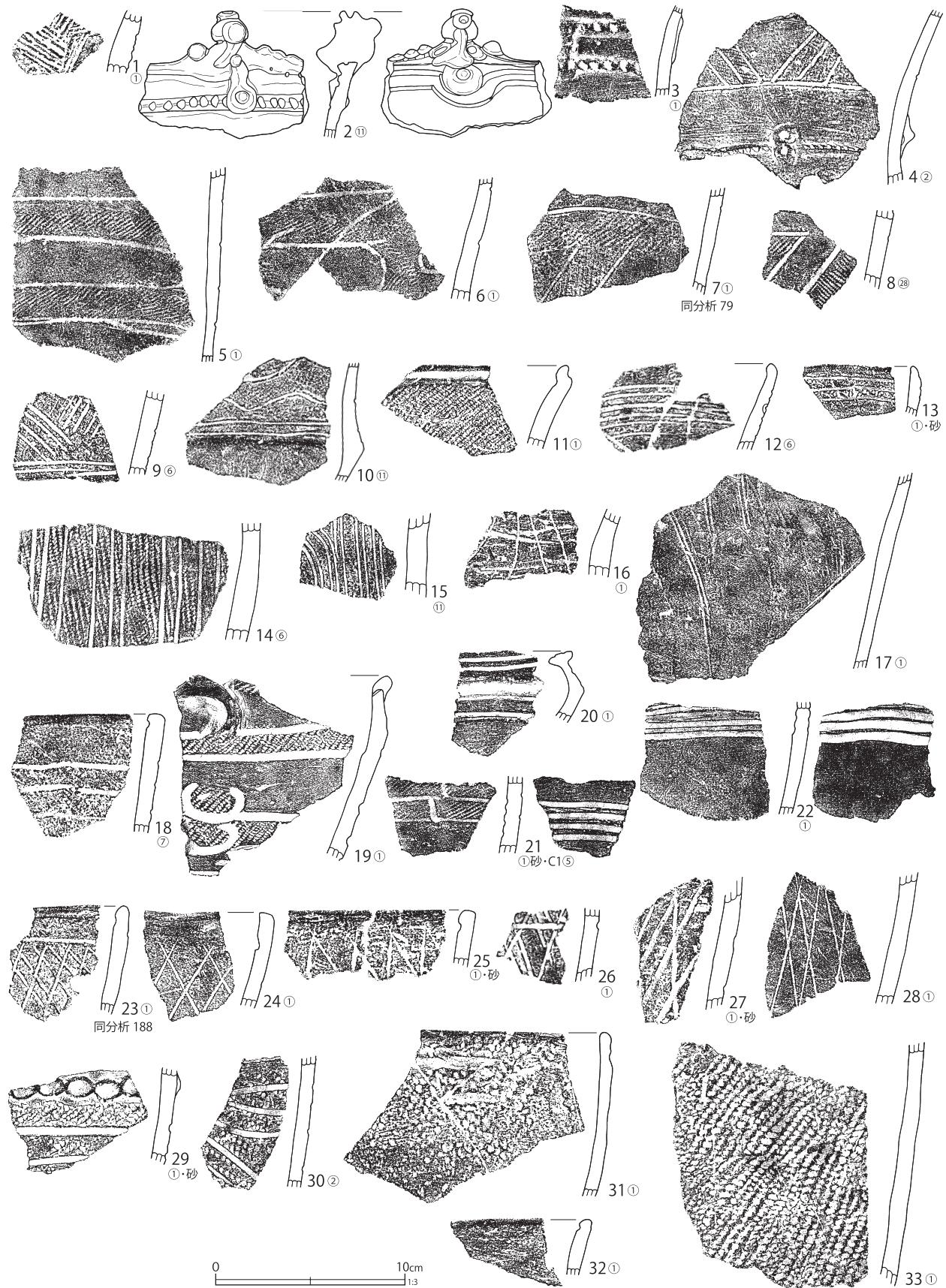
11は突起下の刻文帯下に「の」字状文が2段に施文され、さらにその下位の平行沈線帯に10と同様の区切り文が施文される。12は大形の鉢で、平行沈線帯に区切り文、無文帯に「の」字状文の変形した単位文が施文される。118、119、122はやや間隔の広い平行沈線帯に、119は左にずれる平行短沈線の区切り文が、122は「の」字状文が施文されている。121は集合鋸歯状文が幅狭の1帯に施文される。123は縄文帯で、128は刻みが施されて肩部が区画され、127は平行沈線帯が2帯施文される。124、129は平行沈線文施文後に向きの異なる弧線区切り文を連結させる蛇行区切り文が施文されて、楕円状区画文が構成される。131は縄文帯間に反対向きの弧線文が施文されて横長の楕円文が区画されている。

125は円形刺突文を起点とした縦位のジグザグ文が施文され、130は胴部に曲線と斜線を組み合わせた文様が施文されている。第VIII群になるものと思われる。

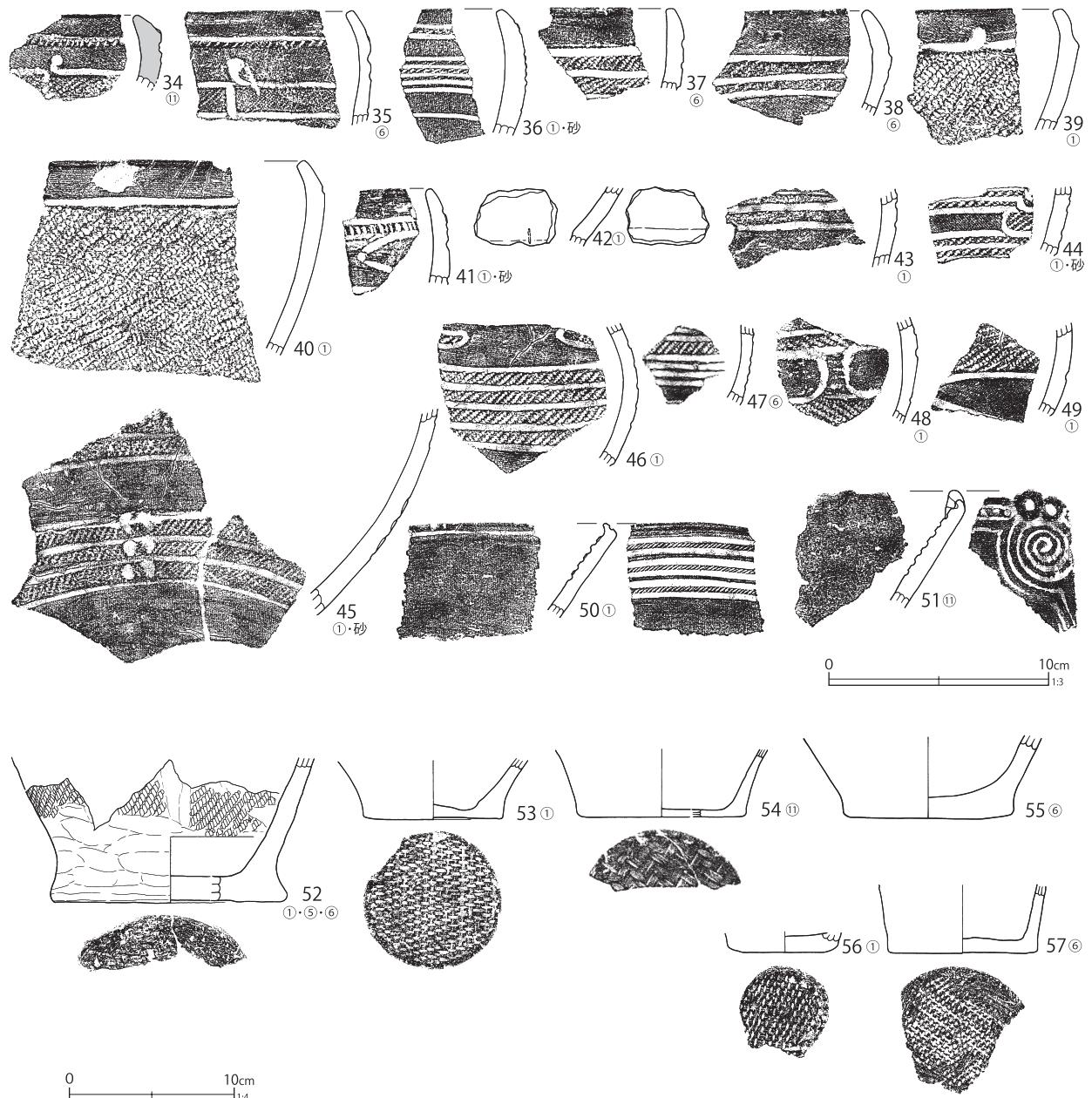
132は無文の浅鉢で、口縁裏面に沈線が巡ることから第VII群土器と思われる。

14、138～149は浅鉢である。138～143は口縁部周りに抉り状の沈線が施文されないことから、第VI群の浅鉢である。その中でも139の口唇下の内面沈線には、沈線が抉り状化する直前段階の様相が観察される。内面の刻文帯間には、細かな縄文L Rが施文されている。

14、144～147は第VII群の浅鉢で、口縁部内面に抉り状の沈線が施文される。14は口唇部に扁平な隆帶の横「S」字状の突起が付き、口唇部の突起間に部分的に刻みを施している。口唇部上には



第 88 図 C 2 区出土土器 (1)



第89図 C 2区出土土器 (2)

沈線が施文され、口縁部内面には抉り状の沈線が巡っている。内文の沈線帯には左にずれる区切り文による右下がりのクランク状文が施文されている。文様帯下端には2列の刻文帯が施文されている。第VII群初頭の浅鉢である。148は口縁部に円孔のあく第VII群の浅鉢であり、149は第VI群の浅鉢の胴部である。

13、15~17、150~157は注口土器である。16

は第V群の、15、17、150、152、156、157は第VI群の、13、151、153は第VII群の注口土器である。15、17はソロバン玉形の注口土器で、磨消縄文のモチーフが施文される。13は腰高な器形で、沈線文帯が注口部を巻くように施文され、部分的に「の」字状単位文が施文されている。175は太く、大きな注口部で、下側に沈線の同心円文が施文されている。第VI群の注口土器である。

C 2区の土器群 (第80、88、89図)

狭小な調査区で、掲載土器57点、非掲載土器488点の合計545点が出土した。

第88図1は第II群第5類の十三菩提式土器で、

集合鋸歯状沈線文の間に印刻文が施される。

2、3、5～9は第VI類土器のバケツ形の深鉢で、磨消縄文で幾何学文が施文される。2は丸い突起が付き、内文が施文される。4、5は胴部が括れる深鉢で、4は括れ部に「8」字状貼付文を持つ隆帯が施文されている。11、12、14～17も胴部で括れる第VI群の深鉢で、11、14は縄文施文、12、15～17は沈線文のみ施文される土器群である。

18～19、21は第VII群の土器の深鉢で、18は平行沈線帯が、19は縄文帯上にU字状の単位文が、21は沈線の区切り文が施文される。20は内折する口縁部を持ち、口唇上に2本沈線が巡る鉢の可能性がある。21、22は内文が施文される。

23～28は格子目文土器で、23と26は横位の沈区画が施される。29、30は紐線文土器である。

31～33は第IX群土器の深鉢で、31、33は縄文が施文され、32は無文である。

13、34～45は鉢である。いずれも口縁部が内湾する鉢で、34、35、39には円形刺突文やそれを鉤状に繋ぐ区切り文が施文される。39、40は体部に縄文のみが施文される。41は肩部が刻文帶で区画され、刺突文を繋ぐジグザグ文が施文されている。42は赤彩の痕跡があり、44、45は「の」字状文が施文される。46、48は楕円状の区画文が施され、45は胴部下端の平行沈線帯に、縦位に連なる対弧文が3段に施文される。49は斜行する沈線文が施文される。40、49は第VIII群土器と思われる。

50、51は口縁部が直線的に開く浅鉢で、51は円形貼付文下に沈線渦巻文の内文が施文される第VI群の、50は刻みを施す沈線帯のみの内文が施文される第VII群の浅鉢である。

52～57は底部で、54、55は鉢の底部、他は深鉢の底部である。

D 10区の土器群 (第90～96図)

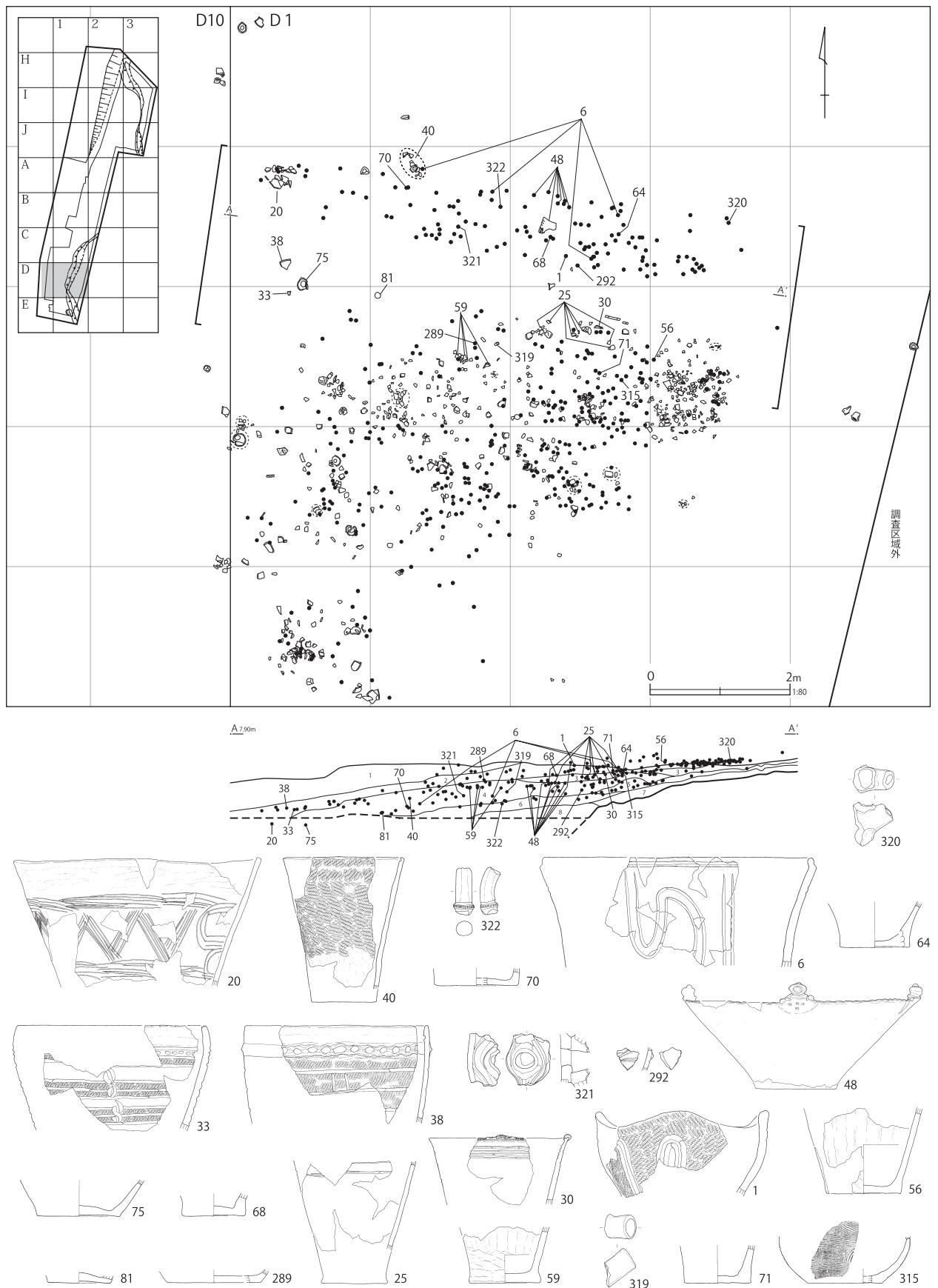
D 1区から続く調査区であるが、狭小であるため掲載土器5点、非掲載土器10点の合計15点が出土した。

第96図3は第VI群土器の深鉢、4、5は第VII群土器の深鉢である。4は内文が施文され、内湾する口縁部に円形刺突文が施文される。5は格子目文土器である。2は鉢の底部と思われる。

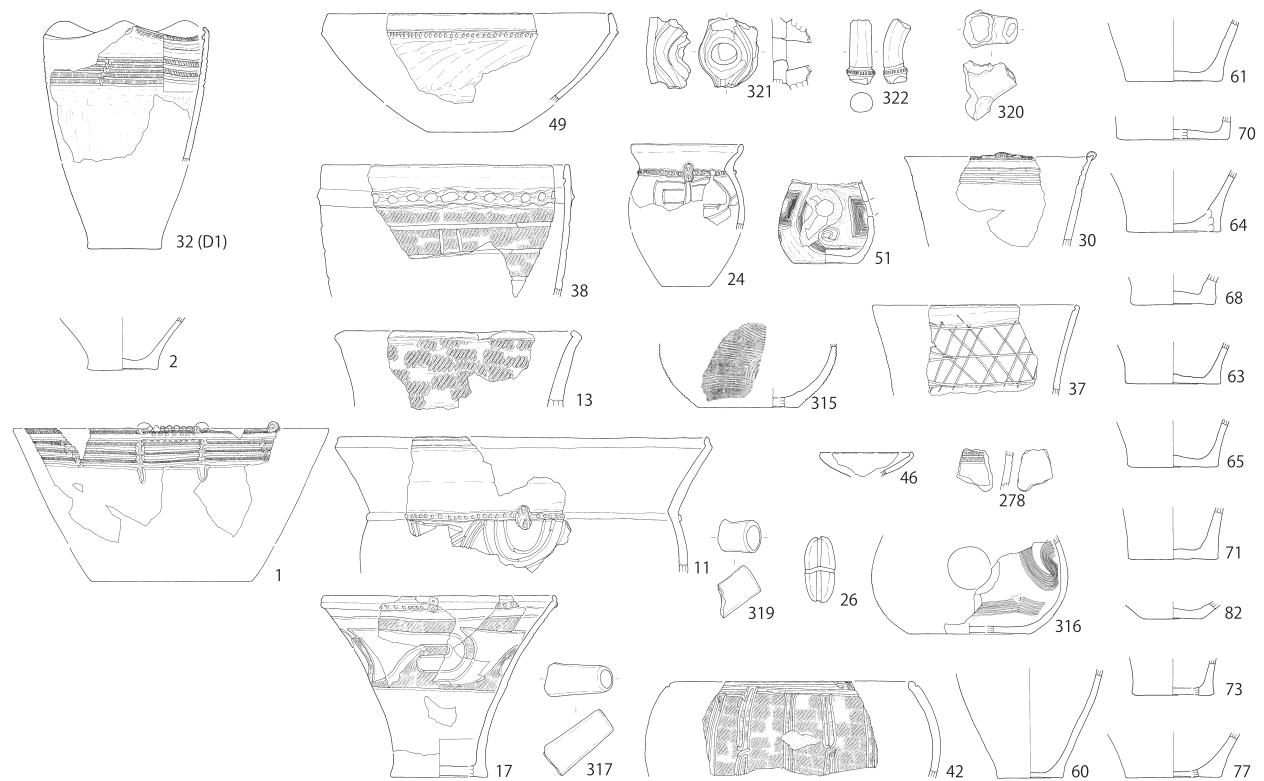
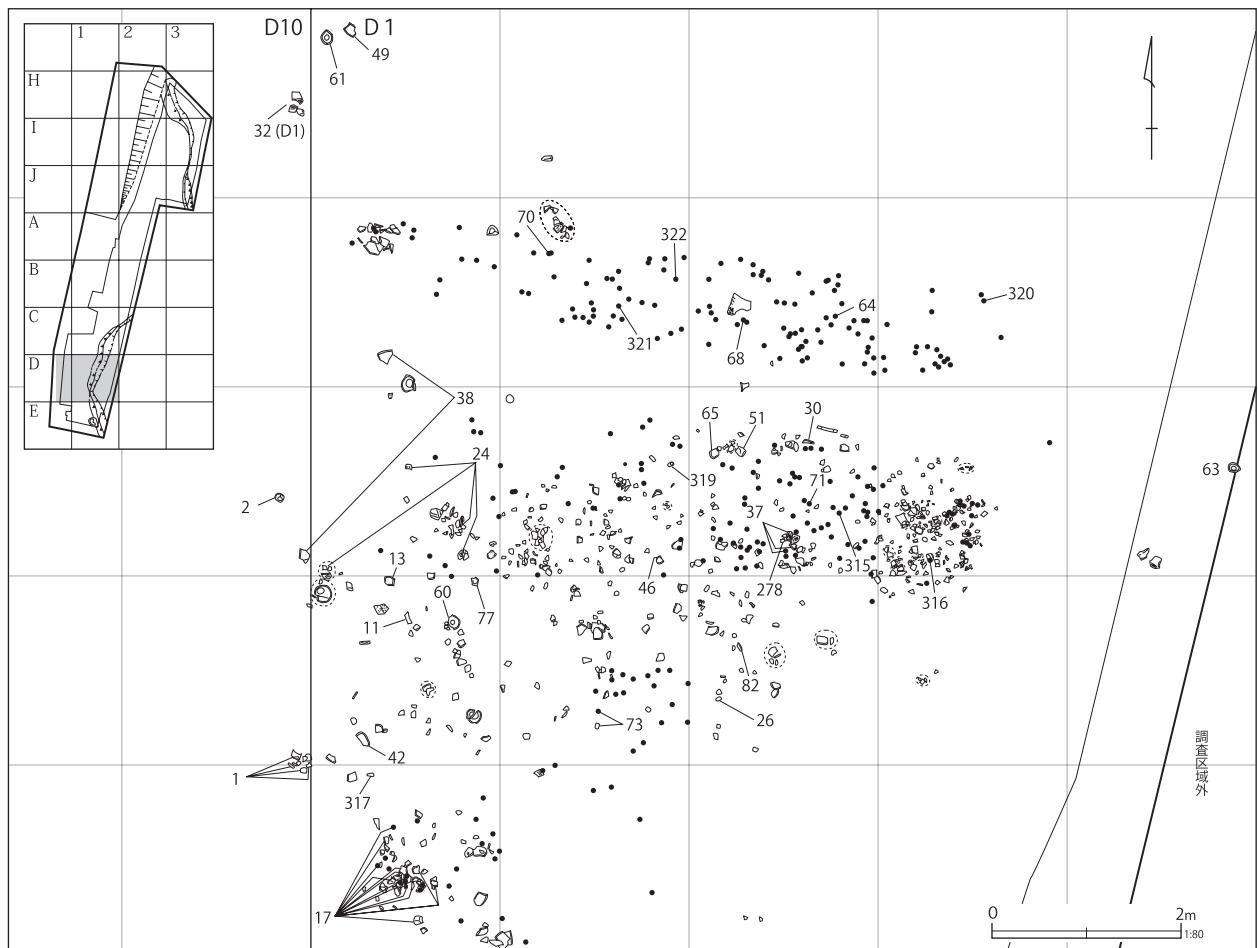
1は第VII群土器の平底の鉢である。口縁の対になる突起を基準に、突起間の口唇部に刻みと、口唇部上の沈線内に刺突文列が、さらに下位の抉り状沈線部及びその下の沈線内にも刺突文を施文する。内文の沈線帯は突起下で区切られ、突起間に楕円文、それ以外の内文に右側にずれるクランク状区切り文が施文されて、刻みが施される。

第15表 D 10区非掲載土器分類表

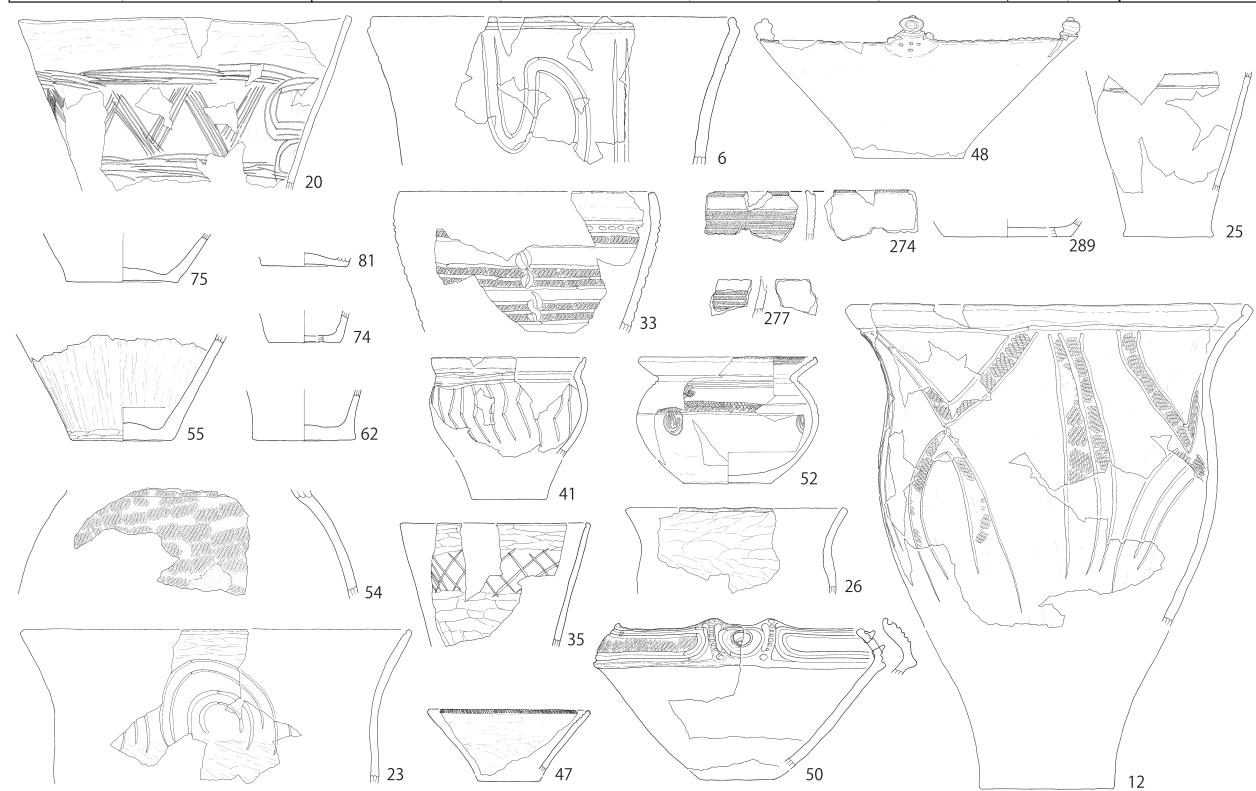
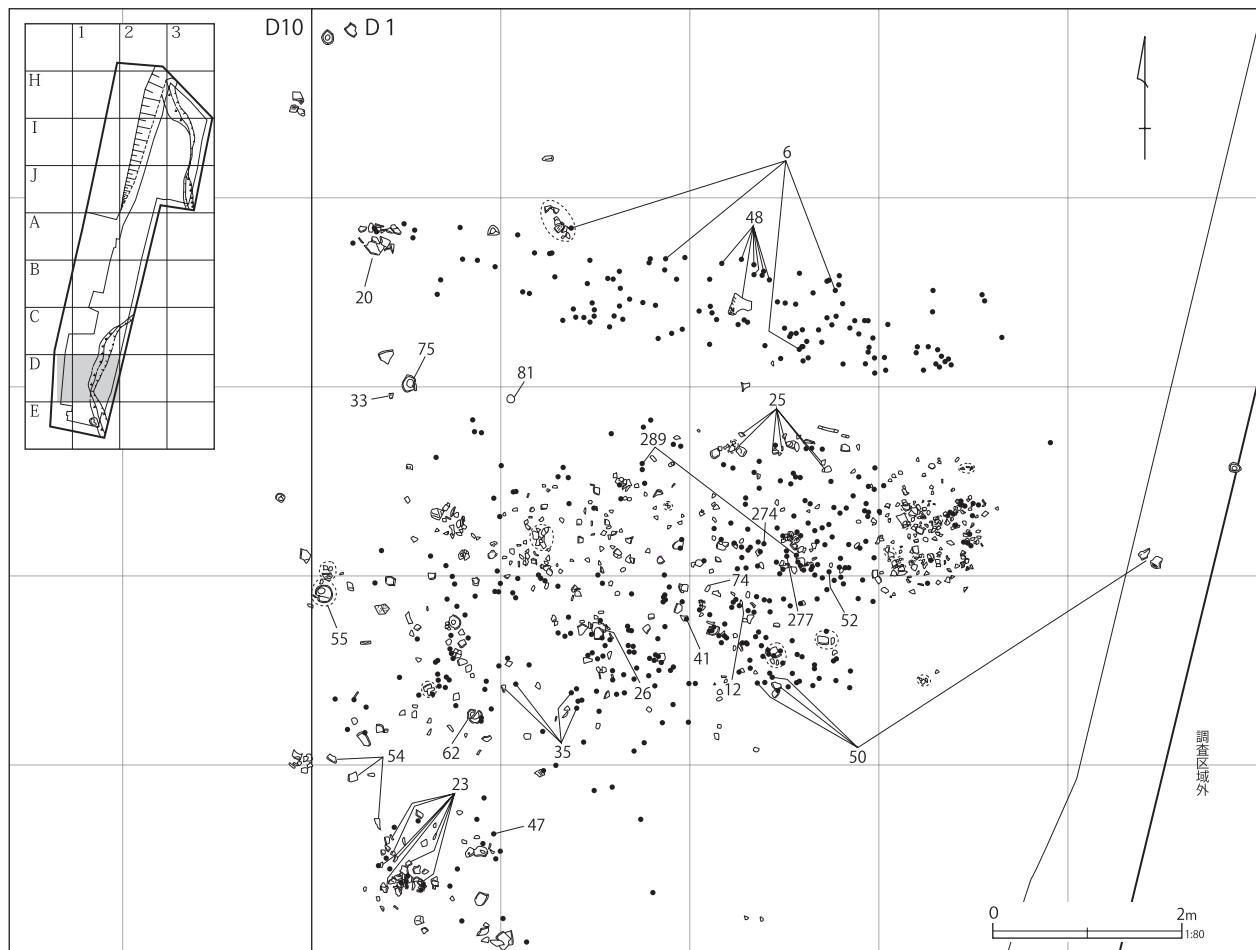
D 10区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯a				0
		諸磯b / 浮島				0
		諸磯c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III群	中期	五領ヶ台式				0
		貉沢 / 勝坂I				0
		加曾利E III				0
		加曾利E IV				0
小計			0	0	0	0
IV群	後期	称名寺1				0
		称名寺2				0
小計			0	0	0	0
V群	後期	堀之内1				0
VI群		堀之内2		4		4
小計			0	4	0	4
VII群	後期	加曾利B 1		2		2
VIII群		加曾利B 2				0
小計			0	2	0	2
IX群	後期	縄文のみ				0
		無文		4		4
小計			0	4	0	4
合計			0	10	0	10



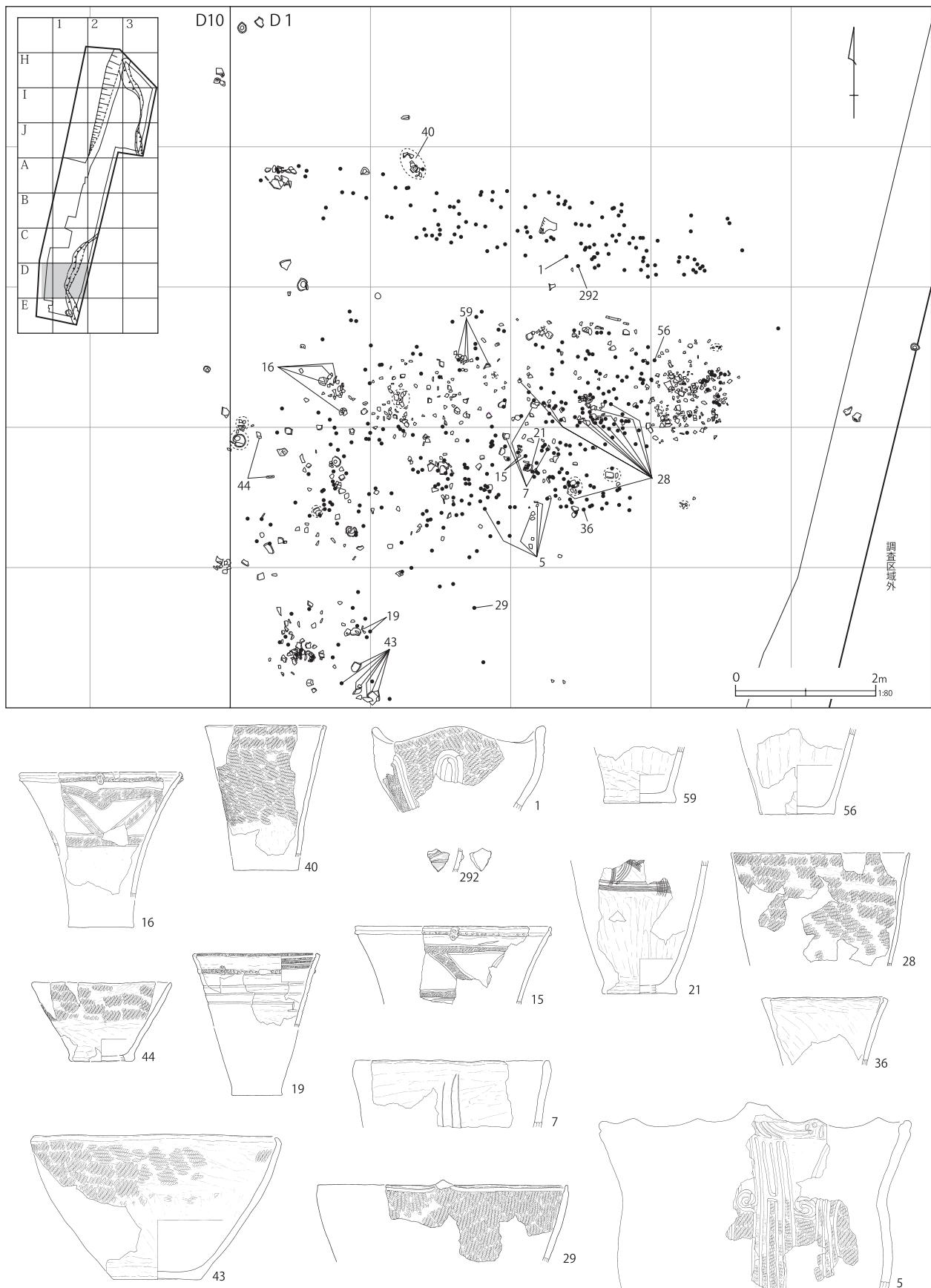
第90図 D10・D1区土器分布図(1)



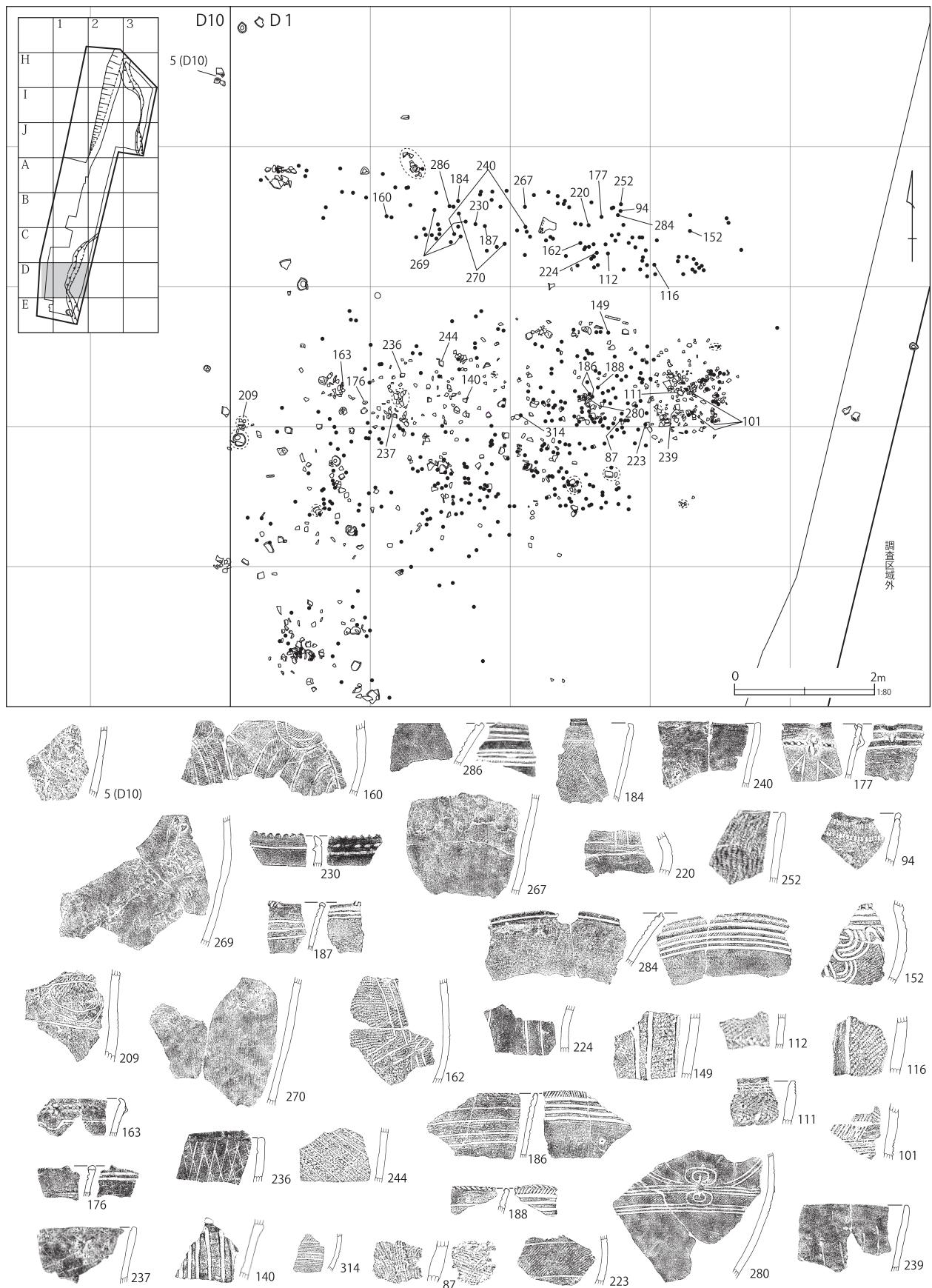
第91図 D 10・D 1区土器分布図 (2)



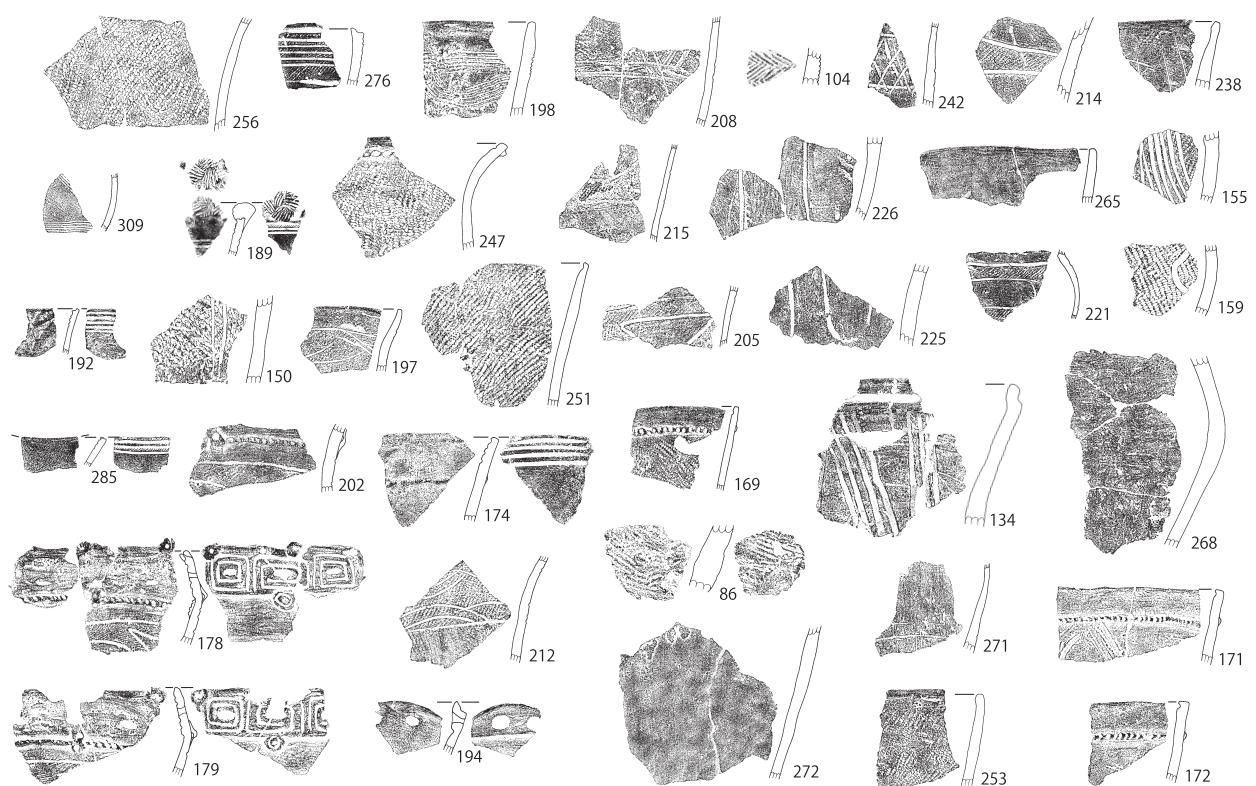
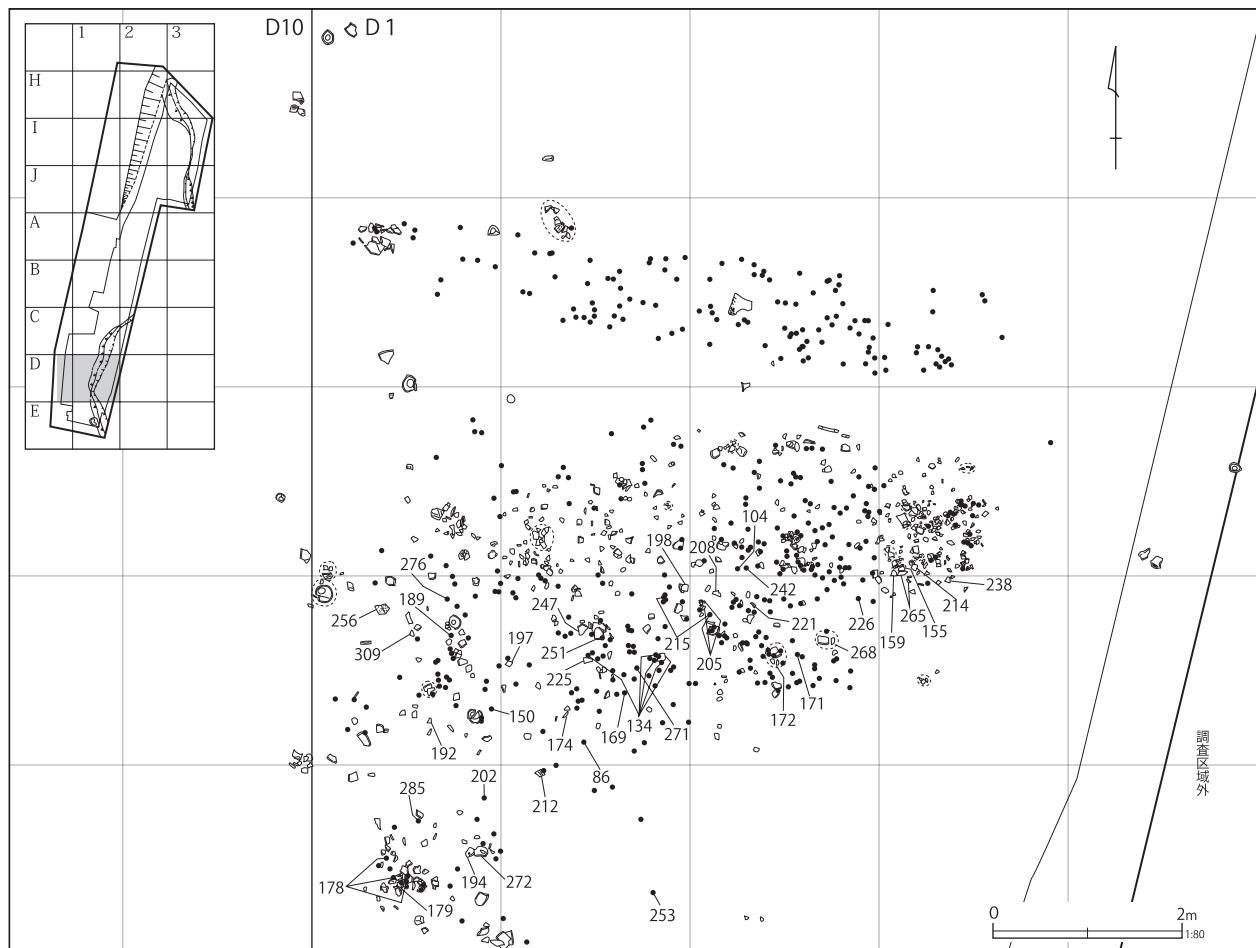
第92図 D 10・D 1区土器分布図 (3)



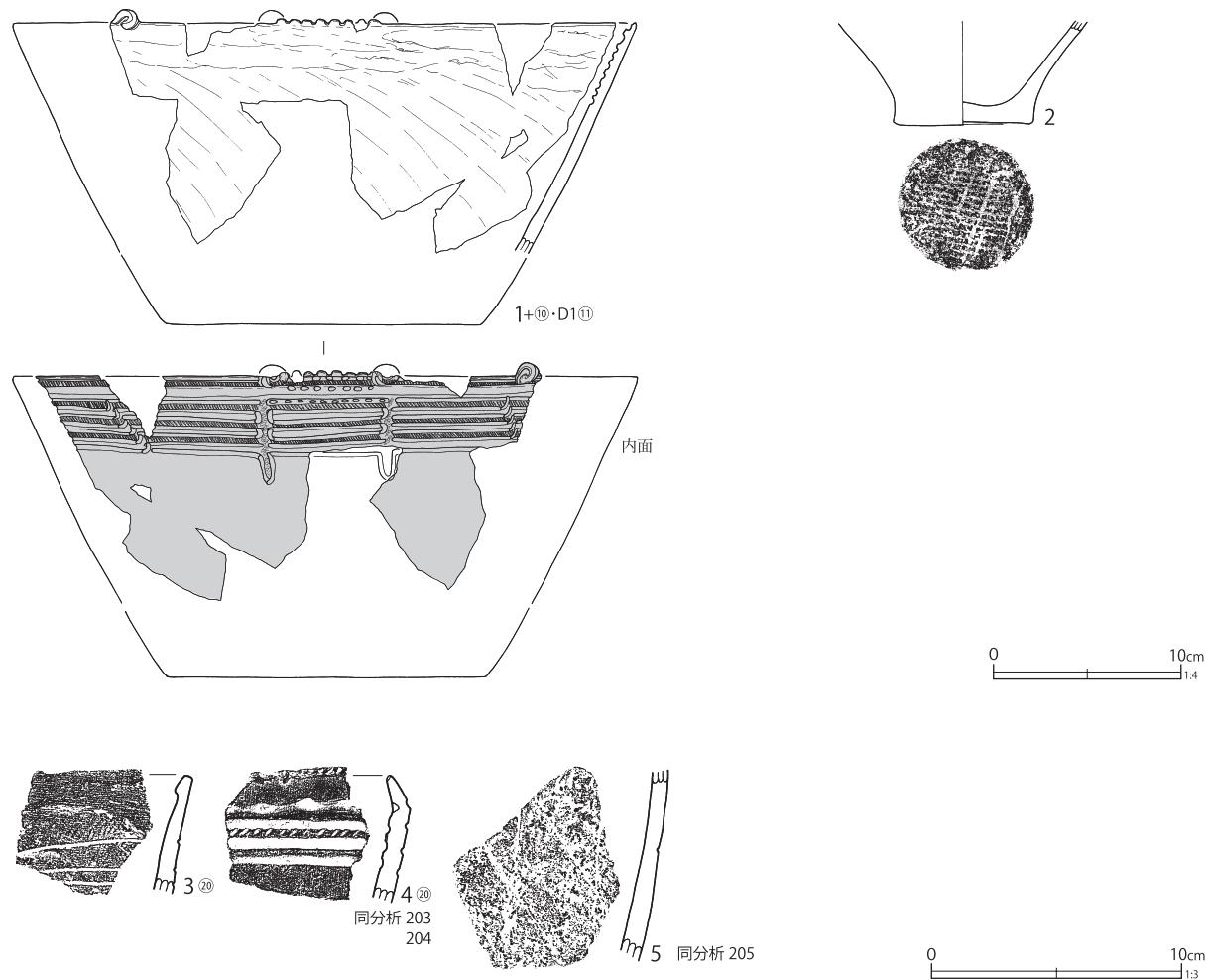
第93図 D 10・D 1 区土器分布図 (4)



第94図 D10・D1区土器分布図(5)



第95図 D10・D1区土器分布図 (6)



第 96 図 D 10 区出土土器

D 1 区の土器群 (第 90~95、97~112 図)

D 1 区は台地からの裾部が張り出して続き、調査区の中で 2 番目に土器群が多く出土した地点で、各時期の土器群が出土している。掲載土器 326 点、非掲載土器 3,120 点の合計 3,446 点が出土した。

第 105 図 83~91 は早期の第 I 群第 2 類の条痕文系土器群である。83 は内削状の口唇部外端に刻みが施され、平行沈線の櫛状区画の交点には円形刺突文が施文され、区画内に集合結節沈線が充填施文される鶴ヶ島台式土器である。84~91 は表裏面に条痕文が施文される土器群で、纖維が少量含まれている。

92~122 は前期の第 II 群土器群で、94 は波状口縁部に 2 列の刺突文を沿わせる第 2 類諸磯 a 式土

器である。

92、93、95~98 は第 3 類諸磯 b 式土器で、92 は平行沈線文が、95~98 は刻みが施される浮線文が施文される。93 は縄文のみ施文される。99~102 は第 4 類諸磯 c 式土器で、99、100 は円形貼付文が付き、101、102 は集合沈線が施文される。

103~110 は第 5 類十三菩提式土器で、集合沈線文間に三角印刻が施文されている。

11、112 は結束羽状縄文が施文されるもので、第 4 類~第 5 類に伴うものと思われる。

1、3、113~119 は第 III 群第 3 類の加曾利 E III 式土器である。1 は 4 単位の波状口縁で胴部が括れる器形を呈し、磨消縄文の褶曲文が描かれる。

3は胴部に条線文を施文する深鉢である。113～118は磨消懸垂文が施文される。

2、119～121は橋状把手や曲線磨消縄文、微隆起線区画が施される第4類の加曾利E IV式土器である。2は口縁が内湾し、胴部で括れる器形で、口縁部を隆起線で区画し、上半部に磨消縄文の渦巻文等が施文される。

4、122～129は第IV群である。123は波状口縁で、独立したモチーフ内に縄文が施文される第1類称名寺1式終末の土器である。4は胴部で強く括れ、区画内が無文となり、122、124～129も区画内が無文となる第2類の称名寺2式土器である。127は平口縁で、124、129は把手が付く。他は波状口縁を呈する。

5～14、130～162は第V群の堀之内1式土器群である。5、8は地文縄文上に沈線文が施文されるもので、5は幅狭な口縁部文様帯を持ち、渦巻文が派生する多条沈線文が垂下される。8は縄文地文上に沈線の懸垂文と不規則な蛇行沈線文が施文される。131、138、137、149～151、153～159も地文縄文上に平行沈線もしくは多条沈線が施文される深鉢である。

6は口縁部が内接し、胴部がやや括れる深鉢で無地文上に褶曲する平行沈線文が施文される。西関東系の土器群である。7は胴部に3本の細沈線が垂下する。130、132～135は口縁部が沈線で区画され、無地文上の胴部に多条沈線が垂下施文されるものである。138～148も無地文上に多条沈線の懸垂文と斜行沈線、蛇行沈線が組み合わされている。9は無地文上に沈線のモチーフが施文される底部である。

10、11は頸部で強く括れ、無文の口縁部が開き、胴部が膨らむ器形を呈し、頸部の貼付文を起点とする重弧文やそれらを挟む紡錘状の多条沈線が垂下される土器である。152は同種の土器であるが、地文に縄文が施文されている。160も膨らむ胴部に、多条沈線間に縄文を施文する縄文帯が垂下す

る。第VI群になる可能性もある。

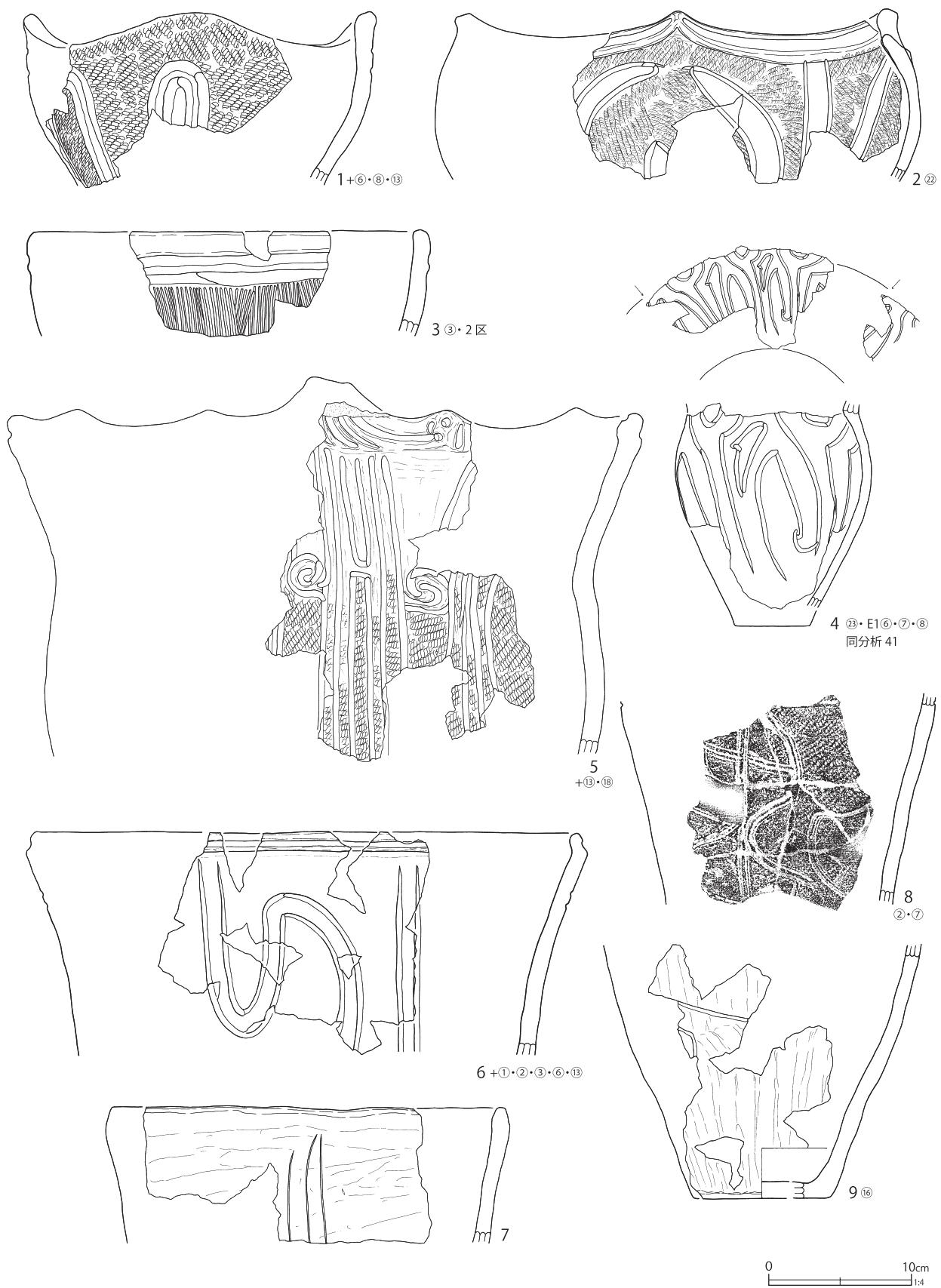
12は第IV土器第2類称名寺2式の中で、加曾利E式系列隆帶文土器のモチーフの系譜下にある第V群土器と思われる。沈線で無文の口縁部が区画され、胴部には3本沈線間に縄文を施文する懸垂文が垂下されて、「V」字と逆「U」字縄文が対向するモチーフが磨消縄文で施文される。

13、14も口縁部が内折して開き、胴部がやや括れる第V群の深鉢で、14は口縁部の盲孔を持つ円形貼付文間に沈線が施文され、胴部には渦巻文を連結する磨消縄文が施文される。

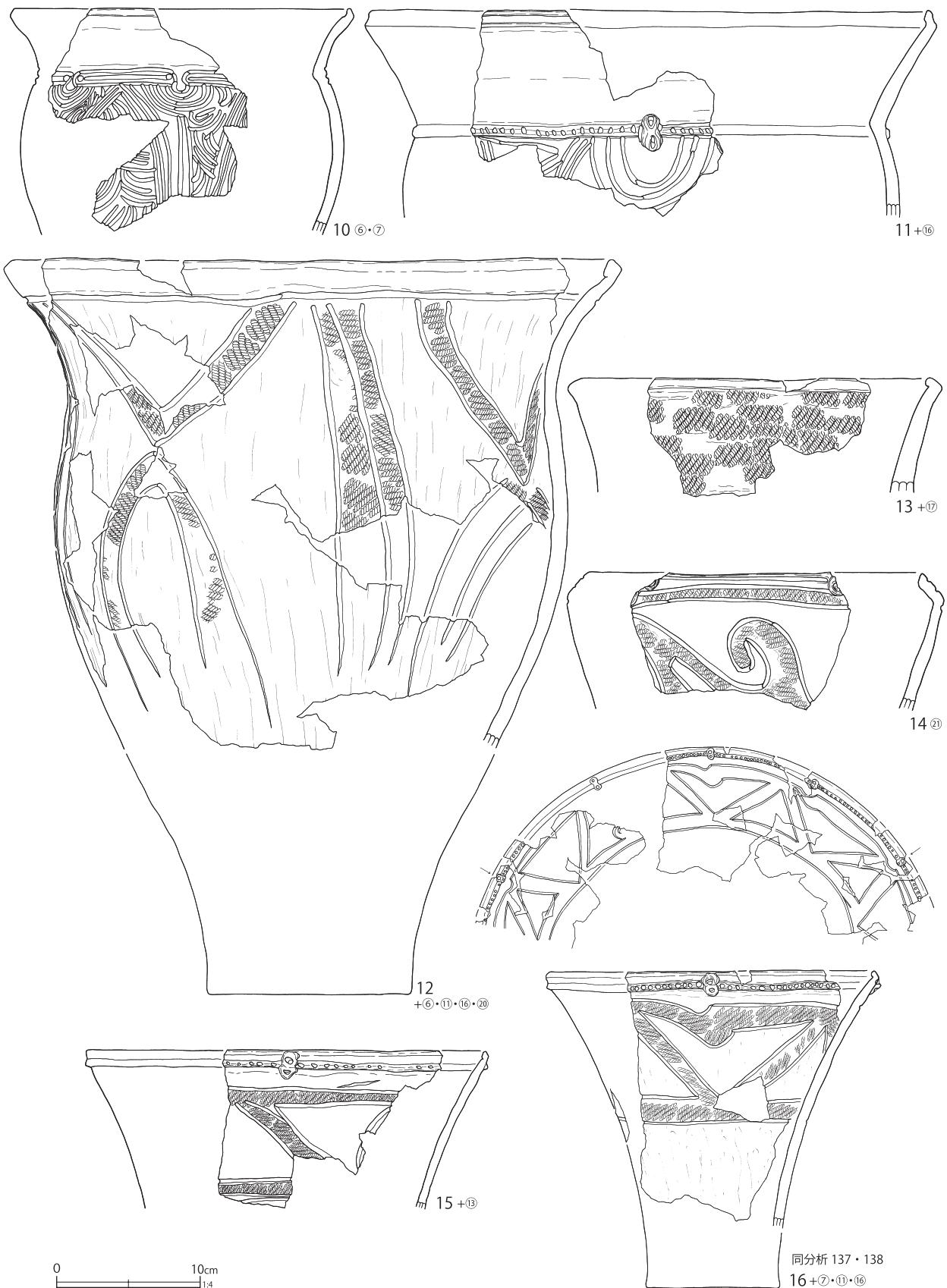
15～19、163～198は第VI群土器のバケツ形を呈する深鉢である。15～17、19、163～179は口縁部に隆帶が巡り、「8」字状貼付文が付けられる土器群である。15、17は磨消縄文の三角区画文

第16表 D 1 区非掲載土器分類表

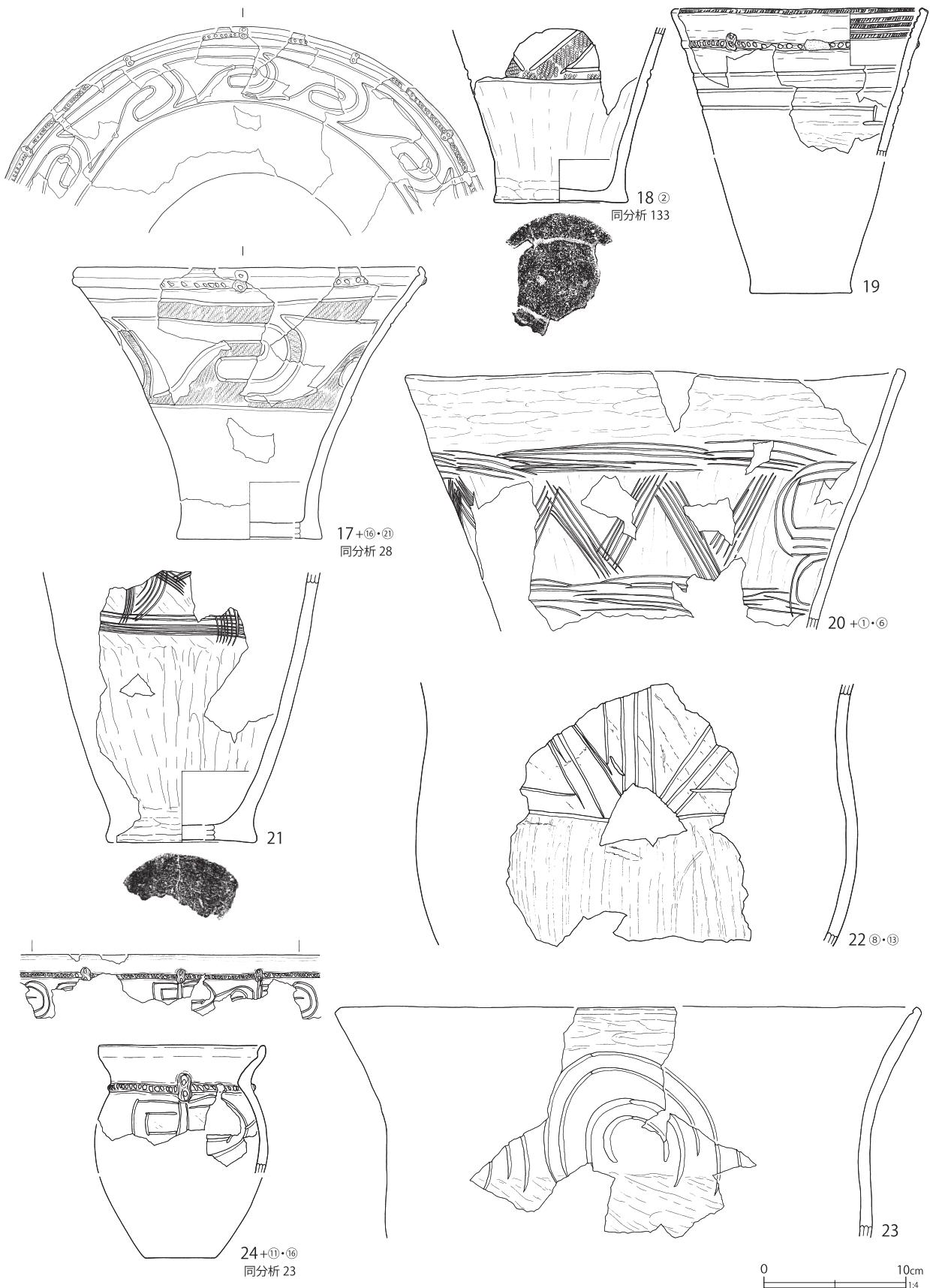
D 1 区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撫糸文				0
		条痕文	1	25		26
小計			1	25	0	26
II群	前期	羽状縄文		2		2
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島	1	5	1	7
		諸磯 c				0
III群	中期	十三菩提		2		2
			1	9	1	11
		五領ヶ台 2				0
IV群	後期	貉沢 / 勝坂 I		18		18
		加曾利E III		17		17
		加曾利E IV				0
			0	35	0	35
V群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2	5	22		27
			5	22	0	27
VI群	後期	堀之内 1	55	239		294
		堀之内 2	140	663		803
小計			195	902	0	1097
VII群	後期	加曾利B 1	35	98		133
		加曾利B 2		5		5
小計			35	103	0	138
IX群	後期	縄文のみ	7	282	2	291
		無文	66	1278	151	1495
小計			73	1560	153	1786
合計			310	2656	154	3120



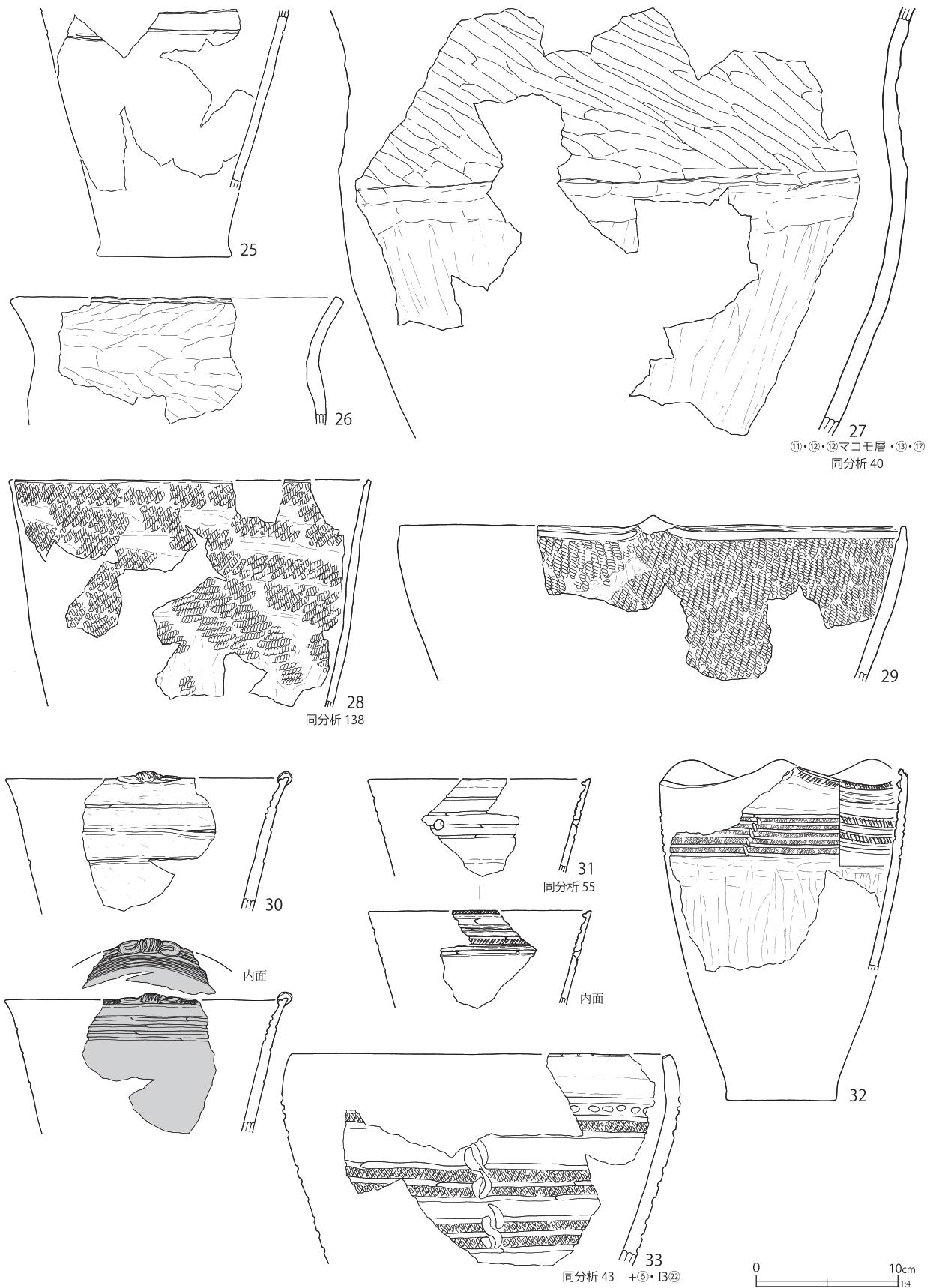
第97図 D 1区出土土器 (1)



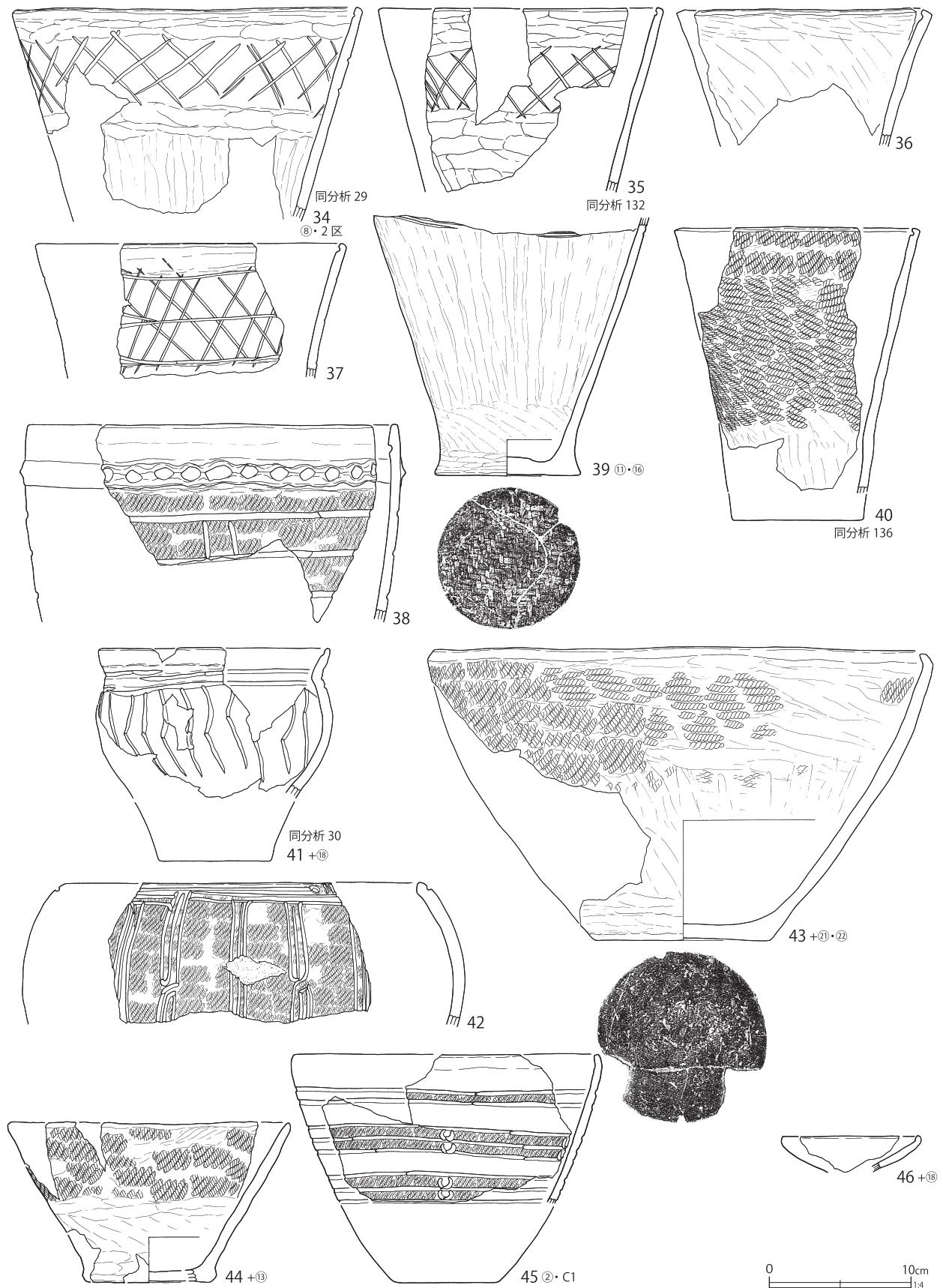
第98図 D 1区出土土器 (2)



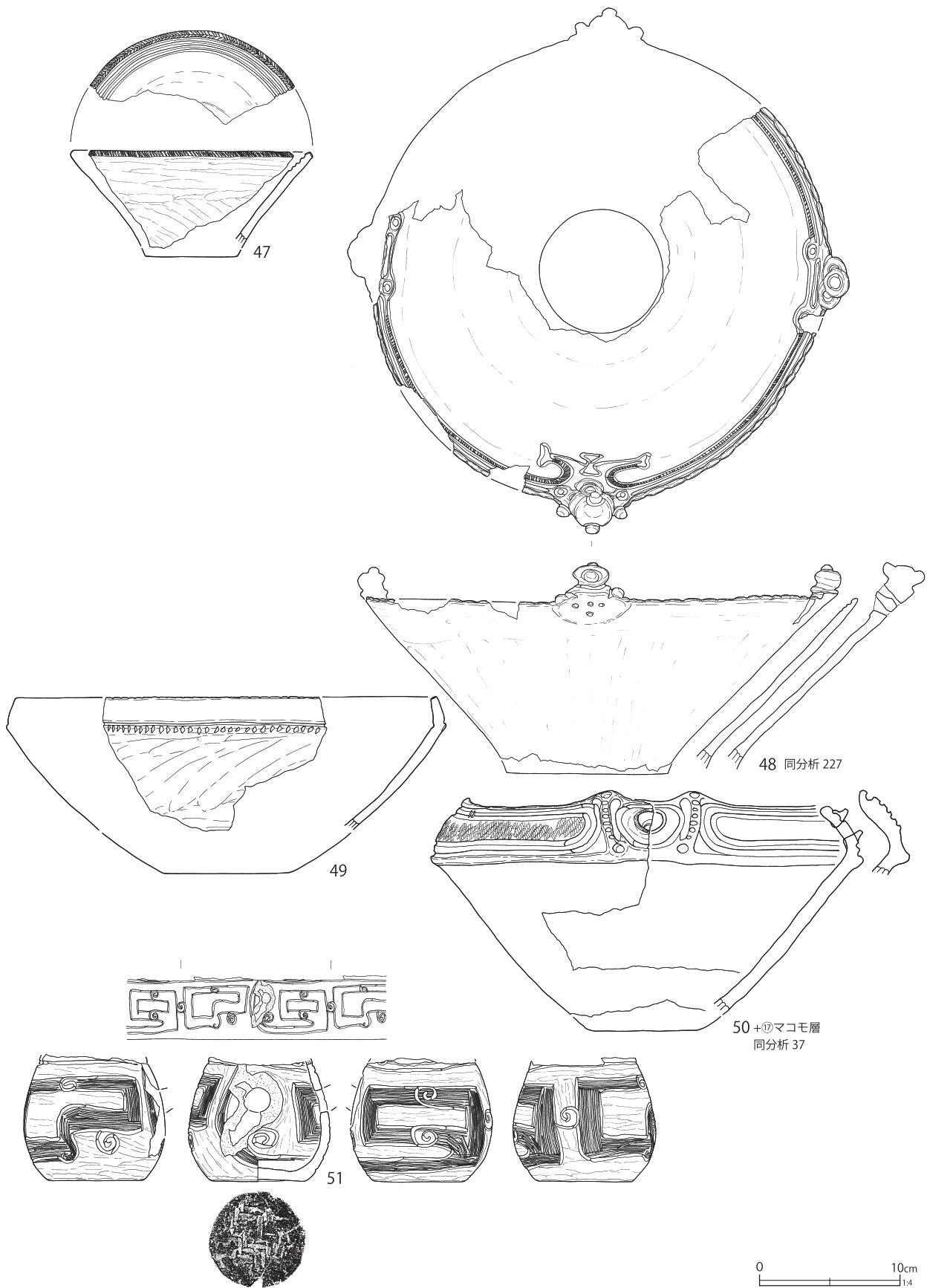
第99図 D1区出土土器 (3)



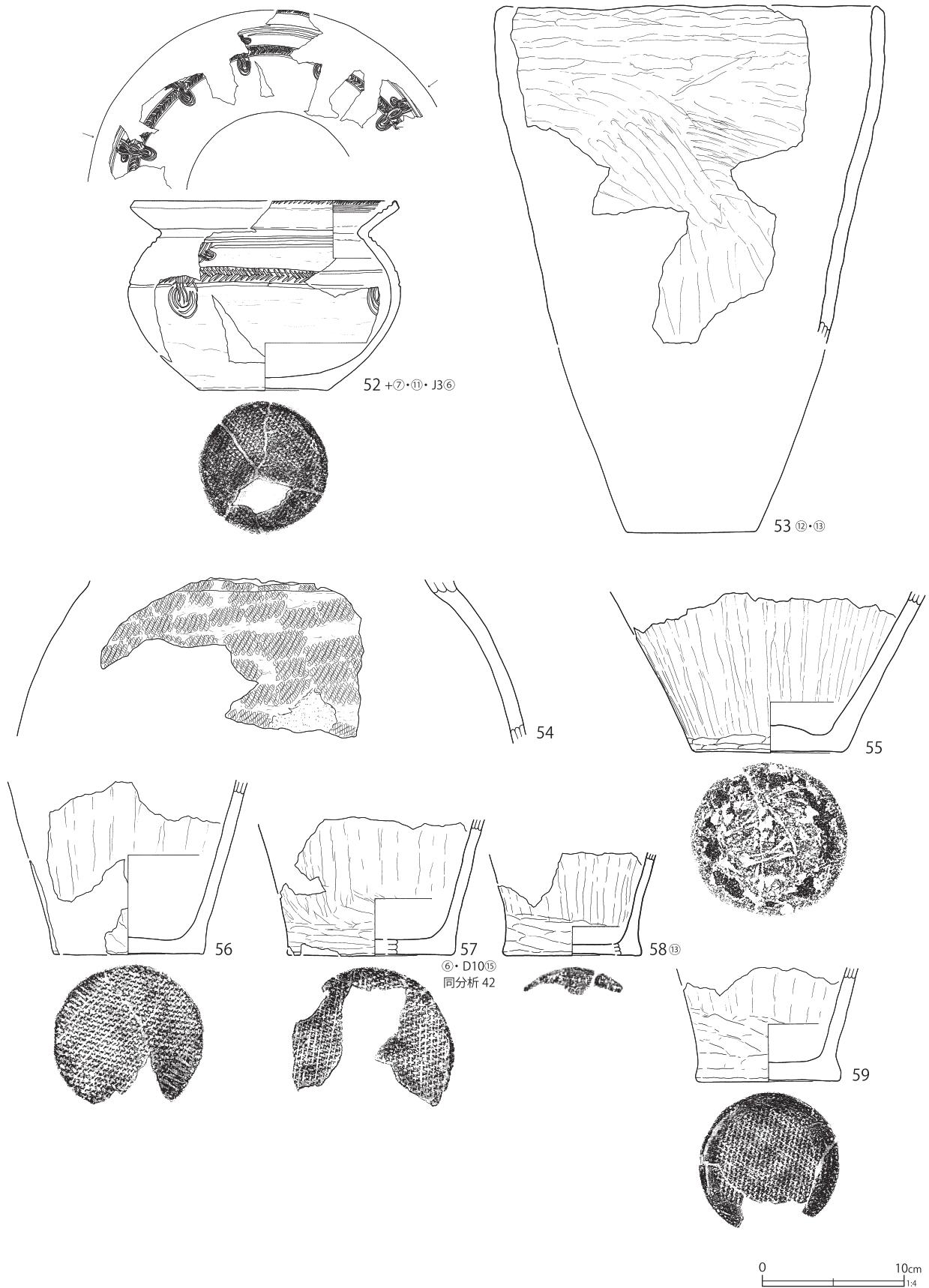
第 100 図 D 1 区出土土器 (4)



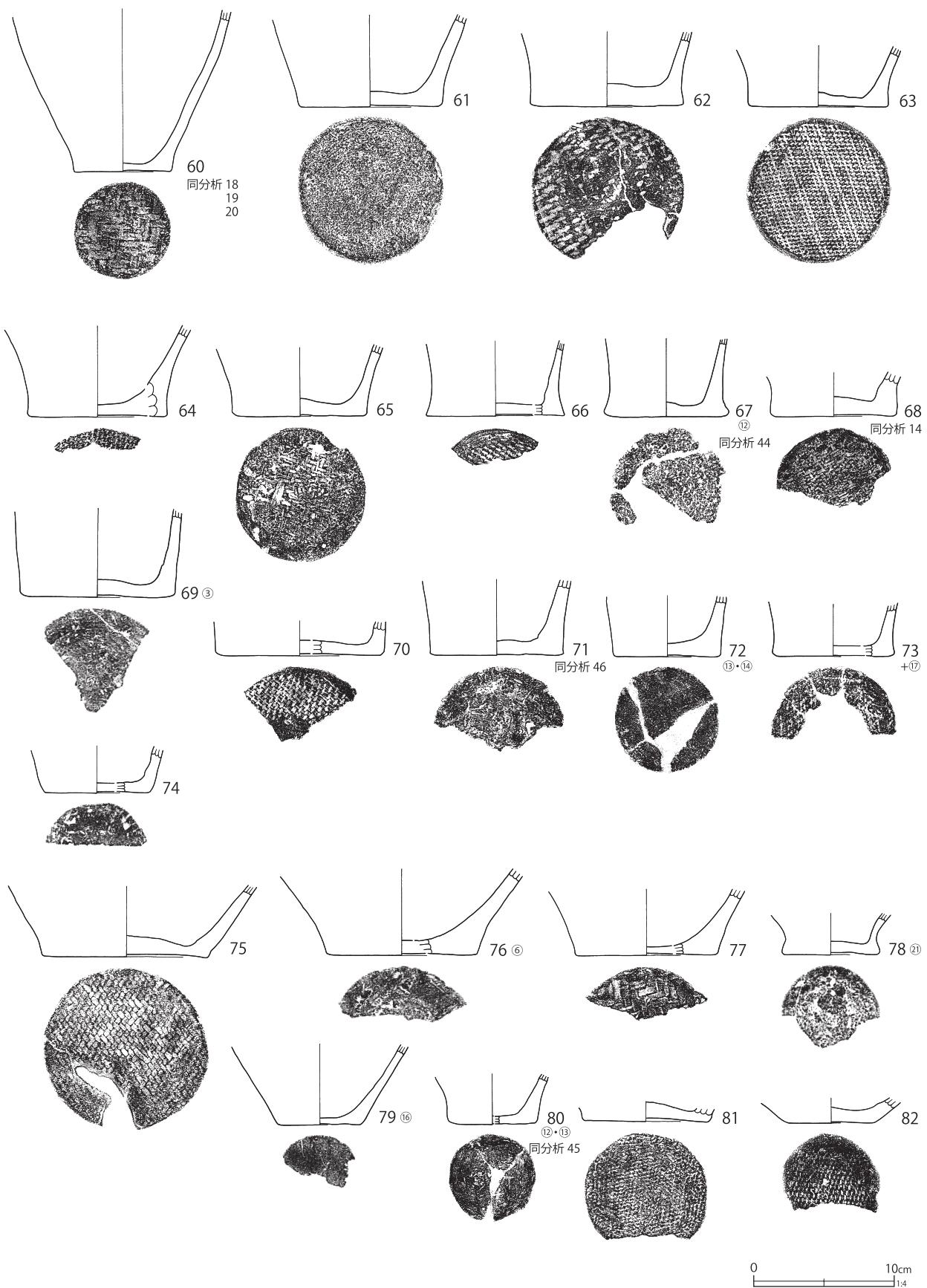
第 101 図 D 1 区出土土器 (5)



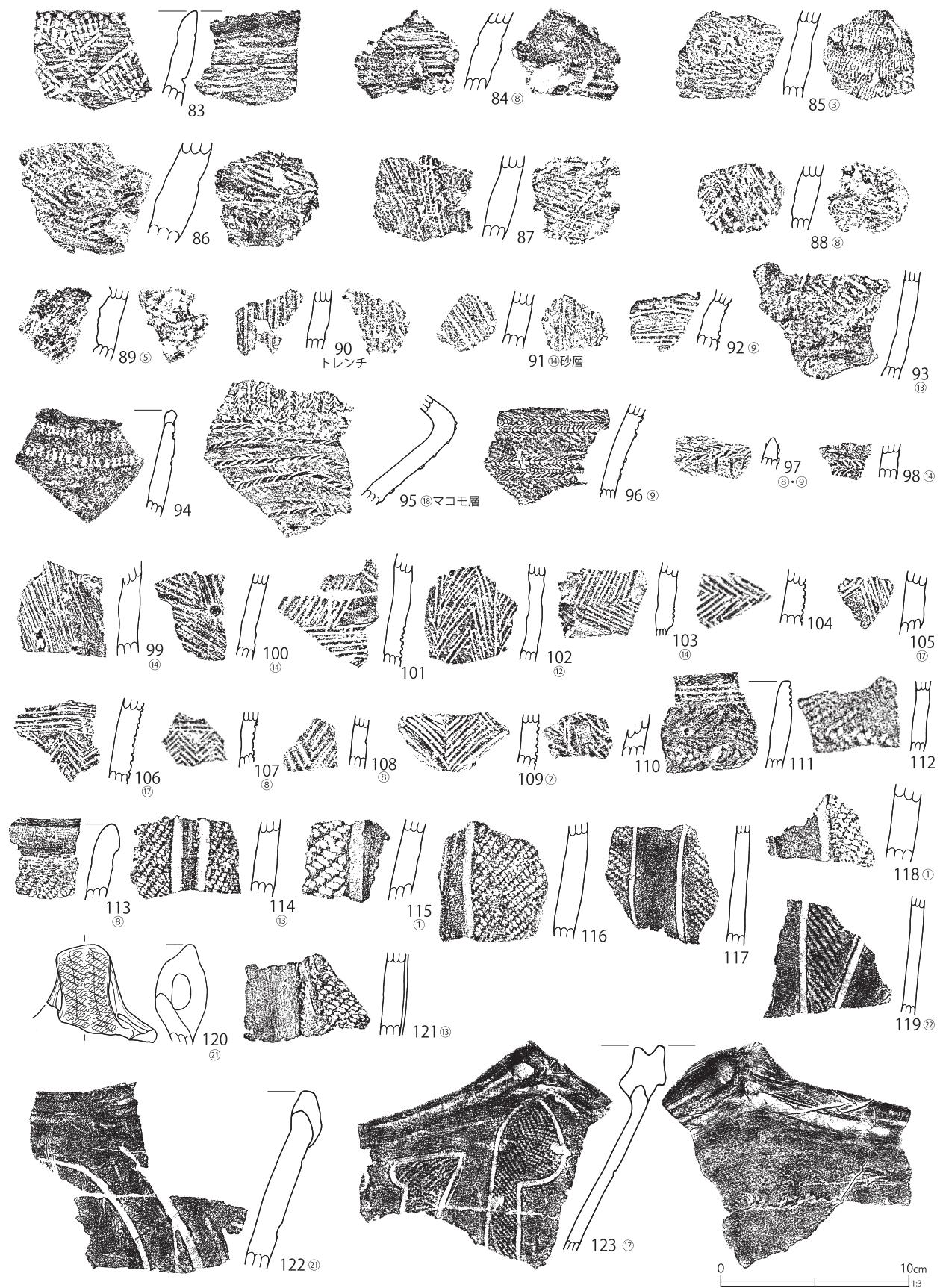
第 102 図 D 1 区出土土器 (6)



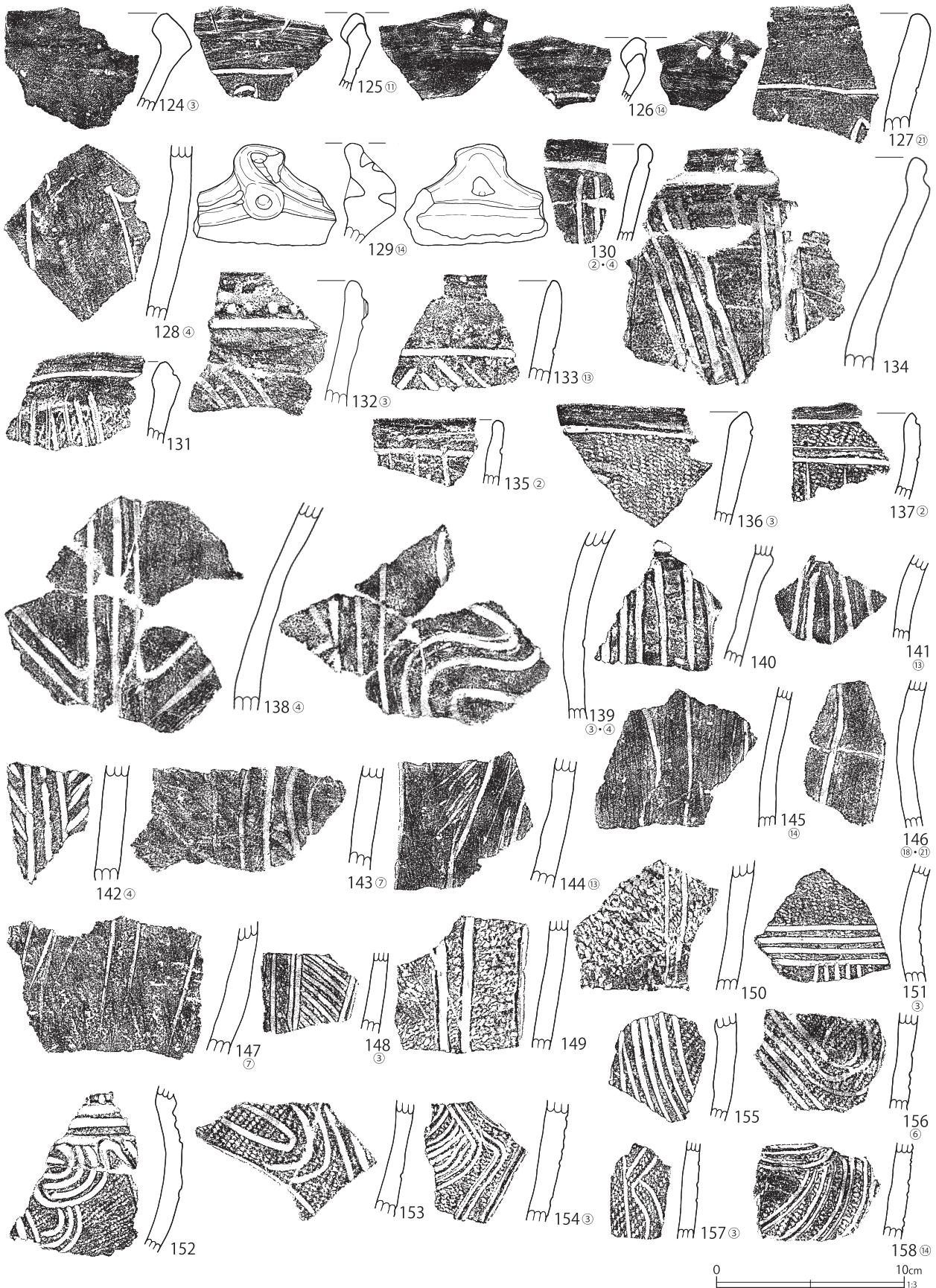
第103図 D 1区出土土器 (7)



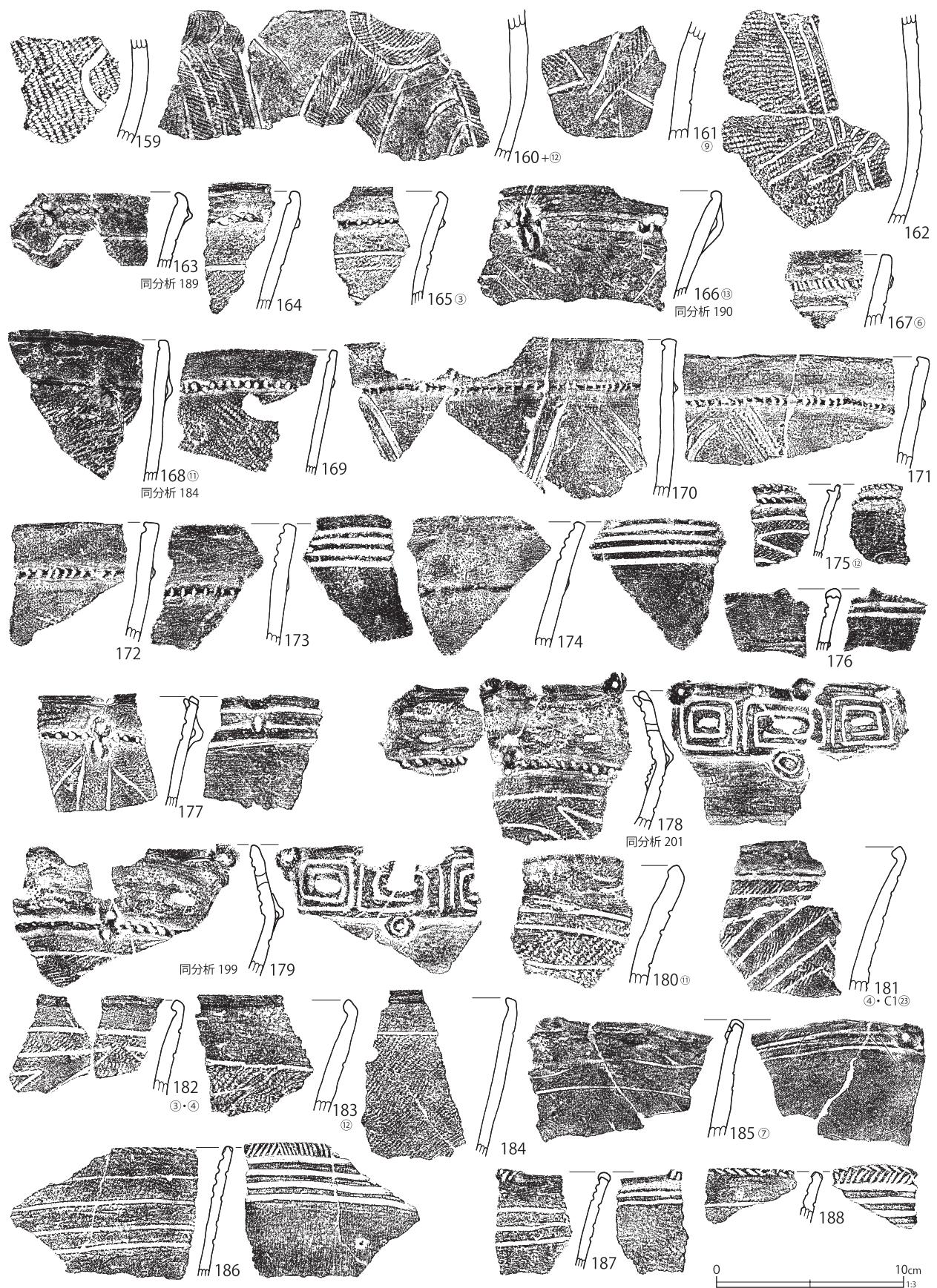
第 104 図 D 1 区出土土器 (8)



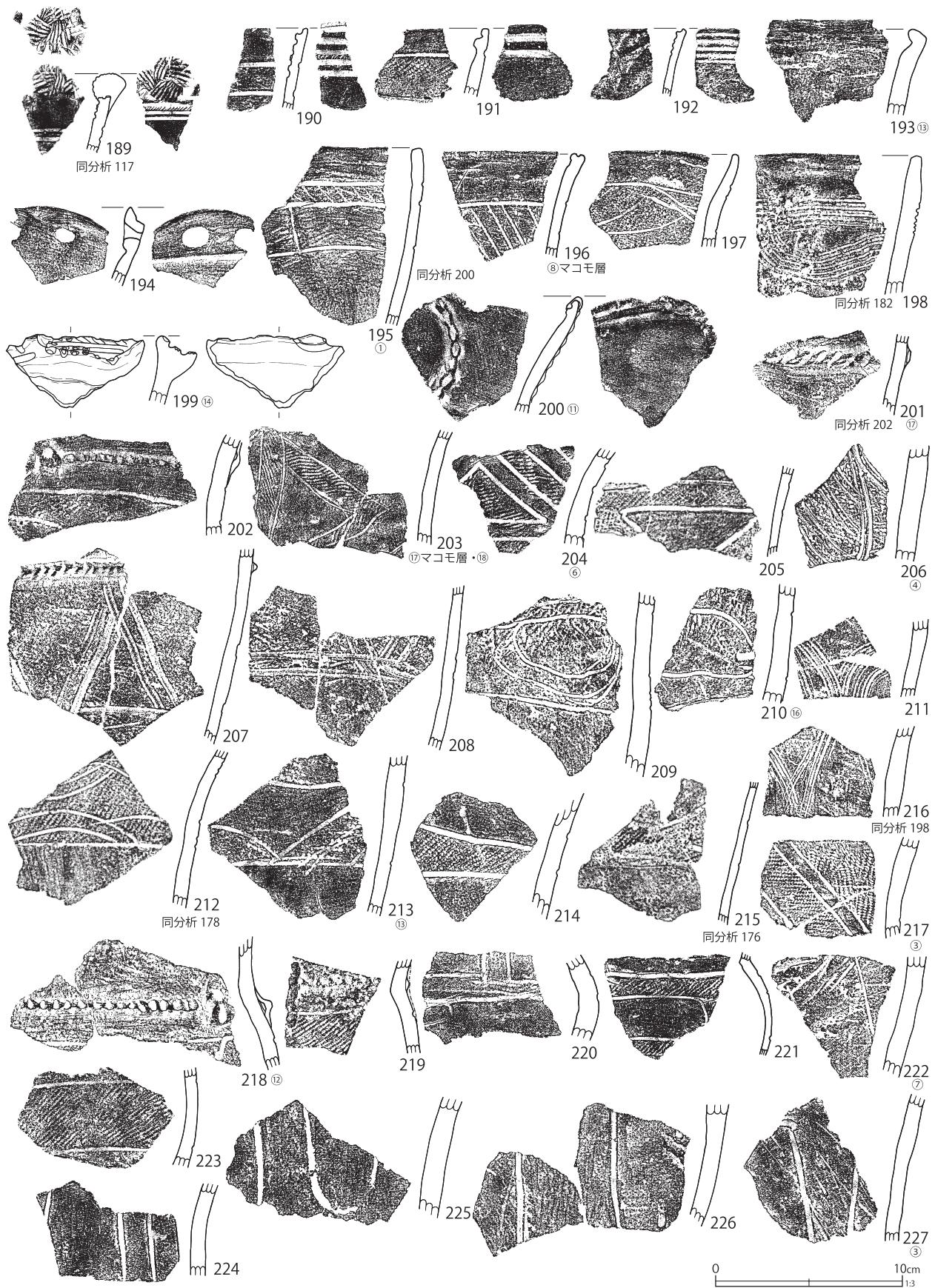
第105図 D1区出土土器(9)



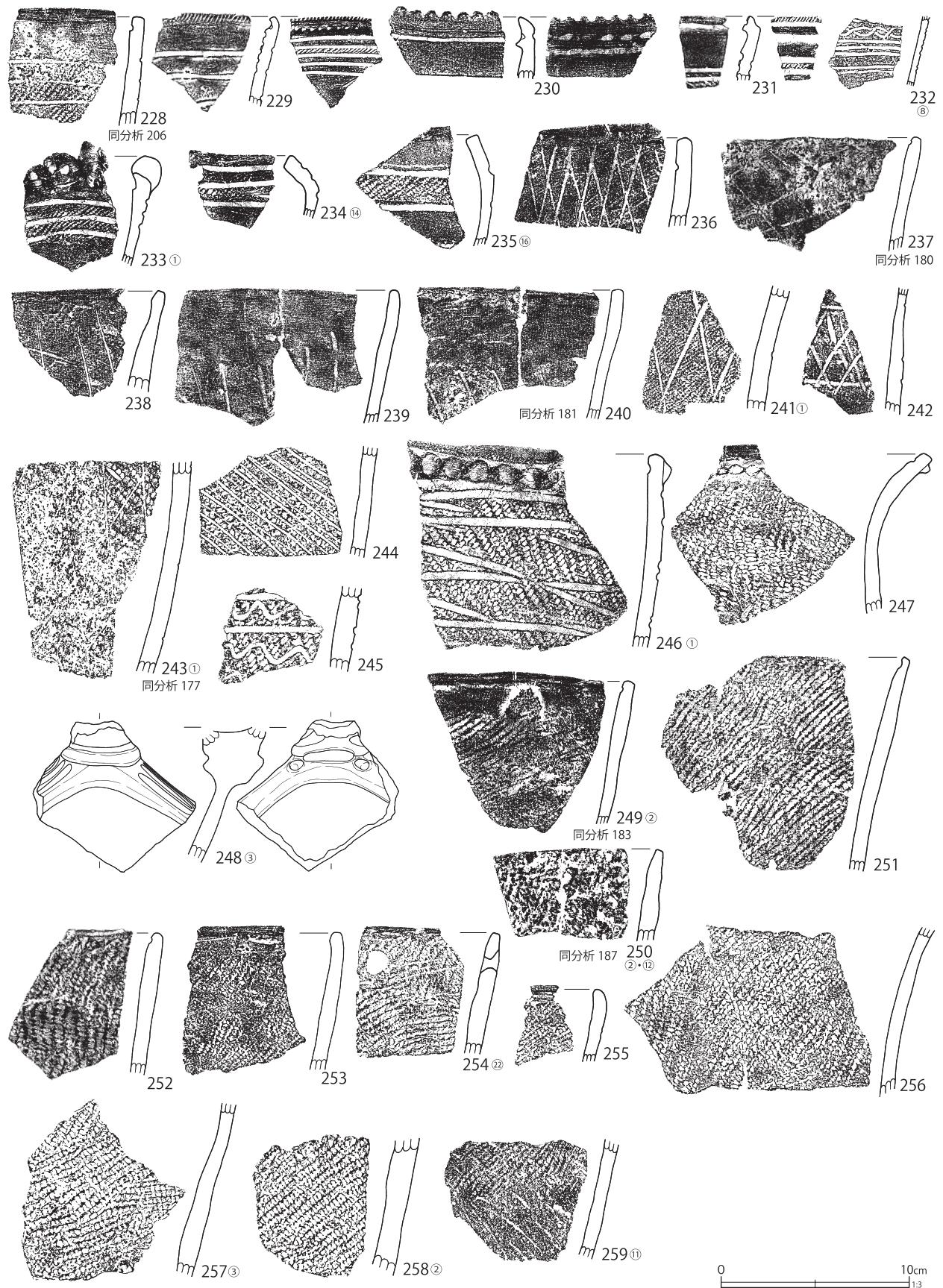
第 106 図 D 1 区出土土器 (10)



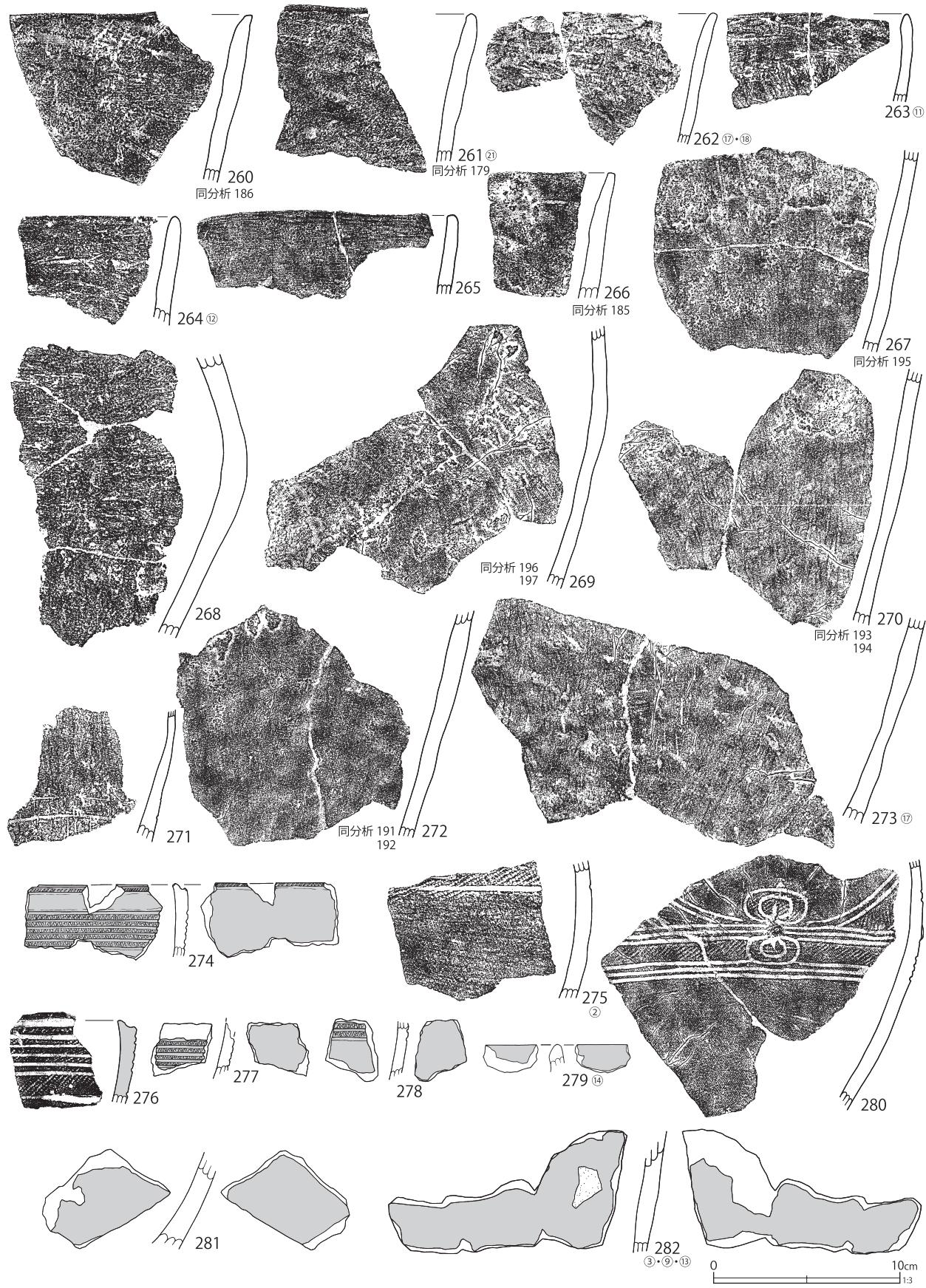
第107図 D1区出土土器(11)



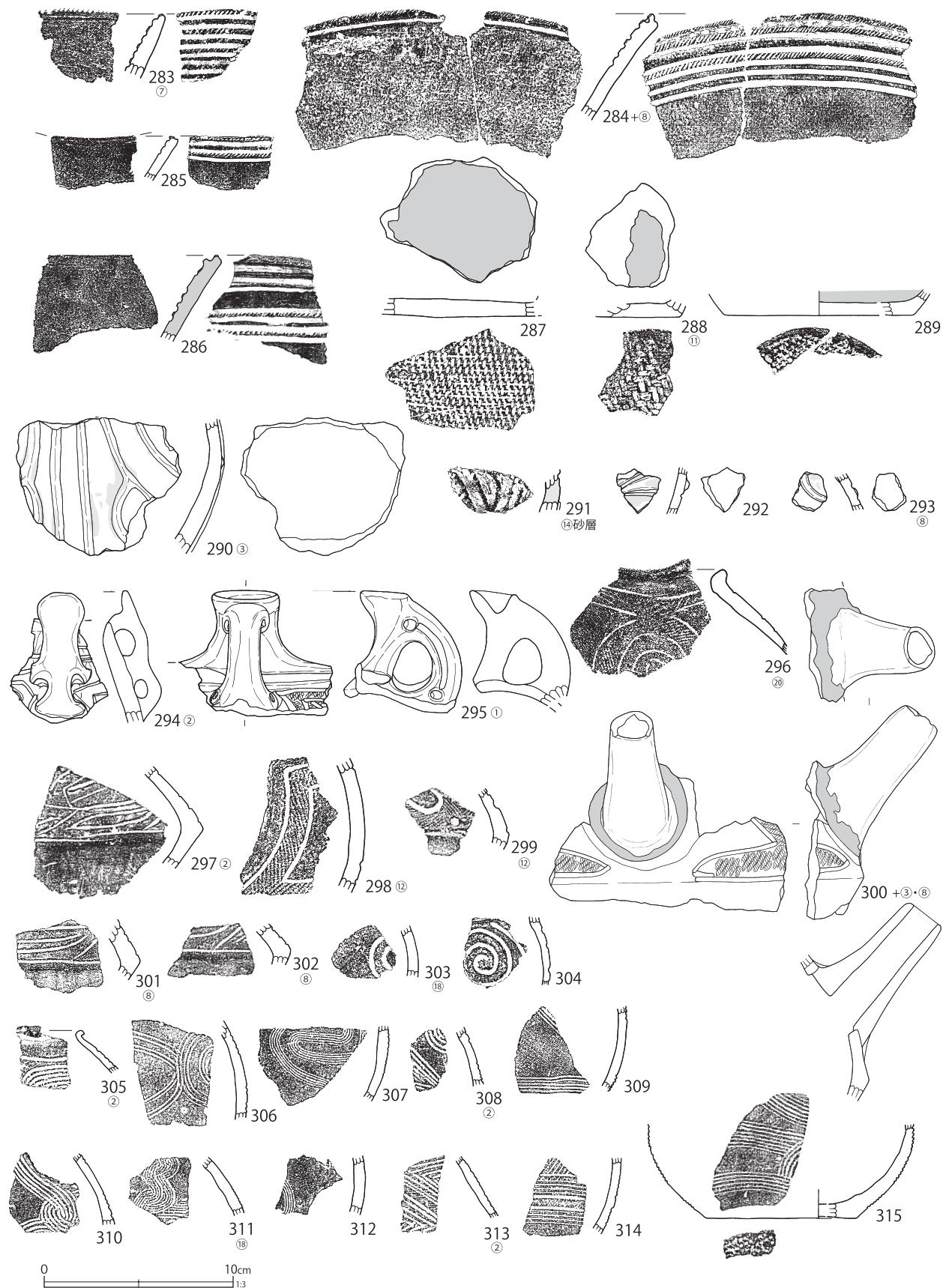
第 108 図 D 1 区出土土器 (12)



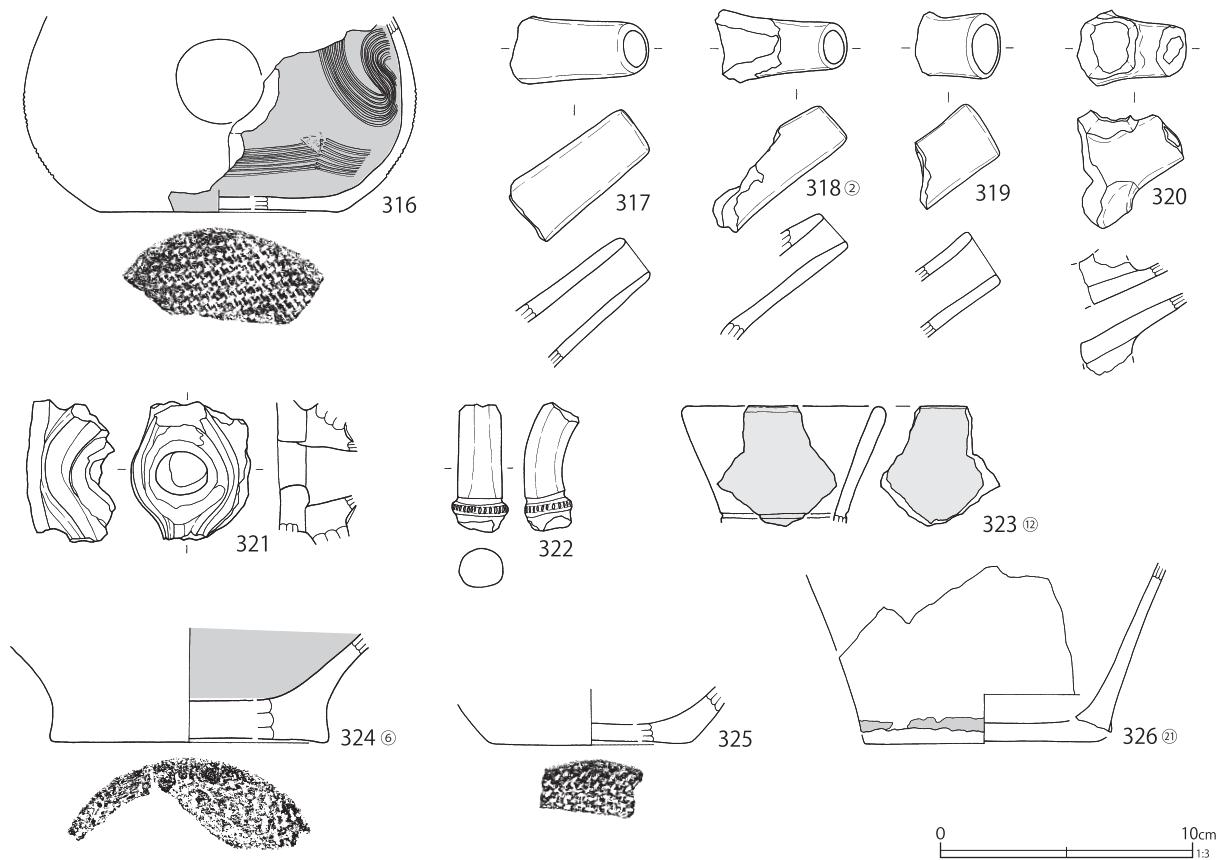
第109図 D 1区出土土器 (13)



第 110 図 D 1 区出土土器 (14)



第111図 D 1区出土土器 (15)



第112図 D 1区出土土器 (16)

と渦巻状区画文が組み合わさるもので、18、165は三角区画文が施文されている。166、170～172、207は胴部に平行沈線の鋸歯状文が描かれるものである。170～172、207は同一個体である。173～179は内文を持つ深鉢で、173、174、176、177は複数沈線が、175は隆帯が巡らされる。178、179は口縁部が若干内折することから、胴部がやや括れる器形を呈する可能性があるが、幅広の口縁部裏面に縦位のスリットが入れられ、円形貼付文を起点とした四角形状の渦巻文が施文されている。胴部には渦巻状区画文を組み合わせたモチーフが施文されている。

19は口縁部に隆帯が施文され、沈線の内文を持ち、胴部に3本の平行沈線が施文されている。最下段の沈線は縦位の短沈線が区切り文状に施文されて、クランク状を呈している。口唇内端部及び口唇上には細かな刻みが施される。内文には刻文

帶と無文帶が交互に施文され、口唇部直下に抉り状の幅広の沈線が施文されている。19は抉り状沈線及び内文、区切り文、縄文施文を行わない等から判断すれば第VII群の加曾利B 1式であるが、隆帯文を貼付することなどから、第VI群から第VII群への移行期の状況を物語る土器として注目される。25の深鉢胴部も同様なものと思われる。

182～192は隆帯が貼付されない深鉢で、185～192は内文が施文される。内文が施文される深鉢は平行沈線帶が施文されるものが多く、口唇部内端、口唇部上に刻みが施されるものが多い。189は円形の突起が付けられている。いずれも口縁部周りに抉り状の沈線文は施文されていない。

195～197も深鉢の口縁部で、195は沈線の横帶内に斜沈線が施文される幅狭な区画が設けられ、無文帶に縦位沈線が区切り状に施文されている。この土器も第VI群から第VII群への移行期の様相を

持つものと認識される。196は口唇部形態が内文を持つ土器群と共通するが、口縁部裏面の沈線がやや抉り状を呈している。胴部の文様も集合斜沈線を施文することから、第VII群になる可能性もある。197は文様帶内の地文縄文上に沈線の連続する弧線文が描かれる。

20、21、198はバケツ形の深鉢で、条線でモチーフが描かれる土器群である。20、21は鋸歯状文と曲線のモチーフが組み合わされ、198は口縁部に弧線状のモチーフが施文される。

22、23は胴部が緩く括れる器形で、縄文を施文しない西関東系の土器群である。22は多条沈線の区画文が施され、23は同上半部に重弧文が施文されている。

24、194、199、200は胴部で括れ、無文の口縁部が開く器形の深鉢で、144、199には突起が付く。24は括れ部に「8」字状貼付文が付く刻みの施された隆帯が巡り、膨れる胴部に長方形と曲線の組み合わさった区画文が施文されている。200は外反する口縁部に鎖状隆帯が弧状に垂下されている。

207～227は深鉢の胴部破片で、202～205、207～210、212、215はバケツ形土器で磨消縄文等を施文する胴部破片である。206は地文縄文上に沈線文が施文され、211、219は条線文土器、217は磨消縄文が施文されるものである。

218～221、223は胴部で括れる器形の深鉢で、磨消縄文のモチーフが施文される。

222～227は沈線文が施文される西関東系の土器群である。

26～29は第IX群土器で、26、27は胴部が括れる器形の深鉢で、26はケズリ状の整形が、17は指頭による文様状を呈する特徴的な凹線状整形が施される深鉢である。28、29は縄文施文土器で、29は口縁部内外面に幅広の沈線が巡る。以上第VI群土器と思われる。

30～32、228～233は第VII群土器のバケツ形深鉢である。30、31は口縁部が直線的に開く器形で、

平行沈線帶が施文され、内文が施文される。口縁部内面には抉り状の沈線が施文されており、30は口唇部に貼付文の突起が付く。32は口縁部が内湾気味に開く器形で、3単位の波状口縁を呈し、縄文施文の沈線帶に、左にずれる細かな刻み状の区切り文が施される。内文には2列の刻文帶が施文される。228は地文縄文の沈線帶が施文され、内文は持たない。第VI群の可能性もある。229～231は沈線帶が施文され、内文を持ち、229、230の内湾する口縁部に刺突文が施される。233は非対称の把手が付く深鉢で、縄文帶が施文されるが内文は持たない。232は胴部破片で、横位の沈線綾縄文が施文される。

234、235は口縁部が内折し、胴部が括れる器形の深鉢で、肩部が縄文帶で区画されている。

34、35、37、236～243は格子目文が施文される深鉢で、34、35は幅狭の格子目文が、37、242は横位区画文のある格子目文が施文される。236～238は口縁部から格子目文が施文され、240、243は地文縄文上に格子目文が描かれる。34、35は幅狭な文様帶の上下に、文様帶を区画するように横位の強いナデ状整形が施される。37も平行沈線で文様帶が2帯に区画されているが、格子目文はこの幅内に施文されている。口縁部裏面の沈線等から判断すると、幅狭な格子目文土器は第VI群土器か、もしくは第VII群土器への移行期に位置付けられる可能性が高いものと判断される。

244は地文縄文上に斜行する細い集合沈線が施文されるもので、東関東系の土器である。

38、245～247は紐線文土器で、28は平行沈線帶に2本対の縦位沈線が区切り文として施文される。246は平行沈線間に斜沈線を組み合わせたジグザグ文が施文される。245は平行沈線間に小波状文が施文される。247は頸部が括れる深鉢で、縄文施文後、隆帯が施文される。第VII群土器と思われる。

248は波状口縁部に鉢巻状の隆帯が巻かれる突

起が付き、内折する口唇部に2条の沈線が施文されている。1点のみの出土であり、後期中葉の曾谷式土器である。40、53、249～273、は第IX群土器の深鉢で、40、249～259は縄文施文、53、260～273は無文土器である。土器第VI群から第VII群の土器群と思われる。

33、41～45、274～282は鉢である。41は短い口縁部が外反し、胴部が膨れる器形で、縦位の鋸歯状沈線が等間隔に垂下される。42は口縁部が内湾する鉢と思われるが、無頸壺の可能性もある。地文縄文上に入り組む沈線懸垂文を施文する。44は口縁部が直線的に開く器形で、上半部に縄文のみ施文される。以上は、第V群土器であろう。

43は口縁部が短く内折する大形の鉢で、上半部に縄文が施文され第VI群土器と思われる。

45、274～282は第VII群土器の鉢である。274、276～278は地文縄文の間隔の狭い沈線帯が施文されるもので、区切り文はみられない。45、275、280は大形の鉢で、45は肩部を縄文帯で区画し、胴部に2帯の縄文帯が施文される。縄文帯の沈線間には円形状に近い対弧文が縦位に連ねられている。280は胴部下端が3本沈線区画の縄文帯で区画され、上側の沈線帯に瘤状の貼付文が施され、それを起点として上下対向の「の」字状文が施文され。さらに上側の「の」字状文を取り囲むように円形のモチーフが施文されている。

33は45に類似する器形で、肩部が刻文帯と縄文帯で区画され、胴部に2帯の縄文帯が施文される。胴部の縄文帯には、おそらく肩部から綾繩状区切り文が連ねられているものと思われる。第VIII群土器の鉢である。

279、は口縁部破片、281、282は胴部破片で、いずれにも漆が塗られている。

46～49、283～289は浅鉢で、46は小形の皿状を呈する。47、283～286は口縁部が直線的に開く器形で、沈線帯の内文が施文される。284の口縁部内面には刺突文列が施される。いずれも口縁部

周りに抉り状の沈線文は施文されていない。48は口縁が直線的に開く浅鉢で、球形の突起が4ヶ所に付き、内文として突起下に左右対称形に開くモチーフの単位文や、楕円区画文が施文される。口縁部周りに抉り状沈線は施文されない。以上は、第VI群の鉢である。

49は内折する口縁部が開く、やや腰高な浅鉢で、肩部が刻文帯によって区画されている。第VII群土器と思われる。

287～289は鉢の底部で、いずれも内面に漆が塗られている。

52、54、290～293は赤彩される壺形土器である。290～293は隆起線でモチーフが描かれる第III群の壺で、瓢形になる可能性もある。

52、54は第VI群の壺形土器で、52は短い口縁部が外折して開き、胴部に羽状沈線帯が施文されて、頸部から区画帯を越えて条線による縦位の綾繩状文が施文される。口縁部内面には沈線帯が巡る。54は縄文のみが施文される壺である。

50、51、294～321は注口土器である。50は口縁部が内折する浅鉢に、短い注口部が付いた第V群の注口土器である。

51は大きな底部から頸部で窄まる器形の注口土器で、沈線の規矩形区画内に条線が充填施文され、部分的に渦巻文が施される。区画線からも派生する渦巻文が施される。第VI群と思われる。

294～321は第VI群土器の注口土器で、294、295は把手で、300、317～321は注口部である。295～304は磨消縄文や沈線でモチーフが描かれ、305～316は条線で曲線文が描かれる。

322は注口土器の持ち手部分と思われる。

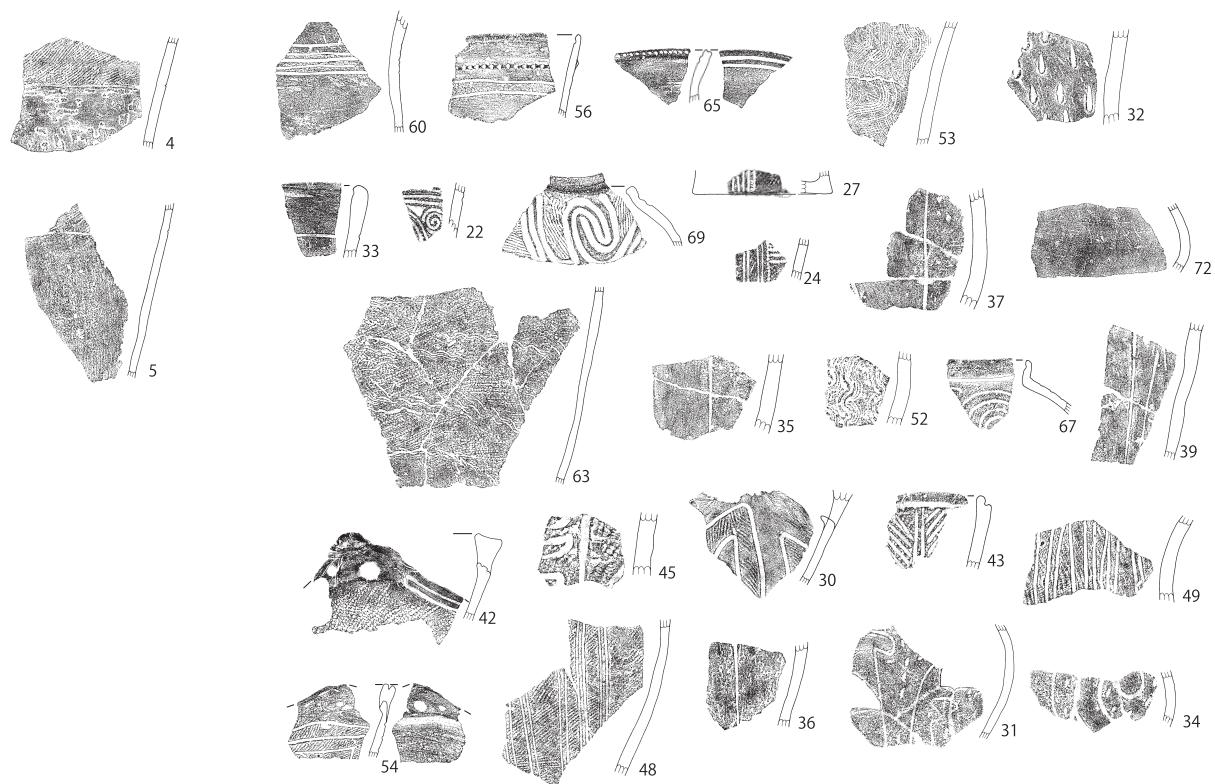
323は赤彩される壺の口縁部と思われる。

324～326は底部で、324、325は鉢の底部であり、324は内面に漆が塗られて、光沢を放っている。326には底部の剥落部に、漆の補修痕が残る。

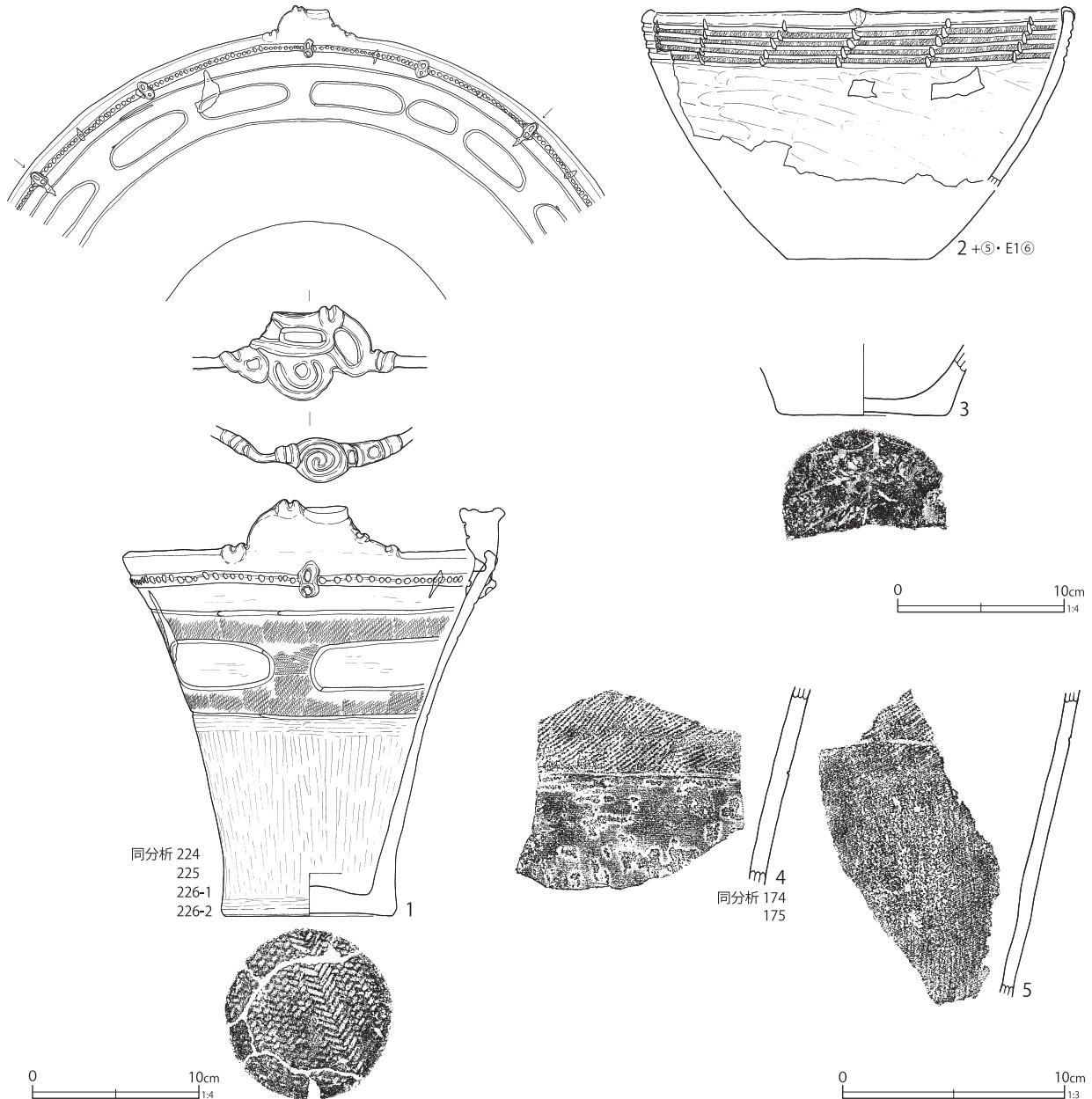
56～82は底部で、75～81は鉢、82は注口土器の底部と思われる。



第 113 図 E 10・E 1 区土器分布図 (1)



第 114 図 E 10・E 1 区土器分布図 (2)



第115図 E 10区出土土器

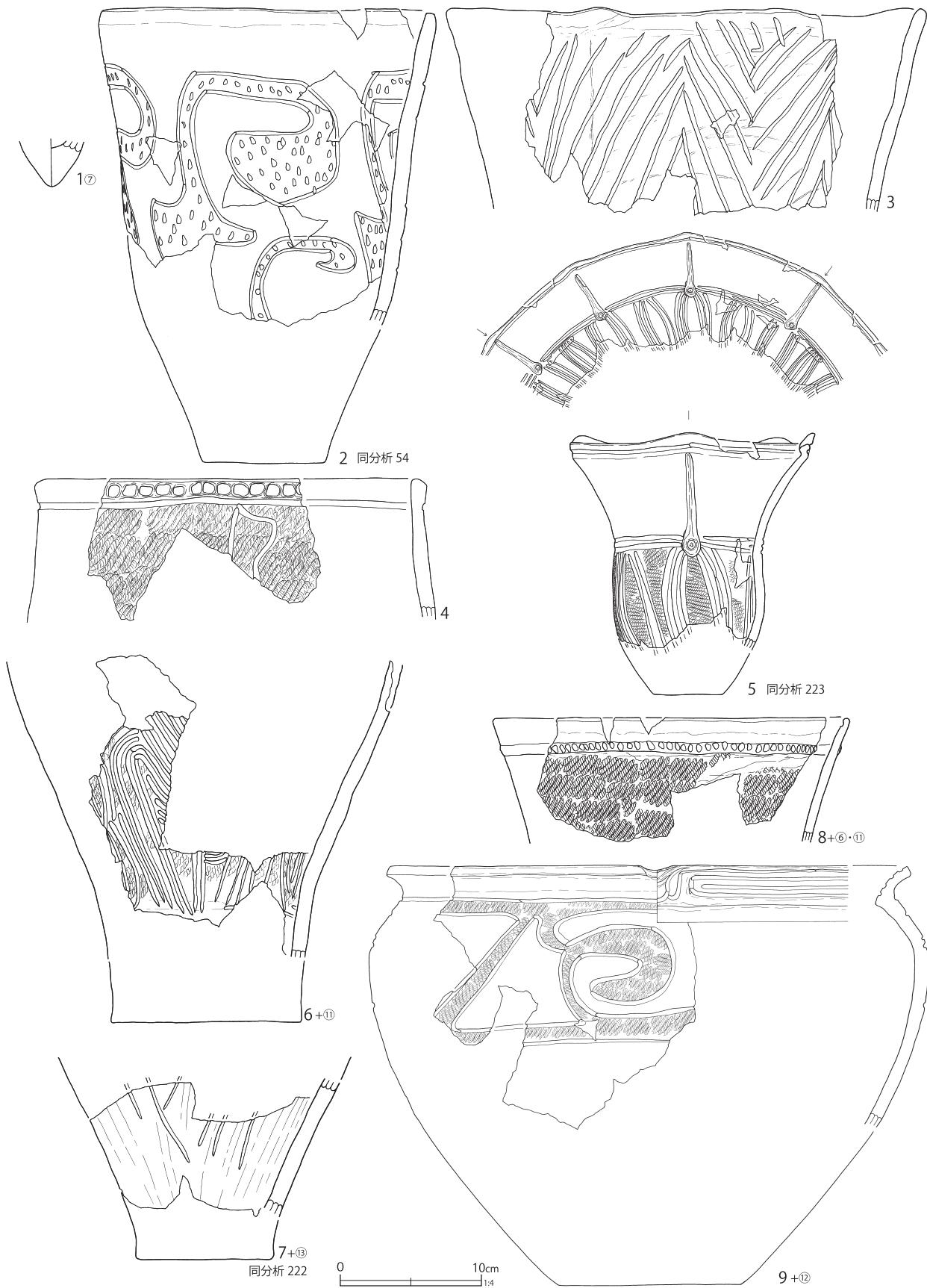
E 10区の土器群 (第113~115図)

E 10区は調査区の南西端にあたり、非常に狭小な調査地点で、掲載土器5点、非掲載土器31点の合計36点が出土した。

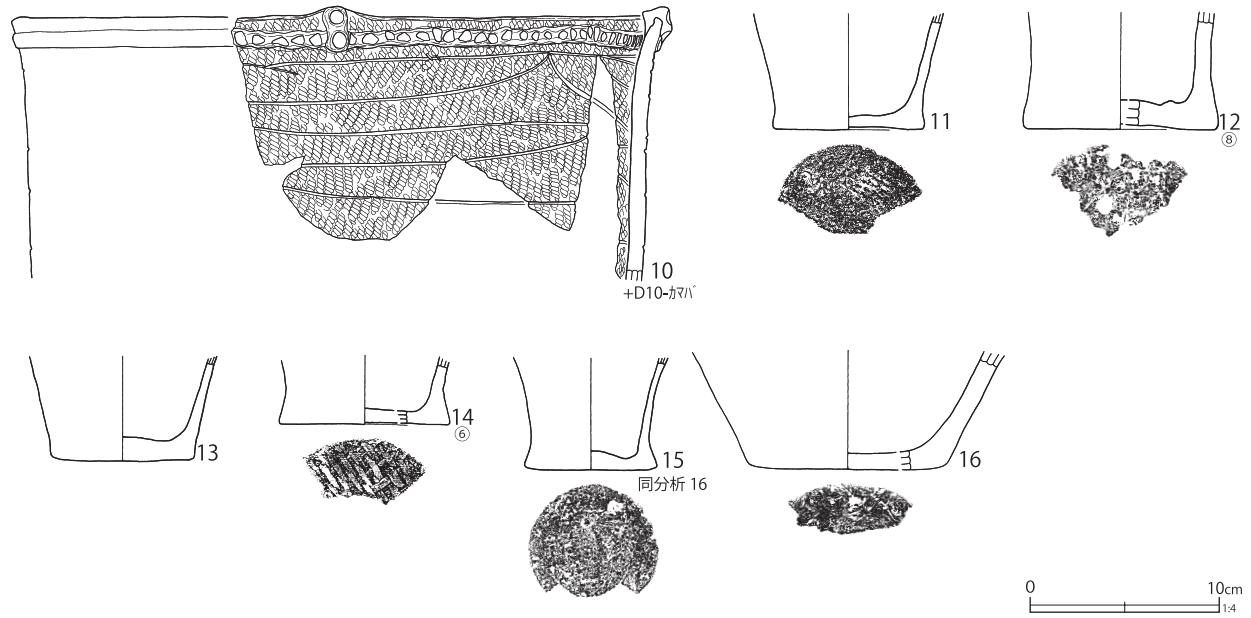
第115図1は第VI群土器のバケツ形深鉢で、完形土器である。口縁部に「8」字状貼付文の付く隆帯が施文され、非対称の大きな把手が付く。把手の筒状部の上面には渦巻文が施文され、把手下の内面には沈線の半円のモチーフが施文されてい

る。胴部の文様帶には沈線区画の横長の楕円文が施文される。内外面全面に厚く炭化物が付着していた。4、5は深鉢の胴部で、縄文帶が施文されている。

2は第VII群の大形の鉢で、口縁部の縄文地文の幅狭な沈線帶に、口縁部の突起を起点として左にずれる列点状の区切り文が施文され、クランク文状沈線文が構成される。3は深鉢の底部と思われる。



第 116 図 E 1 区出土土器 (1)



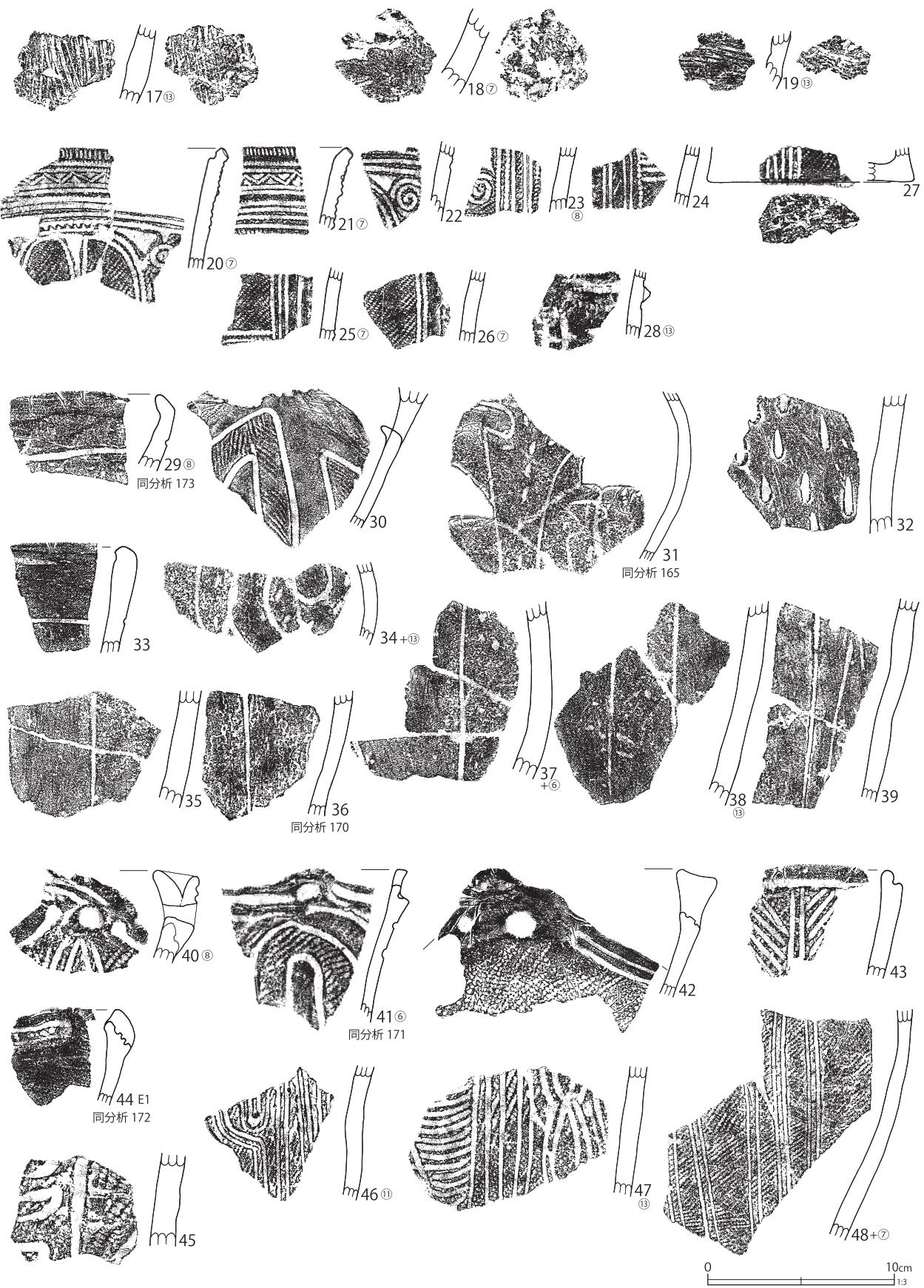
第117図 E 1区出土土器 (2)

第17表 E 10区非掲載土器分類表

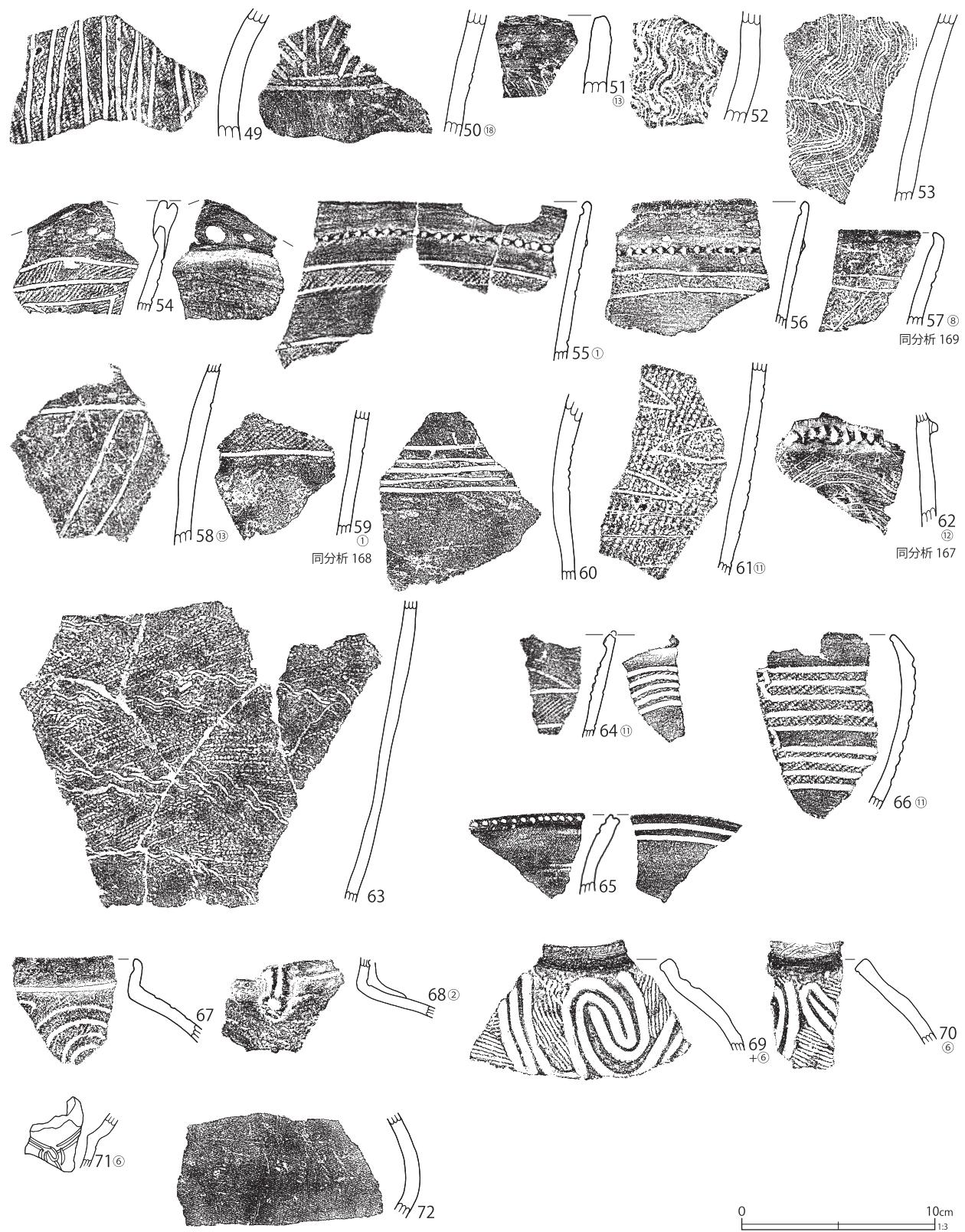
E 10区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III群	中期	五領ヶ台 2				0
		洛沢 / 勝坂 I				0
		加曾利 E III				0
		加曾利 E IV				0
小計			0	0	0	0
IV群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2				0
小計			0	0	0	0
V群	後期	堀之内 1				0
VI群		堀之内 2	2	1		3
小計			2	1	0	3
VII群	後期	加曾利 B 1	1			1
VIII群		加曾利 B 2				0
小計			1	0	0	1
IX群	後期	縄文のみ				0
		無文		25	2	27
小計			0	25	2	27
合計			3	26	2	31

第18表 E 1区非掲載土器分類表

E 1区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文			6	6
		条痕文				0
小計				0	6	6
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島			1	1
		諸磯 c		1		1
		十三菩提		1		1
小計				0	2	1
III群	中期	五領ヶ台 2			5	1
		洛沢 / 勝坂 I	1	5		6
		加曾利 E III		5		5
		加曾利 E IV				0
小計				1	15	1
IV群	後期	称名寺 1			2	2
		称名寺 2			3	3
				0	5	0
V群	後期	堀之内 1		10	34	44
VI群		堀之内 2		15	52	67
小計				25	86	111
VII群	後期	加曾利 B 1			10	10
VIII群		加曾利 B 2			2	2
小計				0	12	0
IX群	後期	縄文のみ		1	40	41
		無文		3	209	22
小計				4	249	22
合計				30	375	24
						429



第 118 図 E 1 区出土土器 (3)



第 119 図 E 1 区出土土器 (4)

E 1区の土器群 (第113、114、116~119図)

調査区の南東端にあたり、東側から台地裾野が伸び、南側から谷斜面が迫る地点で、古い土器群も出土している。掲載土器72点、非掲載土器429点の合計501点が出土した。

第116図1、17~19は第I群第2類の条痕文系土器群で、1は尖底部である。17~19は胴部破片で、胎土に纖維が少量含まれる。

20~26は第III群第1類の中期前葉の土器群で、同一個体である。口縁部内面に稜を持ち、口縁部に幅狭な鋸歯状印刻文が施文され、地文縄文上に「Y」字状懸垂文が垂下する。懸垂文からは部分的に渦巻文が派生しており、モチーフの交点部分に三角印刻が施されている。施文は全て細かな角押文で行われる、五領ヶ台2式相当の土器群である。

28は隆帯脇に角押文が施文される第2類土器で、勝坂1式に相当する。

2、29~39は第IV群第2類の称名寺2式土器である。29、30は口縁部が内折し、30は大きな把手の付く土器で、区画内に縄文が施文される。2、33は平口縁で、2は不規則な渦巻状の区画文内にランダムな列点文が施文される。31は胴部括れ下の破片で、縦長のスペード状文内に1列の刺突文列が施文される。32は雨垂れ状の刺突文が、34、37~39には浅く疎らな刺突文が施される。

4、6、40~43、45~50は地文縄文上に沈線文が施文される第V群の堀之内1式土器の深鉢である。4はやや胴部が膨れる器形で、45と同様に口縁部から蛇行懸垂文が垂下する。40、42は波状口縁、41は突起の付く平口縁で、41は磨消縄文の逆「U」字状文が施文される。6、46~50は多条沈線でモチーフが施文される。

3、7は無地文上に沈線文が施文されるもので、3は大きな集合鋸歯状文が深い沈線で施文される。7は浅い沈線の懸垂文が施文されている。

5、44は胴部で括れ口縁部が開く器形で、膨ら

む胴部に対弧状の沈線文を垂下施文するものである。5は口縁部から胴部区画線状の貼付文にかけて隆帯が垂下し、貼付文を起点に逆「U」字状の沈線文を施文する。第V群土器である。

51~53は条線が施文される深鉢である。

8、54~62は第VI群土器である。8、55、56は口縁部に隆帯が付くバケツ形の深鉢で、8は幅広の縄文帯か地文縄文が施文され、55、56は縄文帯が施文される。

54は突起の付く波状口縁で、波頂部は捻じれた形状を呈し、円孔があく。胴部には重三角文を磨消縄文で施文する。57は無地文のバケツ形深鉢で、斜沈線区画が施されている。

58~62は胴部破片であり、58は斜行平行沈線のモチーフが、59は縄文帯が施文される。60、62は胴部がやや括れる器形で、60は胴部を沈線帯で区画し、62は横位の隆帯下に条線の渦巻文が施文されている。61は地文縄文上に鋭角な三角形状のモチーフが施文されている。

64は第VII群土器の深鉢で、内文が施文される。

10は紐線文土器で、体部の地文縄文上に、横長の沈線弧線文が施文される。

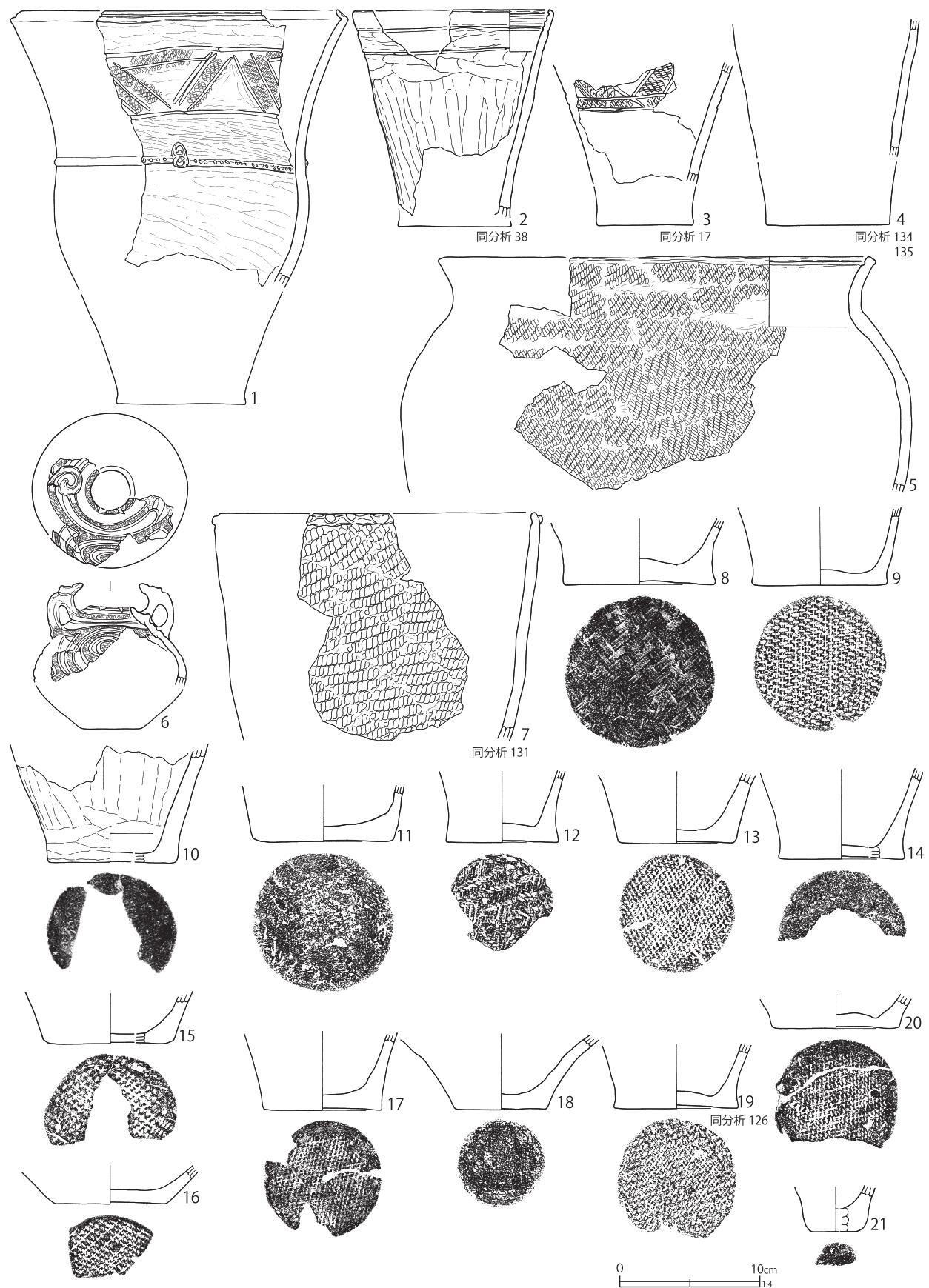
63はL Rの縄文施文帯の間に、結節の回転文が施文される深鉢である。第VII群土器と思われる。

9、65、66は鉢で、9は外折する口縁部裏面に、押圧状の刻みを起点とした横長の楕円形文の内文が施文される第VI群の鉢で、膨れる胴部には磨消縄文の渦巻状が斜行する磨消縄文と連結されるモチーフが施文される。65も同様に外反する口縁部の破片であり、角頭状の口唇部に刺突文列が巡る。

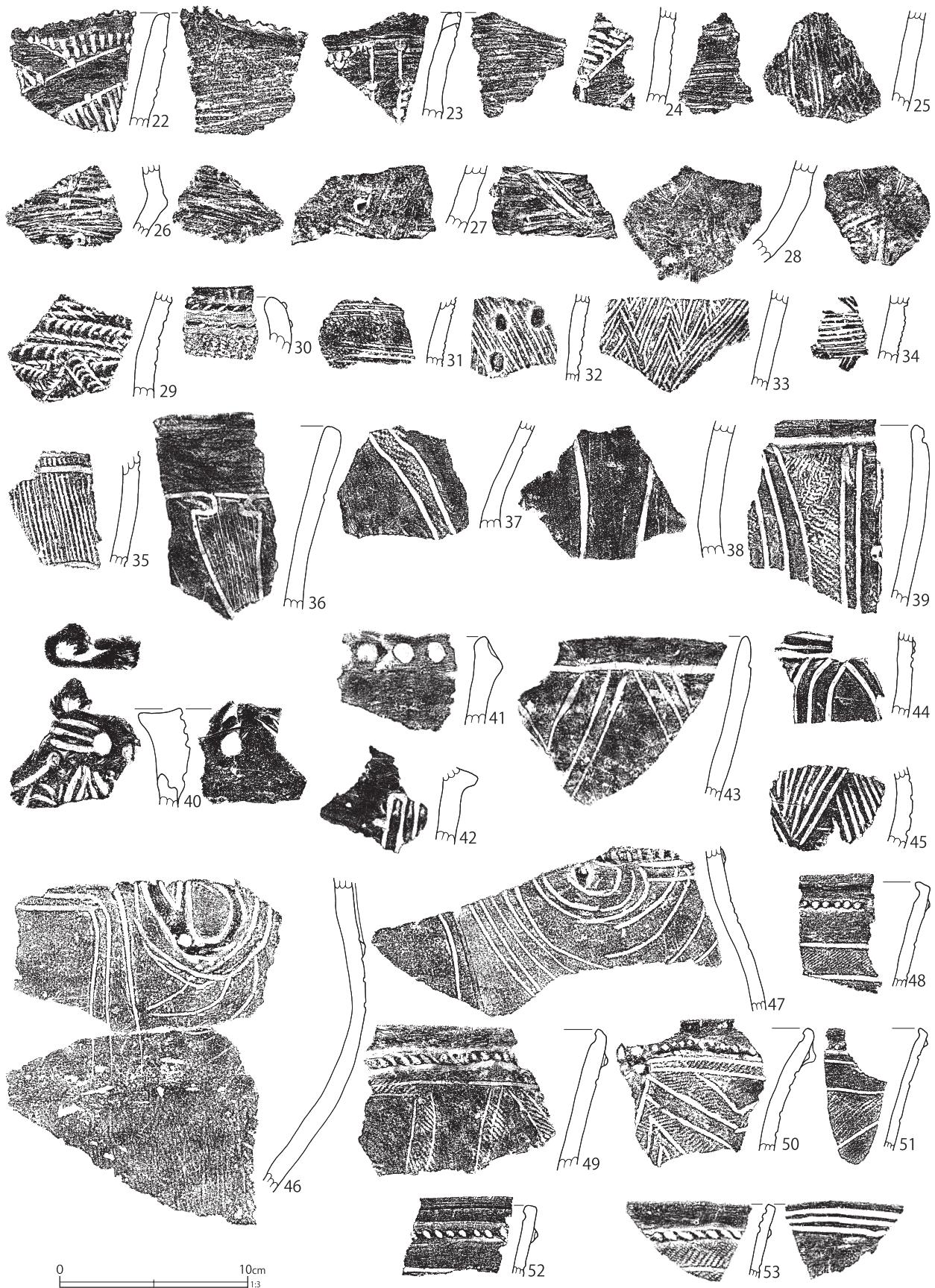
66は小形の第VII群の鉢で、2帯の縄文帯に「の」字状文が施文される。

67~72は注口土器、もしくは壺形土器で、69、70は渦巻文を連結する第V群土器、67、68は第VI群土器で、71は注口部の下部にあたる。

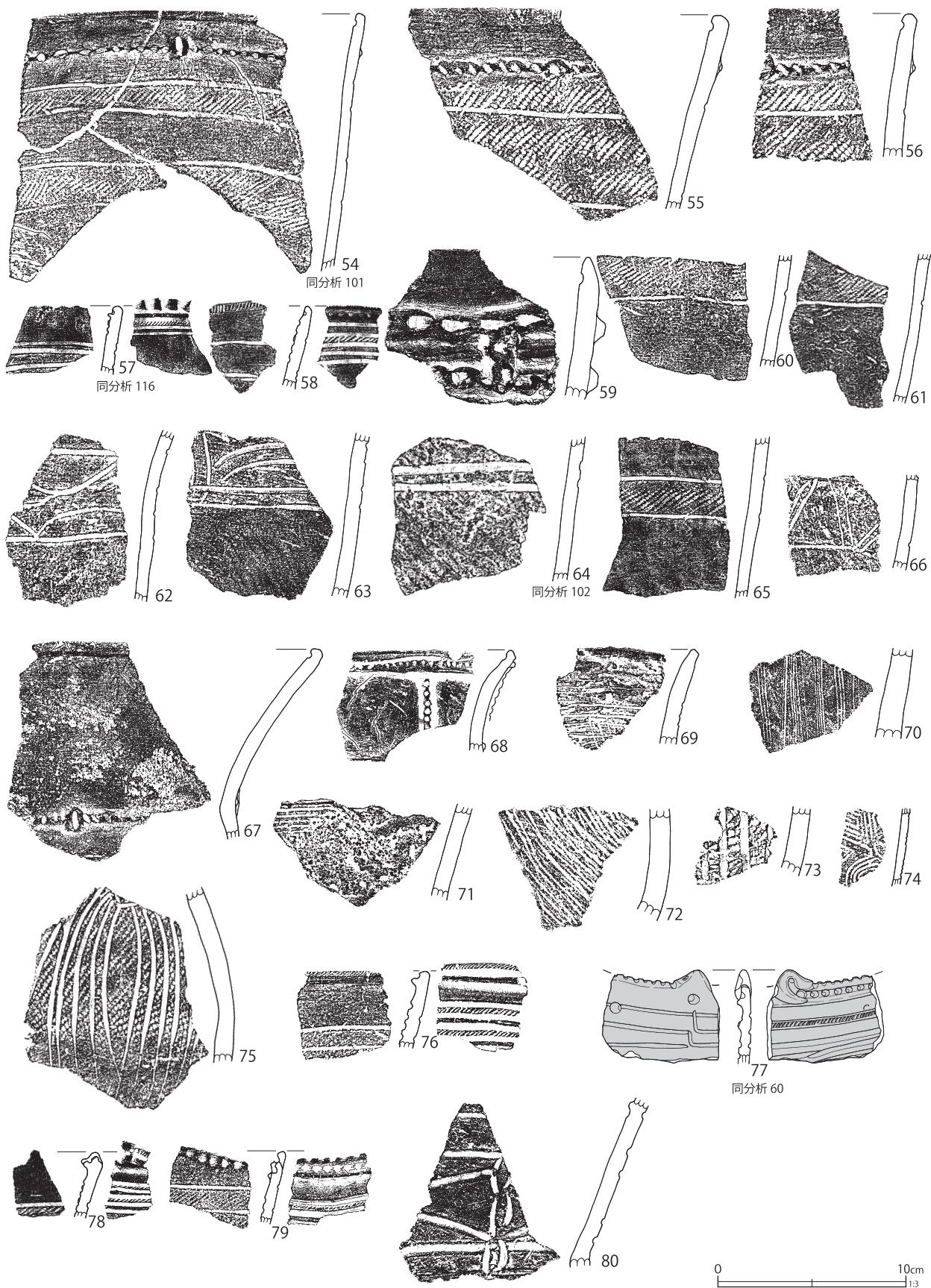
11~16は底部で、11から15は深鉢、16は鉢の底部になると思われる。



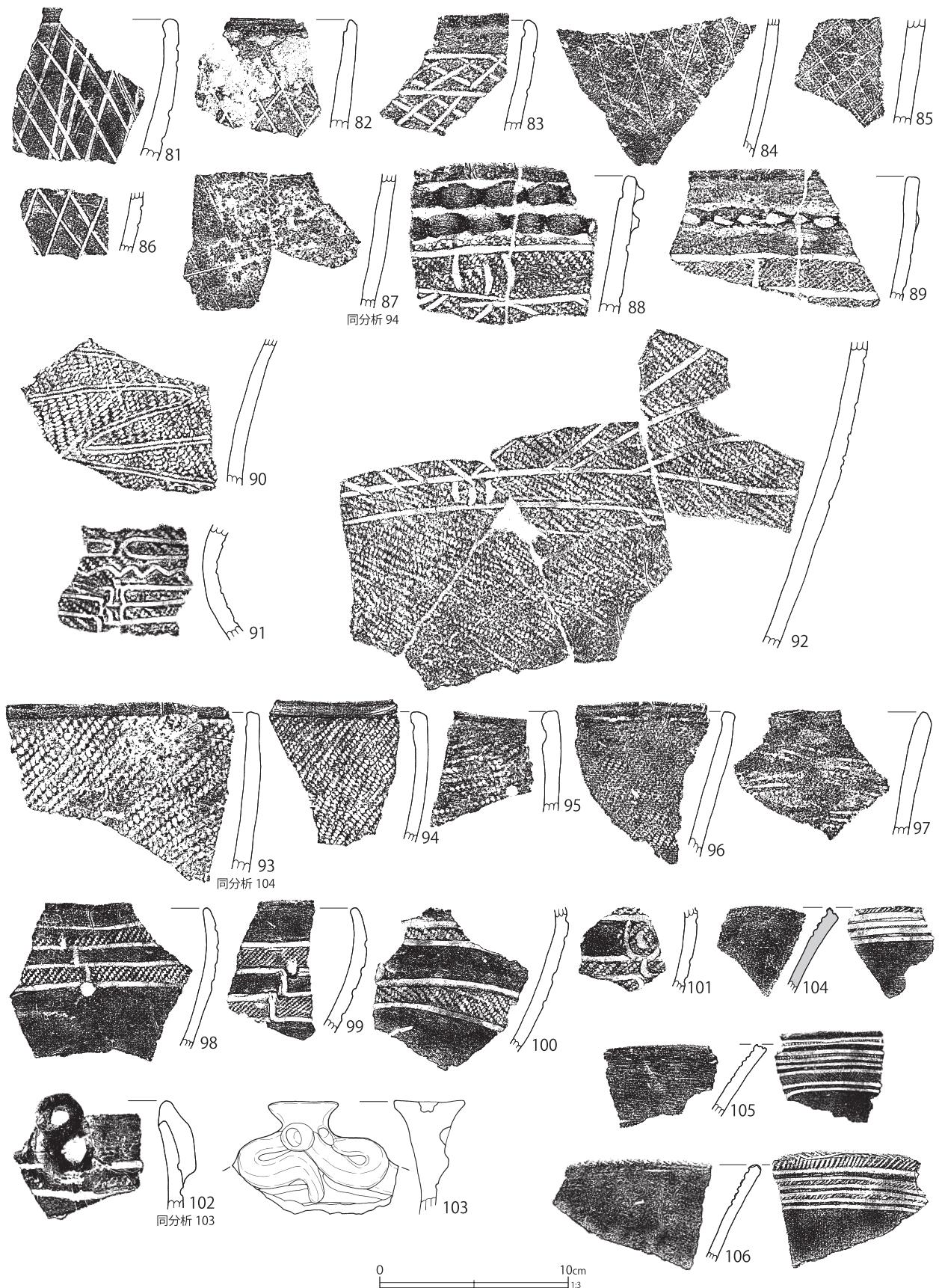
第 120 図 表採土器 (1)



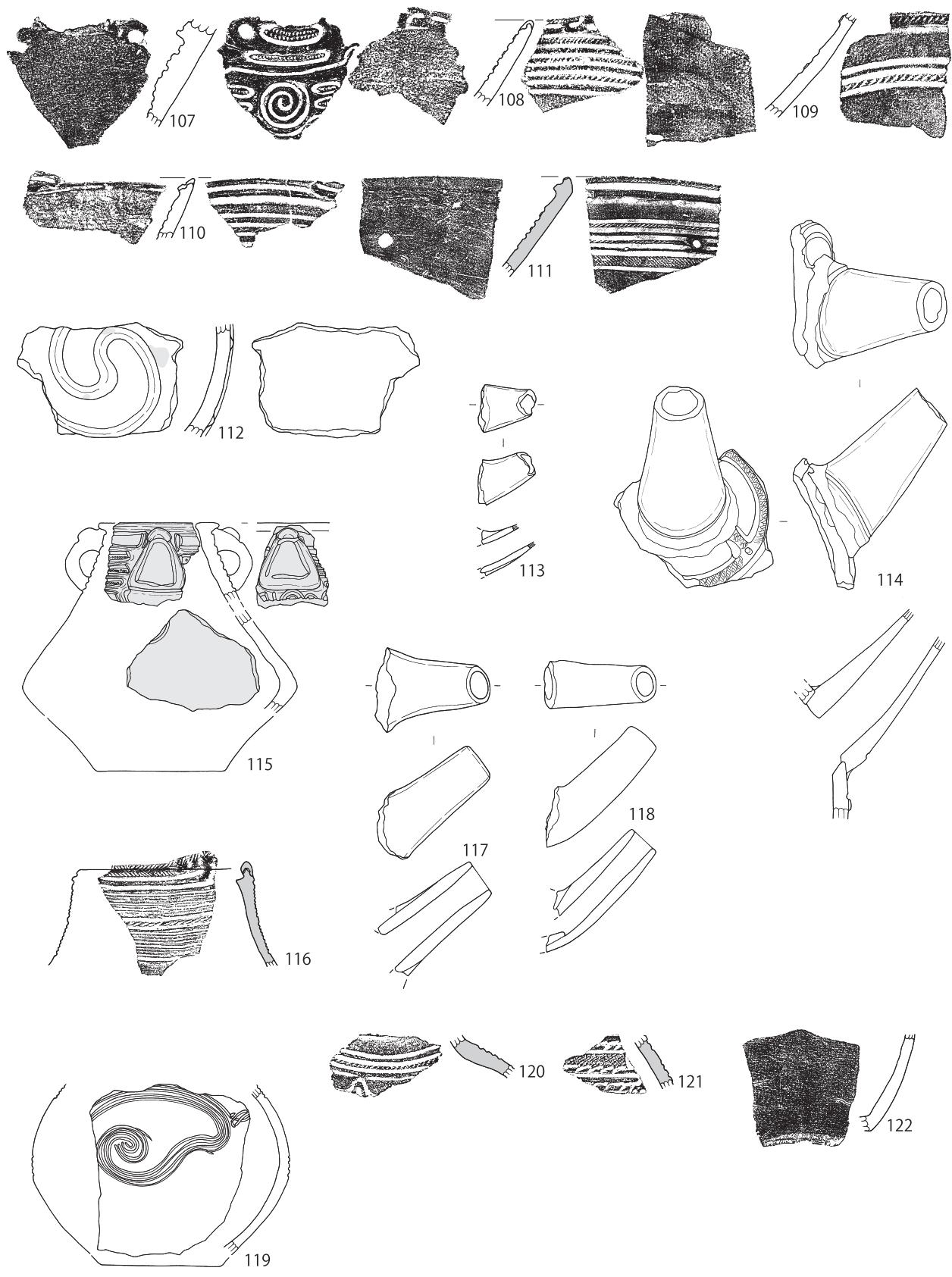
第121図 表採土器（2）



第122図 表採土器 (3)



第123図 表採土器(4)



第124図 表採土器(5)

表採の土器群（第120～124図）

表土除去の段階に出土した土器や、出土地点の不明となった土器群をまとめて、表採土器とした。掲載土器122点、非掲載土器1023点の合計1145点である。

22～28は第I群第2類の条痕文系土器群で、沈線区画の交点に円形刺突文、区画内に集合結節沈線が充填される鶴ヶ島台式土器である。

29～31は第II群第3類の諸磯b式土器で、29は連続爪形文、30は浮線文、31は平行沈線が施文される。32、33は第4類の諸磯c式、34は第5類の十三菩提式土器である。

35は第III群加曾利E式の連弧文土器である。

36～38は第IV群第2類の称名寺2式土器で、区画内に36は条線文、37は縄文が施文され、38は無文となる。

39～47は第V群土器の深鉢で、39、40、73は地文縄文上、他は無地文上に沈線文が施文される。41、46、47は胴部で括れる深鉢で、46、47は胴部に重弧状モチーフが施文される。

1～4、48～58、60～66は第VI群のバケツ形の深鉢である。1はバケツ形土器と胴部が括れる土器とが融合した土器で、珍しい例である。3、48～52は口縁部に隆帯が巡らされ、磨消縄文の幾何学モチーフが施文される土器である。54～56、60、61、65は胴部に縄文帯が施文される。2、57、58は胴部に沈線帯が施文され、刻文帯を持つ内文が施され、53は胴部に縄文帯が施文され、沈線帯の内文が施される。62、63は弧線文が、64は平行沈線が、66は鋸歯状文が、74は円形文を中心とした放射状のモチーフが施文される。

67、68、75は胴部で括れる器形の深鉢で、胴部の75は地文縄文上に紡錘状の多条沈線が垂下される。

5は短い口縁部が開きながら立つ壺で、第VI群土器と思われる。

76～79は第VII群土器の深鉢で、76、78は平口

縁で、沈線文帯が施文され、内文も施される。77、79は波状口縁で、77はクランク状の区切り文が施文される。77、79とも内湾する口縁部に円形刺突文列が施される。

80は胴部に連なって垂下する連鎖状対弧文を起点として、上下対向の弧線文が施される第VIII群土器の深鉢である。対弧文は胴部区画の沈線帯までに及んでいる。

81～87は格子目文土器で、83は沈線の横位区画後に、格子目文が描かれる。

7、88～92は紐線文系土器群で、7は地文縄文上に紐線文のみ施文される。89は沈線帯に縦位沈線の区切り文が施され、88、92は同一個体で鋸歯状文と弧線文が組み合わせるもので、文様帯の上下の区画帯に「の」字状文から変形した3本沈線

第19表 表採非掲載土器分類表

分類	時期	型式	全体			
			口縁部	胴部	底部	小計
I群	早期	撚糸文				0
		条痕文	1	7		8
			1	7	0	8
小計						
II群	前期	羽状縄文				0
		諸磯a				0
		諸磯b / 浮島		1		1
		諸磯c				0
		十三菩提		5		5
小計			0	6	0	6
III群	中期	五領ヶ台2				0
		猪沢 / 勝坂I				0
		加曾利E III				0
		加曾利E IV				0
小計			0	0	0	0
IV群	後期	称名寺1				0
		称名寺2				0
小計			0	0	0	0
V群	後期	堀之内1	5	9		14
VI群		堀之内2	54	169		223
小計			59	178	0	237
VII群	後期	加曾利B 1	36	90		126
VIII群		加曾利B 2	4	14		18
小計			40	104	0	144
IX群	後期	縄文のみ	2	87		89
		無文	7	480	52	539
小計			9	567	52	628
合計			109	862	52	1023

第20表 掲載土器計測表

（）は推定値

図 番号	地区	口径cm	底径cm	現存高cm	現存率%	(推定最大幅)
26 1	H3	(18.4)	(5.4)	14.7	25.0	
27 49	H3	—	(4.1)	1.9		
50	H3	—	(11.0)	6.0		
51	H3	—	(9.2)	6.4	—	
52	H3	—	10.2	4.8	—	
53	H3	—	7.1	5.1	—	
54	H3	—	7.0	3.9	—	
55	H3	—	7.1	3.1	—	
56	H3	—	(10.7)	4.9	—	
33 1	I2	(18.1)	7.8	13.3	—	胴最大径 19.3
35 66	I2(3)	—	—	9.0		(11.7)
36 86	I2	—	11.2	9.2	—	
87	I2	—	(5.6)	6.2	—	
88	I2	—	8.4	5.0	—	
89	I2	—	11.0	2.5	—	
90	I2	—	(15.6)	5.0	—	
91	I2	—	(9.7)	3.6	—	
92	I2	—	(9.4)	2.0	—	
93	I2	—	10.7	2.3	—	
37 1	I3	(33.8)	—	17.5	15.0	
2	I3	(23.0)	—	5.2	15.0	
3	I3	(10.8)	—	8.0		
4	I3	(11.4)	(4.6)	12.5	—	
5	I3	(21.4)	—	12.1	25.0	
6	I3	(27.6)	—	6.8	25.0	
7	I3	(27.6)	—	7.5	25.0	
8	I3	(22.8)	—	11.8	15.0	
9	I3	(20.6)	—	6.6	15.0	
10	I3	(33.8)	—	21.0	15.0	
11	I3	(23.2)	—	10.6	25.0	
12	I3	—	—	9.6	10.0 (32.9)	
13	I3	(31.9)	7.0	14.2	25.0	
38 14	I3	(19.8)	—	10.7	10.0 (23.2)	
15	I3	(23.8)	(6.0)	13.1	—	
16	I3	(15.3)	—	6.0	50.0 (15.3)	
17	I3	(24.8)	(9.0)	7.5	15.0	
18	I3	(28.4)	(9.7)	10.4	25.0	
19	I3	(28.4)	(10.8)	11.1	5.0	
20	I3	27.0	(7.2)	12.8	—	
39 21	I3	(11.0)	7.6	15.9	80.0 (15.7)	
22	I3	(4.8)	5.5	9.0	60.0 (11.6)	
23	I3	(6.1)	(6.7)	7.6	40.0 (15.6)	
45 210	I3	(11.3)	(6.9)	6.5		
47 266	I3(11)	7.8	—	3.0		
268	I3(11)	—	—	2.1		(9.6)
282	I3	—	8.0	6.4		327と同一個体
48 295	I3	—	(6.7)	3.2		
302	I3	—	(9.9)	9.4	—	
303	I3	—	13.2	8.1		
304	I3	—	10.1	8.1		
305	I3	—	10.0	7.5		
306	I3	—	(8.1)	8.0	—	
307	I3	—	6.0	7.5	—	
308	I3	—	9.6	4.0	—	
309	I3	—	7.1	5.3		
311	I3	—	10.5	4.7		
49 310	I3	—	5.8	6.0	—	
312	I3	—	10.7	3.1		
313	I3	—	(7.2)	5.2	—	
313	I3	—	10.1	3.1		
314	I3	—	9.7	2.8		
315	I3	—	9.0	4.3	—	
316	I3	—	(10.0)	4.2	—	
318	I3	—	6.4	3.7		

図 番号	地区	口径cm	底径cm	現存高cm	現存率%	(推定最大幅)
319	I3	—	5.9	3.0		
320	I3	—	(9.6)	3.7	—	
321	I3	—	10.0	1.4	—	
322	I3	—	(8.5)	12.5	—	
323	I3	—	(8.0)	9.2	—	
324	I3	—	7.7	7.9	—	
325	I3	—	(6.6)	5.3	—	
326	I3	—	(11.2)	2.8	—	
327	I3	—	(14.0)	3.4	—	
328	I3	—	7.7	5.9		
329	I3	—	(10.3)	6.2		
330	I3	—	10.5	4.4		
331	I3	—	(10.0)	3.1	—	
332	I3	—	8.2	4.7	—	
333	I3	—	9.8	4.3	—	
334	I3	—	(11.1)	4.3	—	
335	I3	—	(10.6)	3.5	—	
336	I3	—	7.8	3.9	—	
337	I3	—	8.6	2.5		
52 13	J3	(22.4)	—	15.5	25.0	
54 1	J2	(21.0)	—	13.2	20.0	(21.4)
2	J2	(13.7)	—	5.2	15.0	(15.7)
3	J2	(17.8)	—	7.5	20.0	(19.9)
4	J2	(23.0)	—	7.5	20.0	(23.4)
5	J2	(24.9)	—	12.3	30.0	(26.7)
6	J2	(19.9)	(8.0)	9.6	25.0	(24.5)
8	J2	—	10.6	10.9		
9	J2	—	7.4	7.7		
10	J2	—	11.3	2.5		
11	J2	(22.0)	(7.9)	4.7	20.0	(28.2)
11	J2	—	6.0	2.7		
56 1	J3	10.2	5.3	9.6	—	
2	J3	(20.5)	—	6.9	25.0	
3	J3	(28.2)	(12.4)	25.3	20.0	
4	J3	(25.4)	—	6.6	15.0	
5	J3	(12.1)	(6.6)	18.2	—	
6	J3	14.4	12.5	7.9	—	
7	J3	(21.0)	(8.6)	12.1	80.0	
8	J3	(28.0)	(10.5)	34.0	50.0	
9	I3	(12.7)	—	6.3		
10	J3	—	—	9.6	50.0	(25.2)
57 11	J3	(24.0)	(6.5)	27.9	45.0	
12	J3	(24.8)	—	10.7	15.0	
14	J3	(25.2)	10.3	31.0	80.0	
15	J3	(25.0)	—	12.1	25.0	
16	J3	(21.4)	7.4	25.7	40.0	
17	J3	(26.5)	—	12.0	20.0	
18	J3	(24.5)	—	12.4	20.0	
58 19	J3	(20.2)	(12.2)	10.6	70.0	
20	J3	(12.8)	6.9	6.2	—	
21	J3	(12.8)	(7.3)	6.7	50.0	
22	J3	(12.5)	(7.1)	8.4	25.0	(13.1)
23	J3	(14.7)	—	5.3	20.0	(14.9)
24	J3	(31.7)	(13.0)	5.0	5.0	
25	J3	(31.2)	(8.5)	10.6	20.0	
26	J3	(10.1)	5.4	13.8	40.0	(23.6)
26	J3	(8.8)	(8.0)	9.1	25.0	(21.6)
27	J3	6.3	(7.1)	13.2	65.0	(15.5)
28	J3	(16.0)	—	10.7	40.0	
59 29	J3	5.6	6.9	12.5	90.0	(15.0)
30	J3	(18.7)	(9.2)	6.1		縦 (14.2)
31	J3	(10.8)	6.8	4.0		(7.6)
63 141	J3	—	—	3.9		最大幅 9.4
149	J3(8)	—	—	4.5		(22.2)

図 番号	地区	口径cm	底径cm	現存高cm	現存率%	(推定最大幅)
150	J3(8)	—	—	5.4		(20.1)
64	168	J3	—	6.2	1.9	
171	J3	—	9.1	5.9		
173	J3	—	(11.4)	4.8		
174	J3	—	10.7	3.2		
175	J3	—	8.7	6.2		
176	J3	—	(8.8)	4.5		
177	J3	—	(10.2)	5.8		
178	J3	—	9.5	3.9		
179	J3	—	(9.0)	4.6		
180	J3	—	8.3	5.0		
65	172	J3	—	(8.8)	6.5	
181	J3	—	(11.0)	4.3		
182	J3	—	8.2	4.0		
183	J3	—	6.0	3.3		
184	J3	—	8.4	5.0		
185	J3	—	(10.4)	4.3		
186	J3	—	6.7	7.9		
187	J3	—	6.0	6.2		
188	J3	—	(9.3)	16.7		
189	J3	—	(10.9)	8.3		
190	J3	—	8.4	4.3		
191	J3	—	(12.3)	3.0		
192	J3	—	11.4	4.3		
193	J3	—	(10.8)	3.0		
194	J3	—	9.5	3.5		
195	J3	—	8.8	2.0		
196	J3	—	8.2	1.5		
197	J3	—	(10.0)	3.7		
67	1	A1	(23.6)	—	7.6	10.0
	2	A1	—	—	13.2	20.0 (27.6)
	3	A1	—	(7.2)	8.2	
68	1	A2	—	—	13.1	50.0 (19.0)
	2	A2	(27.0)	—	11.7	(29.4)
	3	A2	(26.6)	—	8.3	15.0 (28.2)
	4	A2	(21.8)	—	6.1	15.0 (23.9)
	5	A2	(19.2)	—	8.5	20.0
	8	A2	—	9.0	8.2	
	9	A2	—	8.8	6.5	
	10	A2	—	(10.1)	5.4	
	11	A2	—	11.0	2.5	
	12	A2	—	(8.9)	4.2	
72	1	B1	(22.1)	—	9.9	25.0 (23.2)
	2	B1	17.6	—	8.3	60.0 (19.5)
	3	B1	—	—	4.8	25.0 (16.3)
	4	B1	(12.1)	—	6.2	50.0
	5	B1	(28.8)	(10.0)	16.1	20.0
	6	B1	—	(9.9)	12.9	20.0 (22.2)
	7	B1	34.8	8.4	22.3	—
	8	B1	—	9.4	4.0	
	9	B1	—	(11.2)	3.4	
	10	B1	—	7.7	3.1	
	11	B1	—	(8.5)	5.0	
	59	B1(3)	(8.4)	—	3.0	
74	61	B1	—	(8.0)	2.2	
75	1	B2	(29.6)	—	17.7	20.0 (31.1)
	2	B2	(17.6)	(7.3)	13.5	40.0
	3	B2	—	—	8.3	60.0 (17.5)
	4	B2	(29.2)	—	11.9	20.0
	5	B2	(30.7)	—	23.0	25.0
	6	B2	(25.9)	9.2	20.9	— (28.9)
	7	B2	(21.0)	(6.8)	7.3	30.0
	8	B2	15.0	—	5.4	90.0
	9	B2	(33.8)	(12.1)	10.6	5.0 (36.0)

図 番号	地区	口径cm	底径cm	現存高cm	現存率%	(推定最大幅)
78	85	B2	—	(6.5)	3.6	
79	97	B2	—	(12.8)	14.1	40.0 (23.6)
98	B2	—	11.9	6.7		
99	B2	—	9.2	12.6		
100	B2	—	10.4	7.9		
101	B2	—	(8.1)	6.1		
102	B2	—	9.7	5.9		
103	B2	—	(8.2)	3.5		
104	B2	—	9.3	2.3		
105	B2	—	8.4	4.8		
106	B2	—	8.8	5.9		
107	B2	—	5.8	3.8		
108	B2	—	8.1	5.8		
81	1	C1	(29.8)	(9.1)	15.8	50.0 (27.2)
	2	D1	—	—	19.7	30.0 (25.5)
	3	C1	(24.6)	—	14.3	30.0
	4	C1	(31.4)	(14.0)	27.6	35.0
	5	C1	(20.2)	—	11.3	25.0
	6	C1	(24.3)	—	9.2	25.0
	7	C1	(20.0)	—	7.8	25.0
	8	C1	(26.0)	—	10.1	15.0
	9	C1	—	(8.5)	13.9	40.0 (15.8)
82	10	C1	11.5	4.1	7.1	—
	11	C1	(12.6)	(5.5)	4.9	20.0
	12	C1	(38.2)	(14.0)	15.7	10.0 (38.2)
	13	C1	—	(8.0)	18.0	50.0 胴最大径 24.8
	14	C1	(32.8)	(10.1)	6.5	25.0
	15	C1	(13.8)	(11.5)	10.6	(30.8)
	16	C1	—	—	9.4	40.0 (22.6)
	17	C1	(9.3)	(5.5)	10.4	30.0 (18.6)
	18	C1	(26.5)	—	14.9	50.0
83	19	C1	—	8.0	8.2	
	20	C1	—	(9.0)	8.3	
	21	C1	—	(9.4)	6.0	
	22	C1	—	(10.5)	4.9	
	23	C1	—	7.8	7.0	
	24	C1	—	(8.6)	3.7	
	25	C1	—	(8.9)	3.5	
	26	C1	—	(9.9)	3.2	
	27	C1	—	(15.0)	3.5	
	28	C1	—	(10.5)	3.7	
	29	C1	—	(7.5)	2.3	
	30	C1	—	(10.0)	3.6	
	31	C1	—	10.0	2.9	
	32	C1	—	(8.9)	3.8	
	33	C1	—	(10.0)	2.2	
87	151	C1(7)	(9.0)	—	1.2	
	155	C1	—	(8.0)	1.9	
89	52	C2	—	(14.4)	8.6	65.0
	53	C2	—	8.5	3.5	
	54	C2	—	(10.3)	4.0	
	55	C2	—	10.4	4.9	
	56	C2	—	6.7	1.2	
	57	C2	—	9.0	4.0	
96	1	D10	(33.2)	(17.2)	12.6	25.0
	2	D10	—	(7.5)	5.4	
97	1	D1	(24.6)	—	12.0	20.0
	2	D1	(30.8)	—	12.1	25.0
	3	D1	(28.2)	—	7.3	10.0
	4	D1	—	(5.3)	14.3	40.0 (13.7)
	5	D1	(44.2)	—	24.8	10.0
	6	D1	(38.5)	—	15.5	10.0
	7	D1	(27.4)	—	9.5	25.0
	8	D1	(22.0)	—	14.5	

図 番号	地区	口径cm	底径cm	現存高cm	現存率%	(推定最大幅)
9	D1	—	(9.6)	17.7	15.0	(22.0)
98	10 D1	(23.8)	—	15.8	15.0	
11	D1	(39.0)	—	14.3	10.0	
12	D1	(42.8)	(14.3)	34.0	50.0	
13	D1	(25.8)		8.1	15.0	
14	D1	(23.2)		9.5	15.0	
15	D1	(28.0)	—	11.0	15.0	
16	D1	(23.0)	(9.3)	17.9	70.0	
99	17 D1	(24.2)	(10.2)	19.1	70.0	
18	D1	—	9.4	12.2	70.0	
19	D1	(18.0)	(7.2)	10.4	25.0	
20	D1	(34.9)	—	18.2	50.0	
21	D1	—	(10.6)	19.0	25.0	
22	D1	—	—	18.4	15.0	(30.9)
23	D1	(41.2)	—	16.1	10.0	
24	D1	11.8	(5.0)	9.0	95.0	(12.2)
100	25 D1	—	(9.5)	12.8		(17.4)
26	D1	(23.6)	—	8.9	15.0	
27	D1	—	—	29.8	25.0	(40.0)
28	D1	(25.5)	—	16.0	30.0	
29	D1	(35.8)	—	10.8	25.0	
30	D1	(19.8)	—	9.9	15.0	
31	D1	(15.8)	—	6.9		
32	D10	(17.4)	(7.8)	14.5	35.0	
33	D1	(26.8)	—	14.8	20.0	
101	34 表採	24.6	—	14.9	50.0	
35	D1	(20.0)	—	13.0	25.0	
36	D1	(18.0)	—	9.5	30.0	
37	D1	(21.8)		9.4	15.0	
38	D1	(25.8)		13.9	25.0	
39	D1	—	10.3	18.3	70.0	19.4
40	D1	(17.2)	(9.3)	18.5	25.0	
41	D1	(16.3)	(8.0)	10.6	50.0	
42	D1	(25.2)		9.8	20.0	
43	D1	(35.4)	12.5	20.4	50.0	
44	D1	(20.0)	(9.5)	11.2	40.0	
45	D1	(21.9)	(7.3)	10.4	20.0	
46	D1	(9.9)	—	2.5	25.0	
102	47 D1	(17.2)	(6.6)	6.9	30.0	
48	D1	(33.7)	(11.5)	12.6	65.0	
49	D1	(29.8)	(9.0)	12.5	15.0	9.5
50	D1	(25.8)	(7.7)	15.8	40.0	
51	D1	—	7.0	8.7	80.0	10.0
103	52 D1	(18.8)	9.2	13.4	70.0	
53	D1	(27.2)	(9.2)	23.8	25.0	
54	D1	—	—	11.1	10.0	(35.8)
55	D1	—	10.8	11.1		
56	表採	—	10.6	12.1	80.0	
57	D1	—	(11.8)	9.7	50.0	
58	D1	—	(9.8)	7.1		
59	D1	—	10.2	8.0	95.0	
104	60 D1	—	7.0	11.3	70.0	
61	D1	—	10.2	6.5		
62	D1	—	10.9	5.4		
63	D1	—	10.0	4.3		
64	D1	—	(10.0)	6.4		
65	D1	—	9.6	4.1		
66	D1	—	(9.8)	5.3		
67	D1	—	8.8	5.5		
68	D1	—	9.1	3.1		
69	D1	—	11.0	6.3		
70	D1	—	(12.0)	2.4		

図 番号	地区	口径cm	底径cm	現存高cm	現存率%	(推定最大幅)
71	D1	—	9.5	5.4		
72	D1	—	7.6	4.3		
73	D1	—	(8.7)	3.8		
74	D1	—	(7.6)	3.3		
75	D1	—	11.8	5.0		
76	D1	—	(10.7)	6.1		
77	D1	—	(10.2)	4.6		
78	D1	—	6.9	2.9		
79	D1	—	5.9	5.7		
80	D1	—	(6.3)	3.5		
81	D1	—	9.0	0.4	—	
82	D1	—	6.4	1.7		
111	289 D1	—	(10.0)	1.3		
315	D1(15)	—	(7.5)	4.5		(13.5)
112	316 D1	—	(9.4)	7.7		(15.5)
323	D1(16)	(8.1)	—	4.5		
324	D1	—	(11.0)	4.5		
325	D1	—	(8.0)	2.1		
326	D1	—	(9.8)	7.3		
115	1 E10	22.4	10.4	25.0	—	
2	E10	(25.8)	(8.7)	10.7	60.0	
3	E10	—	10.3	4.2		
116	2 E1	(23.7)	(8.2)	22.3	50.0	
3	E1	(33.8)	—	14.6	20.0	
4	E1	(27.7)	—	10.0	15.0	
5	E1	17.0	(4.9)	15.4	—	
6	E1	—	(13.5)	21.5		
7	E1	—	(9.8)	9.8	—	
8	E1	(25.2)	—	8.7	25.0	
9	E1	(36.6)	(12.9)	18.6	15.0	
117	10 E1	(34.6)	—	14.3	25.0	
11	E1	—	8.0	6.1		
12	E1	—	10.2	6.2		
13	E1	—	7.6	5.5		
14	E1	—	(9.0)	3.6		
15	E1	—	7.0	5.9		
16	E1	—	(10.4)	6.3		
118	27 E1(39)	—	(11.1)	1.8		
120	1 表採	(24.0)	(9.3)	19.6	30.0	
2	表採	(14.2)	(8.1)	14.8	40.0	
3	表採	—	(6.9)	8.5		
4	表採	—		9.7		(13.2)
5	表採	(31.0)	—	16.6	15.0	
6	表採	(3.1)	(4.2)	7.1	40.0	(10.7)
7	表採	(23.5)		16.2	15.0	
8	表採	—	10.8	4.7		
9	表採	—	9.7	5.5		
10	表採	—	(9.2)	8.3		
11	表採	—	10.0	4.0		
12	表採	—	8.0	5.0		
13	表採	—	8.4	5.0		
14	表採	—	(9.0)	6.4		
15	表採	—	(9.3)	3.7		
16	表採	—	8.0	2.3		
17	表採	—	8.5	5.5		
18	表採	—	6.6	5.4	80.0	
19	表採	—	8.8	4.5		
20	表採	—	9.1	2.1		
21	表採	—	(4.0)	3.1	50.0	
124	116 表採 (7)	(9.0)	—	5.4		
119	表採	—	(6.3)	8.9		(13.5)

の単位文が施文されている。90は地文縄文上に横位の曲線文、91は楕円区画文等が施文されている。以上は第VII群土器である。

93～97は第IX群土器で、縄文が施文される土器群である。

98～103は口縁部の内湾する鉢で、98、99は縄文帯に縦位沈線の区切り文が施文される。101は無文帯に「の」字状文、100は対弧文が施文されているものと思われる。102、103は突起の付く鉢である。100、102は第VIII群になる可能性があり、98、99、101、103は第VII群土器である。

105～111は口縁部が直線的に開き、内文が施文される浅鉢で、105～108、110は第VI群土器、

109、111は第VIII群土器である。

112は第III群第4類の微隆起線でモチーフが描かれる壺形土器で、赤彩されている。

6、15～122は注口土器である。6は球形状の胴部に渦巻文が施文される。115は下膨れの器形で、口縁部に3段の楕円形文が施文され、赤彩されている。119は球形状の胴部に条線の渦巻文が施文される。以上は第VI群土器である。

116、120、121は第VII群の注口土器と思われ、113、114、117、118の注口部及び122の底部は第VI群のものと思われる。

8～15、17、19、21は深鉢の底部で、18、20、16は鉢の底部と思われる。

2. 土製品

(1) 土偶 (第125、126図)

第18・20次調査区から、土偶が5点出土した。いずれも後期前葉の所産で、土器分類では第VI群の堀之内2式終末期に相当するものと思われる。

第126図1～4は筒形土偶で、調査区北側のI～J-2～3区でまとまって出土した。1はJ-2⑤区から出土した胴部から底部にかけての破片で、推定底径11.2cm、現存高9.4cm、厚さは肥厚する底部で1.2cm、薄い胴部で0.6cmを測る。胴部の中央部に大きな円孔が穿たれ、その下に小さな円孔が5段に施文されている。この円孔を菱目文状に沈線が囲んで垂下する。肥厚する底部は4本の沈線で区画され、斜位の刻みが施されている。胴部の大きな円孔脇には、3本沈線で横位綾繩状のモチーフが施文されている。このモチーフは十字形に施文される可能性もある。胴部上半は同種の沈線で横位区画されている。器面が丁寧に研磨されており、光沢を放っている。2はI-3⑫区から出土しているが、1と同一個体の可能性がある。

3はI～J-3区から出土しており、1同様に底部が2本沈線で区画されて刻みが施される。胴の上部は円形刺突文列が沿う3本沈線で区画され

る。全体に良く研磨され、薄く漆が塗られている。現存高10.2cmを測る。

4も底部破片で、2本沈線で区画され、底部近くに大きな円孔があく。推定底径は8.9cm、底部の幅は2.3cmを測る。

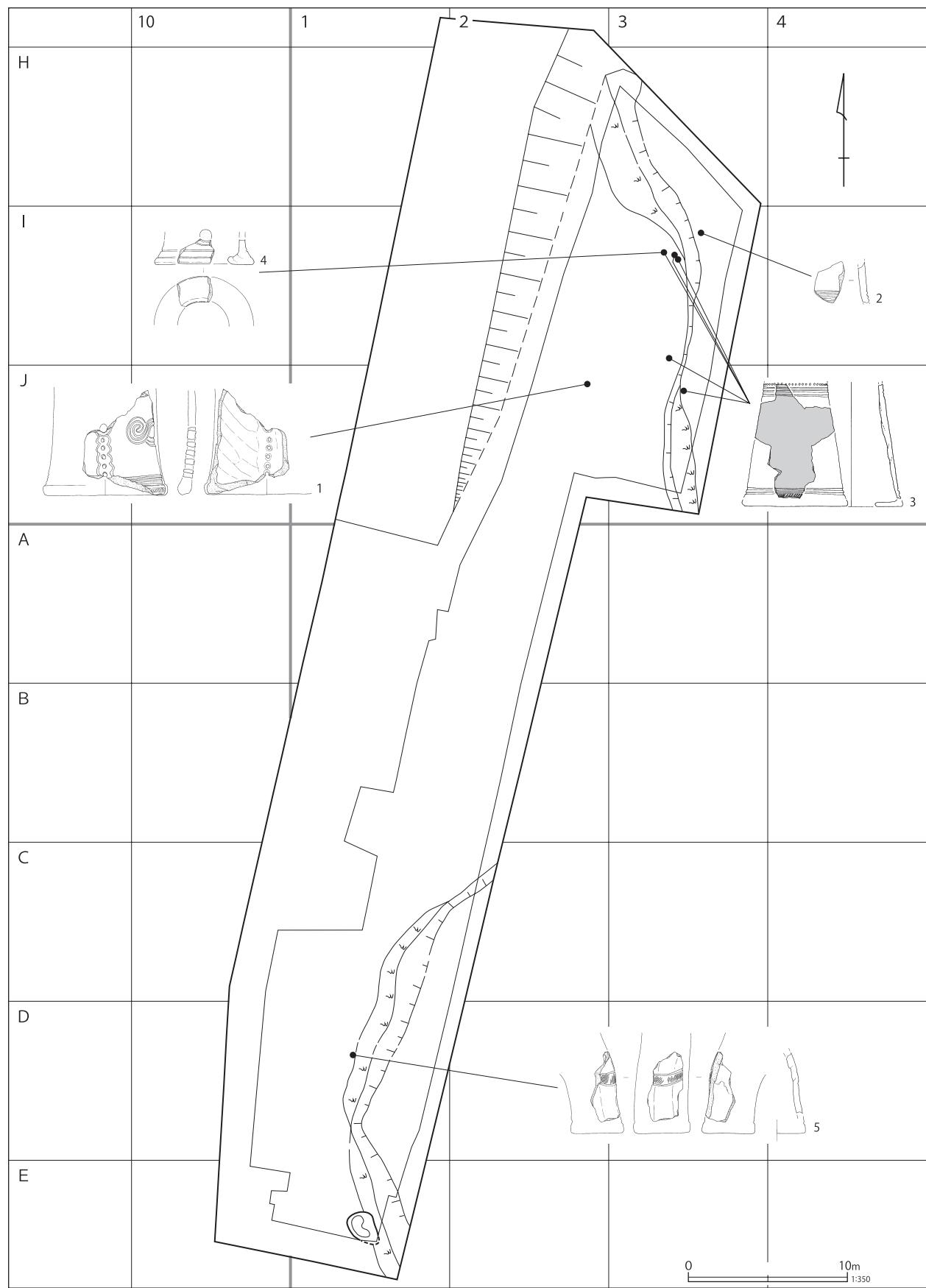
6は中空の脚部の外側にあたる破片で、膝部あたりに、磨消縄文の縄文帯が巡らされている。堀之内2式に伴う仮面形土偶の左足の破片であると思われる。

(2) 土製円盤 (第127図1～14)

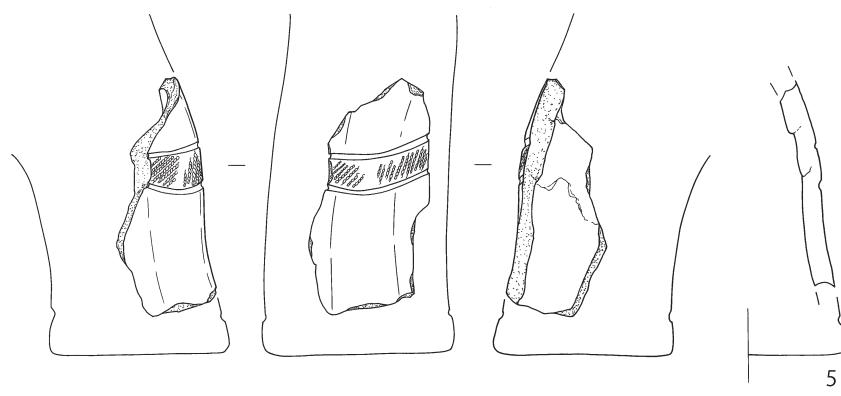
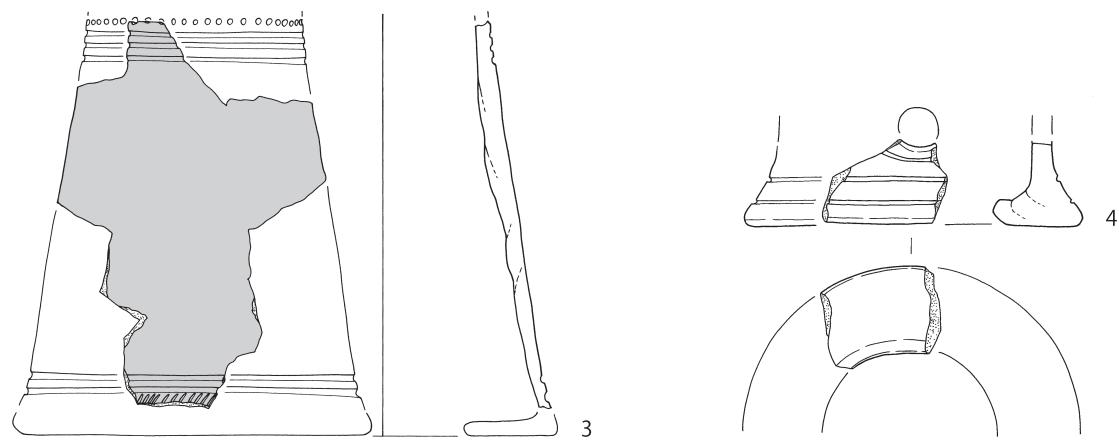
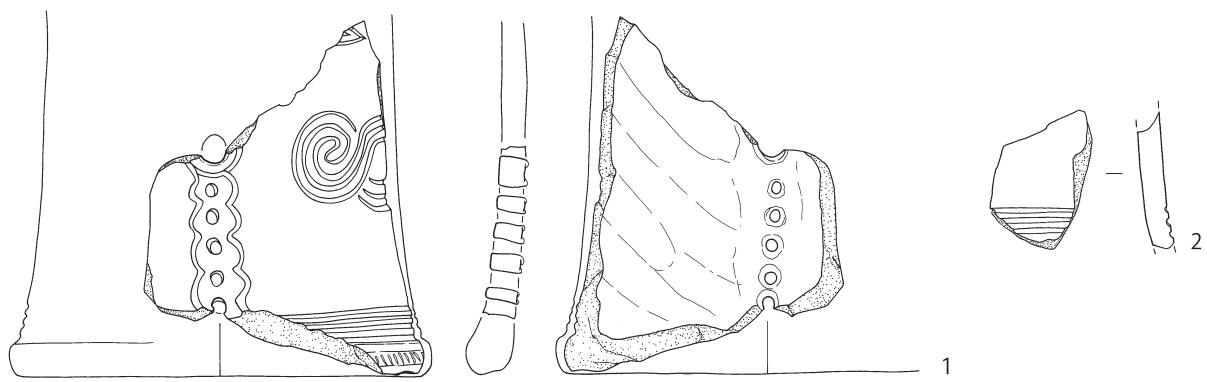
土器片の周囲が円形状に打ちかかれて作られており、大形なものは少ない。また、周囲を丁寧に研磨するものも少なく、円形状であることから土製円盤としたが、土錐の未製品である可能性もある。法量等は第21表に示した。

(3) 土錐 (第127図15～28)

小形の土器片を利用した土器片錐が13点、俵状の土錐が1点出土した。26は縦長の俵状の土錐で、長径と短径の中央部に紐かけ用の沈線が巡らされる。他は土器片の周辺に研磨を施したもので、長軸方向にスリットを入れたものが多い。法量は第22表に示した。

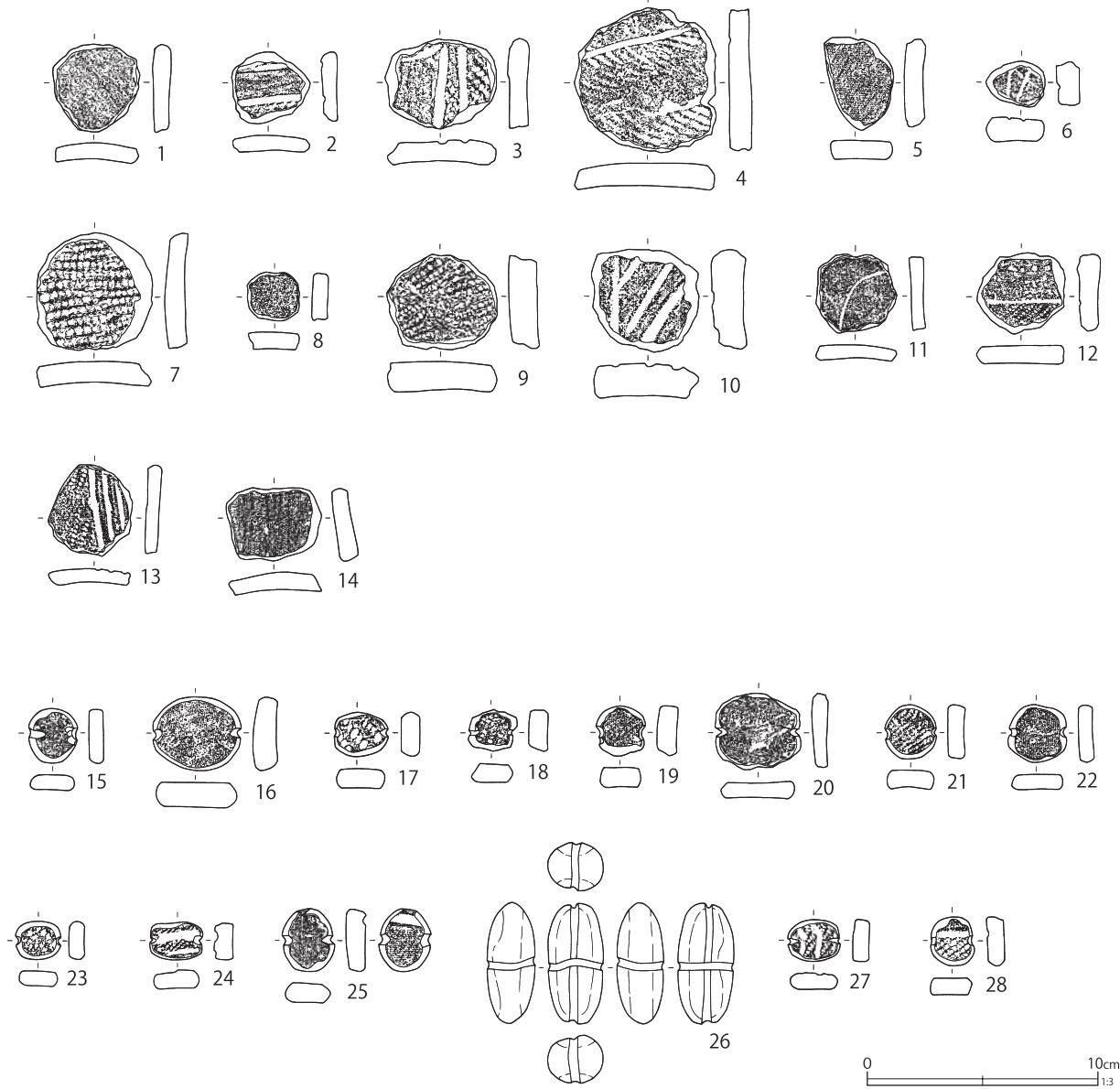


第125図 土偶分布図



0 5cm
1:2

第 126 図 土偶実測図



第 127 図 土製品実測図

第 21 表 土製円盤計測表

図番	位置	長径cm	短径cm	厚さcm	重さg
127 1	H3	3.8	3.7	0.7	12.3
2	I2	3.0	3.3	0.6	7.3
3	I3	3.9	4.8	0.8	21.6
4	J3	6.1	6.1	1.0	49.5
5	A2	3.9	2.8	0.8	11.2
6	C1	1.9	2.5	1.0	5.6
7	C1	5.0	5.0	0.9	29.5
8	C2	2.0	2.2	0.7	4.4
9	D1	4.0	4.7	1.3	28.6
10	D1 P71	4.4	4.5	1.4	35.5
11	D1	3.3	3.4	0.6	8.9
12	D1 P469	3.3	3.7	0.8	13.8
13	D1	3.8	3.5	0.6	10.1
14	D1	3.1	4.0	0.8	12.9

第 22 表 土錘計測表

図番	位置	長径cm	短径cm	厚さcm	重さg
127 15	I3	2.3	2.1	0.6	4.5
16	B2 P4	3.1	3.4	1.0	15.2
17	B2	1.9	2.3	0.8	4.6
18	B2	1.8	2.0	0.8	3.5
19	B2	2.1	2.1	0.9	4.4
20	B2	3.3	3.6	0.6	10.7
21	B2	2.3	2.2	0.7	4.9
22	C1	2.5	2.5	0.6	5.2
23	C1	1.7	2.0	0.6	2.6
24	C1	1.6	2.2	0.7	3.8
25	C1	2.7	2.2	0.8	6.1
26	D1 P619	5.2	2.4	2.0	26.0
27	B2 P5	1.8	2.2	0.7	3.3
28	B2	2.1	1.9	0.7	3.8

3. 石器

(1) 旧石器時代の石器 (第128図)

旧石器時代の石器群は、ローム層中よりプライマリーな状態で出土したものはなかった。

第128図1は珪質頁岩製のナイフ形石器で、D1区東側から続く台地の裾部上に堆積した砂質粘土層の基底部に張り付くような状態で出土したものであり、台地上から流れ込んだ遺物と判断されたものである。

縦長の珪質頁岩の剥片が利用されており、基部に若干の調整剥離が行われ、左右の側縁に細かな調整剥離が行われている。正面右刃では中央部付近の張り出している部分に主要剥離面側からやや大き目な調整剥離が、左刃では基部付近から中央部にかけの湾曲部に正面側の剥離面から細かな調整剥離が行われている。縦7.7cm、横2.8cm、厚さ1.3cm、重さ20.5gを測る。

2はチャート製の横長の剥片で、最終的に剥離方向を90°変えて横長剥片が剥取されている。旧石器時代の剥片と思われるが、縄文時代の可能性もある。

(2) 縄文時代の石器 (第129～145図)

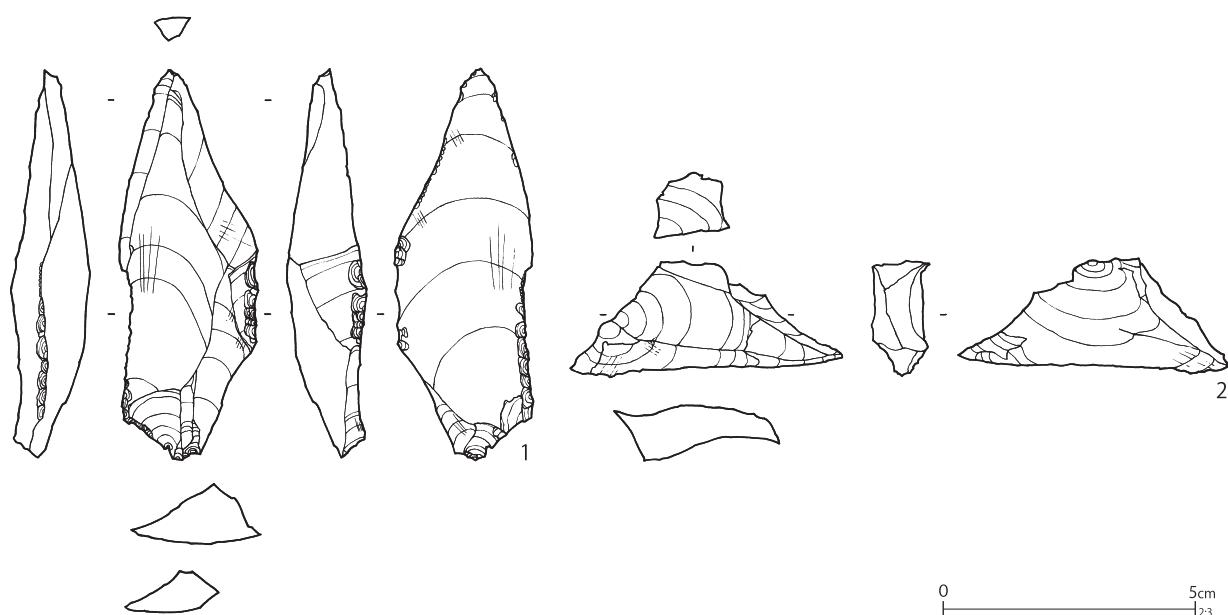
縄文時代の石器は、調査区内の全体から92点出土した。その分布状況については、第129図に示した。石器群については出土グリッド別ではなく、種類別に説明を加えたい。

石鎌 (第130図1～4)

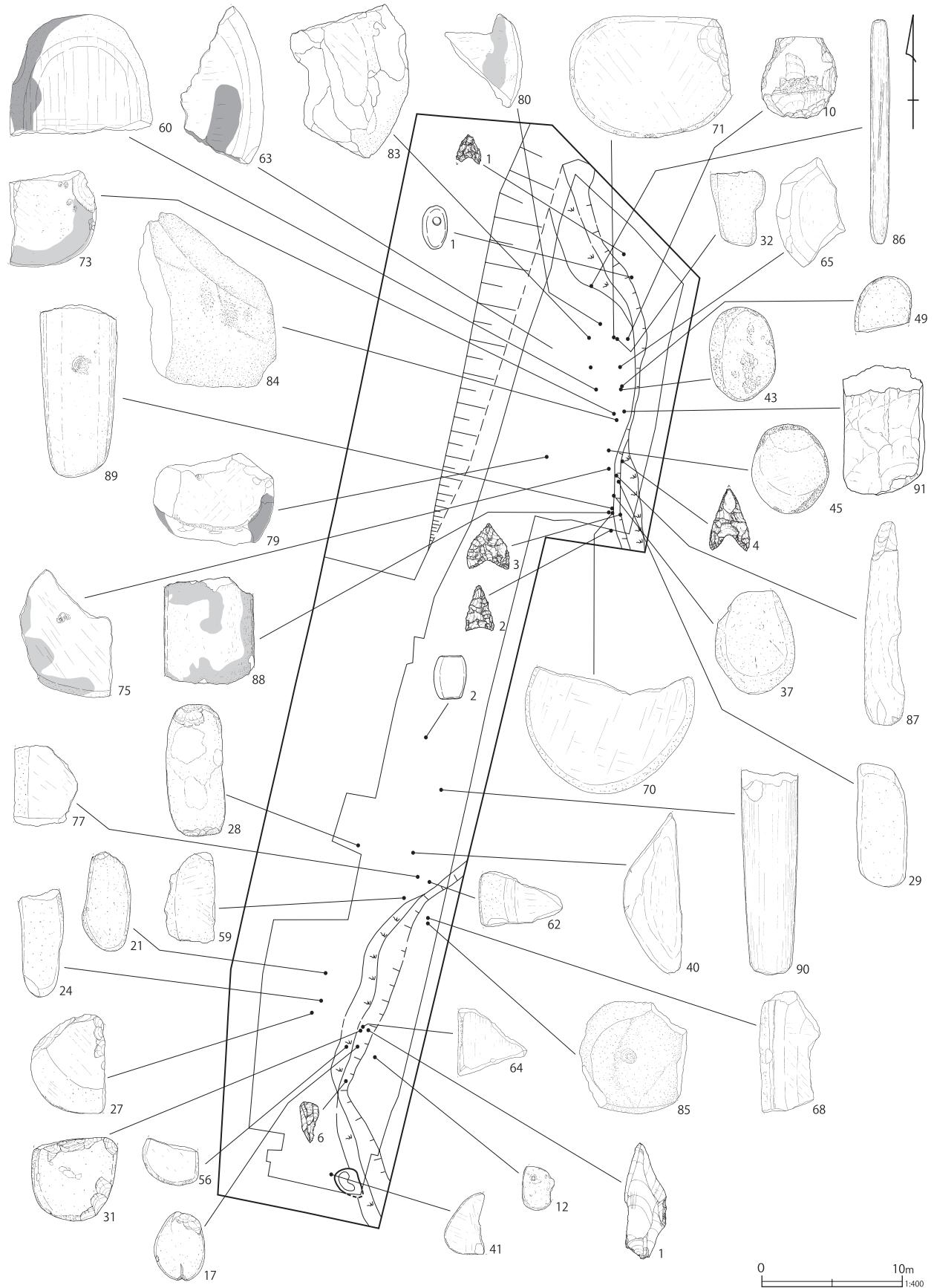
4点出土した。1、3、4は黒耀石製で、2はチャート製である。1、3は比較的短身のずんぐりとした凹基石鎌で、基部の抉りも浅い。2、4は長身の二等辺三角形の凹基石鎌である。2は基部の抉りが浅い石鎌である。4は先端部を若干欠損するが、抉りの深い黒耀石製の石鎌で、バランスのとれた優品である。

楔形石器 (第130図5、6)

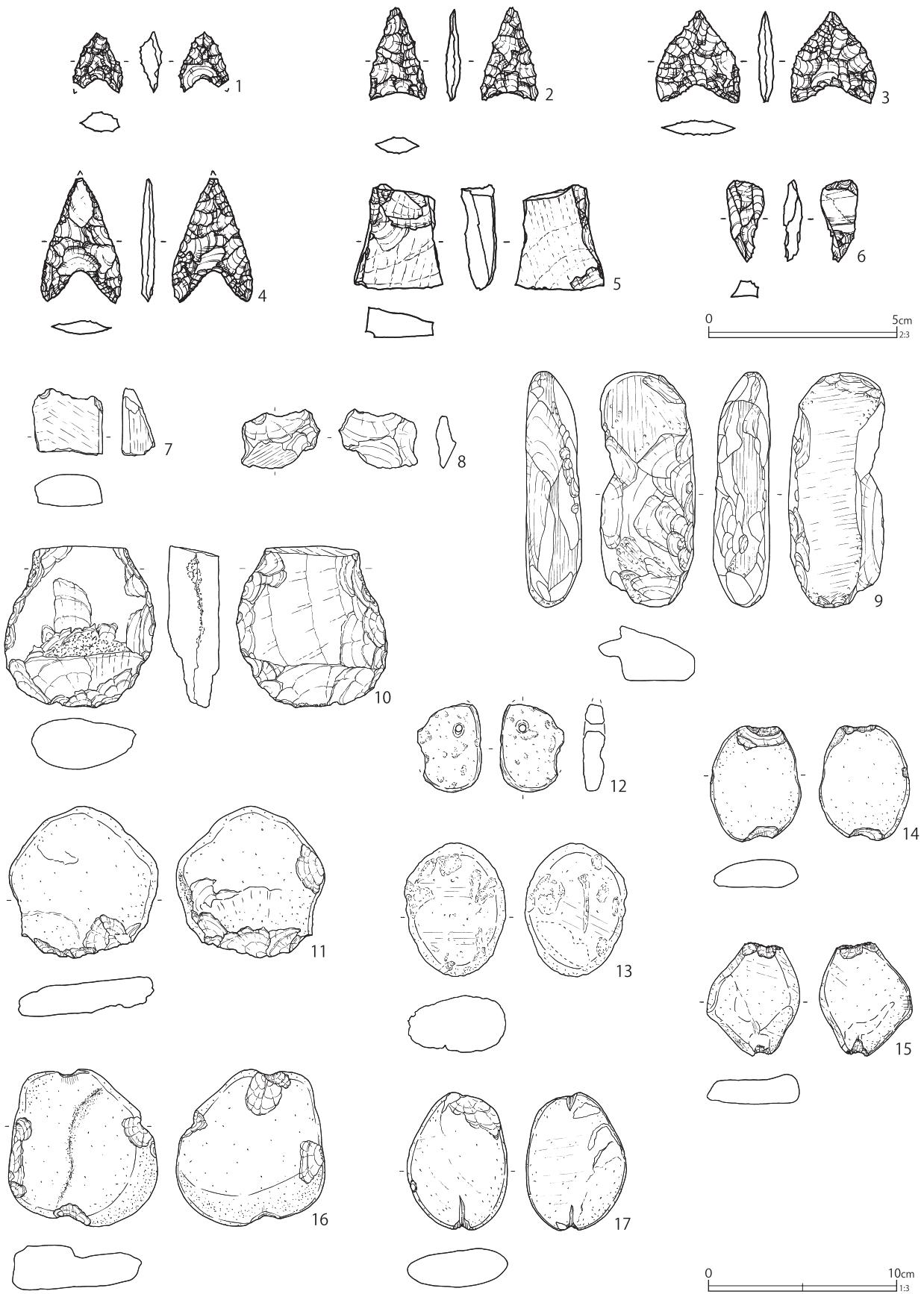
楔形の剥片が2点出土した。5はチャート製で、6は黒耀石製である。5は上部及び左右から若干の調整剥離が行われるが、下端はヒンジの形状がそのまま残されている。6は上下に加撃痕が認められる。両者は、石鎌の作成段階の両極打法で剥取された、剥片の可能性が高い。



第128図 旧石器時代の石器



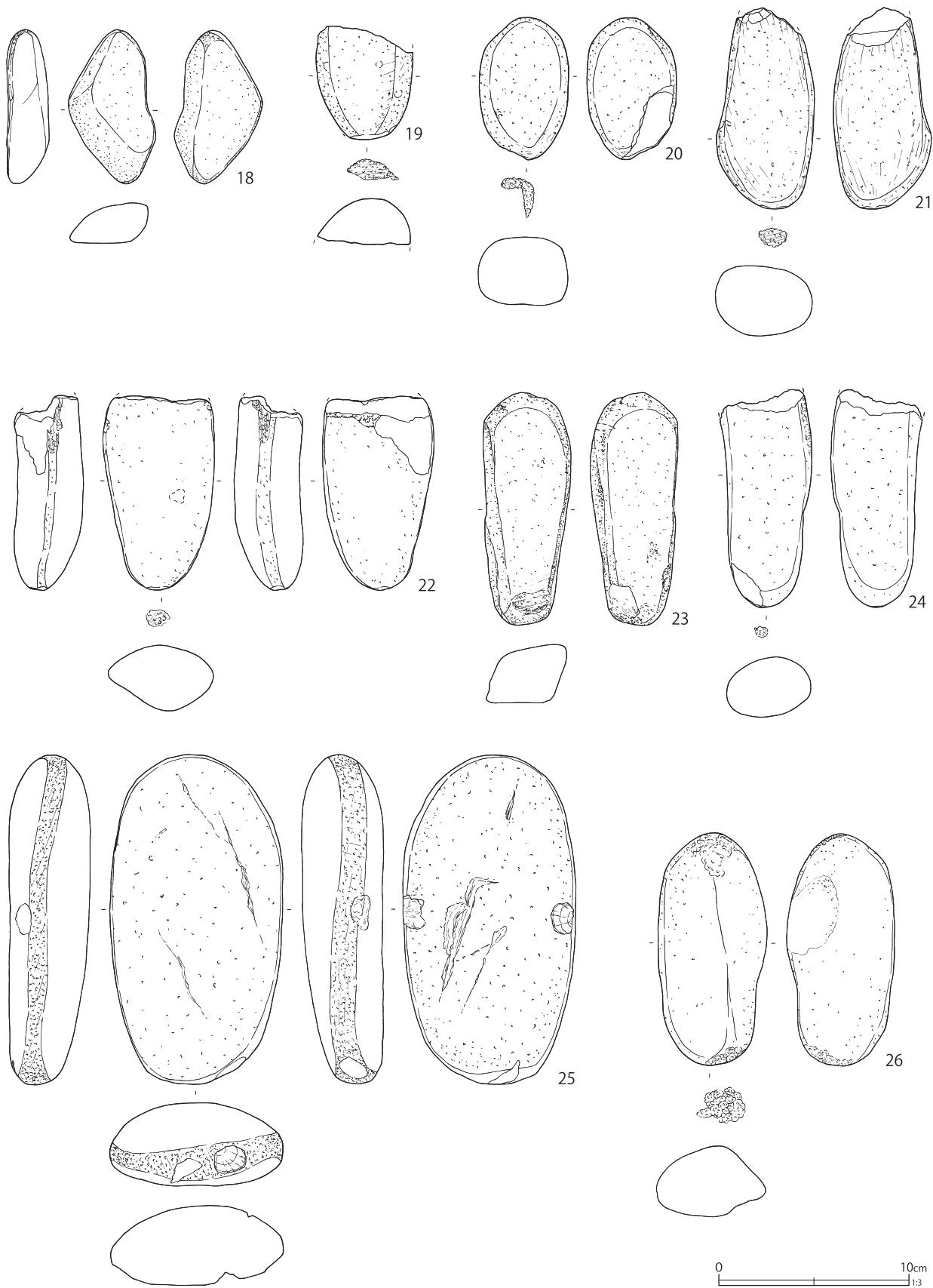
第129図 石器分布図



第130図 縄文時代の石器（1）

第23表 石器一覧表

図番	器種	石材	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	位置	図番	器種	石材	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	位置
128 1	ナイフ形石器	珪質頁岩	7.7	2.8	1.3	20.5	D1	47	磨石	安山岩	15.7	14.6	8.3	2076.6	J3
2	剥片	チャート	2.3	5.4	0.9	10.7	I3	48	磨石	レキ岩	8.6	6.3	4.5	369.3	I3
130 1	石鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.6	0.7	H3	135 49	磨石	砂岩	5.7	6.3	3.2	142.5	I3
2	石鏃	チャート	2.4	1.5	0.4	1.0	J3	50	磨石	安山岩	6.2	4.9	3.3	152.9	C1
3	石鏃	黒曜石	2.4	2.2	0.4	1.4	J3	51	磨石	安山岩	6.6	6.2	5.0	319.5	D1
4	石鏃	黒曜石	3.2	2.1	0.4	1.6	J3	52	磨石	砂岩	6.1	6.3	4.9	274.0	B2
5	楔形石器	チャート	2.8	2.3	0.9	5.7	D1	53	磨石	ホルンフェルス	8.1	6.2	4.3	237.5	表採
6	楔形石器	黒曜石	2.1	1.0	0.5	0.7	D1	54	磨石	ホルンフェルス	8.6	4.3	5.5	275.5	C1
7	磨製石斧	砂岩	3.6	3.7	1.8	29.1	B2	55	磨石	砂岩	8.3	6.1	4.6	236.6	D1
8	磨製石斧	流紋岩	3.2	4.2	1.1	15.3	D1	56	磨石	結晶片岩	4.9	5.9	3.1	129.5	D1
9	磨製石斧	結晶片岩	12.5	5.1	2.9	296.9	D1	57	磨石	砂岩	5.4	6.3	4.5	124.1	C1
10	打製石斧	ホルンフェルス	8.7	8.1	2.8	244.1	I3	58	磨石	安山岩	7.1	8.2	6.4	535.6	I3
11	礫器	チャート	8.1	7.9	2.4	167.0	D1	59	磨石	砂岩	9.7	5.4	3.7	195.1	C1
12	浮子	軽石	4.7	3.4	1.2	5.8	D1	136 60	石皿	安山岩	16.3	19.1	5.8	2186.4	I3
13	浮子？	軽石	7.1	5.4	3.3	34.5	表採	61	石皿	安山岩	8.5	6.9	6.0	211.6	C1
14	石錐	頁岩	6.2	4.8	1.5	63.2	J3	62	石皿	安山岩	5.8	8.9	5.1	220.2	C2
15	石錐	黒色頁岩	6.0	4.9	1.6	63.0	I3	63	石皿	安山岩	21.0	11.2	8.2	1281.6	I3
16	石錐	砂岩	8.4	7.9	2.4	215.4	J3	137 64	石皿	安山岩	9.0	9.0	4.9	203.6	D1
17	石錐	頁岩	7.3	5.3	2.1	102.8	D1	65	石皿	安山岩	14.6	9.1	4.2	541.2	I3
131 18	敲石	砂岩	8.2	4.6	2.1	90.2	I3	66	石皿	安山岩	8.3	8.0	7.5	489.0	表採
19	敲石	砂岩	6.0	5.1	2.4	92.6	C2	67	石皿	安山岩	11.0	10.9	6.1	703.3	J3
20	敲石	砂岩	7.5	4.7	3.6	190.6	C1	68	石皿	安山岩	16.1	8.1	6.4	775.4	C2
21	敲石	砂岩	10.6	5.2	3.7	301.1	C1	69	石皿	砂岩	14.8	13.9	4.3	1257.0	B2
22	敲石	砂岩	10.3	5.9	3.7	310.0	I3	138 70	石皿	閃綠岩	16.9	22.4	5.5	2845.7	J3
23	敲石	砂岩	12.3	4.7	3.1	293.7	D1	71	石皿	砂岩	16.3	25.0	4.8	2462.7	I3
24	敲石	閃綠岩	11.4	4.8	3.4	287.3	D1	72	石皿	安山岩	15.3	20.6	5.3	2618.9	J3
25	敲石	砂岩	17.3	9.1	4.3	1005.6	表採	139 73	石皿	閃綠岩	2.8	11.4	5.2	1244.2	I3
26	敲石	砂岩	12.2	5.8	4.5	355.5	表採	74	石皿	閃綠岩	12.5	9.3	5.5	631.7	I3
132 27	敲石	ホルンフェルス	10.6	8.0	5.2	636.8	D1	75	石皿	閃綠岩	17.0	12.3	5.0	1339.7	J3
28	敲石	緑色岩	14.1	6.3	5.3	706.5	C1	76	石皿	閃綠岩	17.2	8.7	5.0	928.5	表採
29	敲石	砂岩	13.2	5.4	3.2	435.2	J3	77	石皿	安山岩	8.2	6.7	5.3	469.3	C1
30	敲石	閃綠岩	11.8	5.7	4.7	421.3	I3	78	石皿	安山岩	5.5	4.8	4.9	198.7	C2
31	敲石	ホルンフェルス	9.0	9.2	3.9	505.6	D1	140 79	石皿	ホルンフェルス	12.3	16.0	9.7	2061.4	J2
32	敲石	頁岩	8.0	5.8	3.7	244.5	I3	80	石皿	閃綠岩	12.5	10.3	6.2	616.1	I3
133 33	敲石	ホルンフェルス	4.5	5.0	3.1	71.8	H3	81	石皿	緑泥片岩	12.0	11.6	2.8	482.0	表採
34	敲石	砂岩	6.1	6.8	2.2	88.7	J3	82	石皿	結晶片岩	13.9	8.9	2.9	516.5	I3
35	敲石	安山岩	7.7	2.7	2.8	80.6	B1	141 83	台石	砂岩	20.7	16.0	7.0	2522.6	I3
36	敲石	砂岩	10.7	5.1	4.2	160.7	B2	84	台石	砂岩	23.4	18.4	9.5	4859.7	I3
37	敲石	砂岩	11.1	8.4	6.5	820.6	J3	85	台石	砂岩	14.9	14.3	6.7	1486.3	C2
38	敲石	安山岩	8.6	8.1	3.9	306.9	I3	142 86	石棒	緑泥片岩	30.0	2.6	2.6	292.3	I3
39	敲石	砂岩	12.5	5.2	3.4	291.7	J3	87	石棒	緑泥片岩	27.3	5.4	3.6	583.9	J3
40	砥石	結晶片岩	21.5	7.8	2.4	315.5	C1	88	石棒	安山岩	18.9	16.0	16.1	6800.0	J3
41	砥石	砂岩	6.6	4.2	1.8	50.5	E1	143 89	石棒	安山岩	30.6	13.7	13.6	7500.0	J3
134 42	磨石	安山岩	9.6	8.4	5.3	663.7	I3	144 90	石棒	安山岩	36.5	10.1	10.1	6200.0	B2
43	磨石	安山岩	10.1	7.1	4.4	408.9	I3	145 91	石核	チャート	6.9	4.3	4.2	235.7	I3
44	磨石	安山岩	10.5	9.5	4.8	762.0	J3	92	石核	チャート	7.2	4.8	4.0	107.5	B2
45	磨石	砂岩	9.6	8.1	4.5	464.2	J3	146 1	垂飾	翡翠	2.3	1.4	1.2	6.7	H3
46	磨石	安山岩	5.5	3.6	2.2	46.2	C1	2	管玉	滑石	2.3	1.8	1.6	8.4	B1



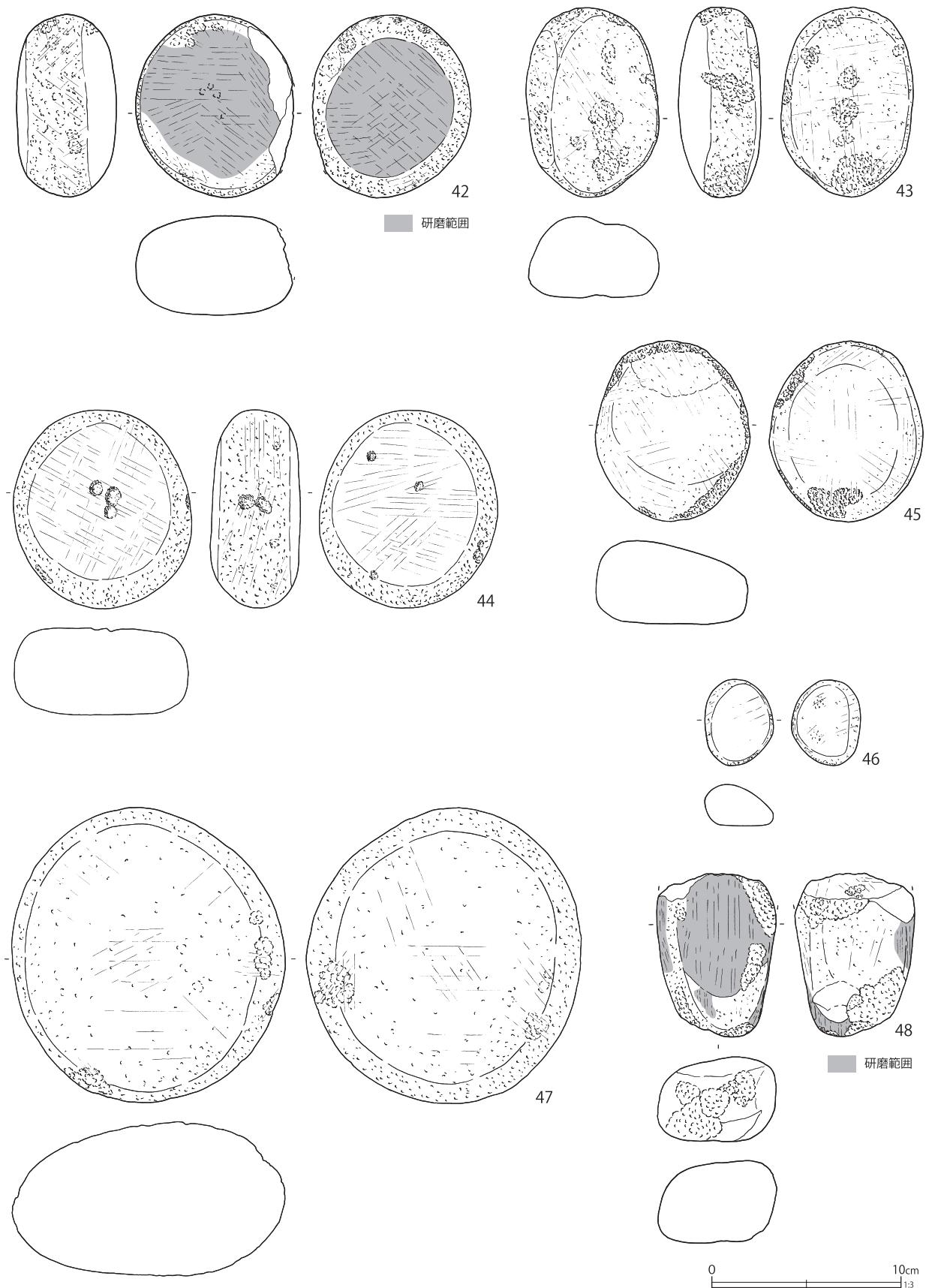
第131図 縄文時代の石器（2）



第132図 繩文時代の石器（3）



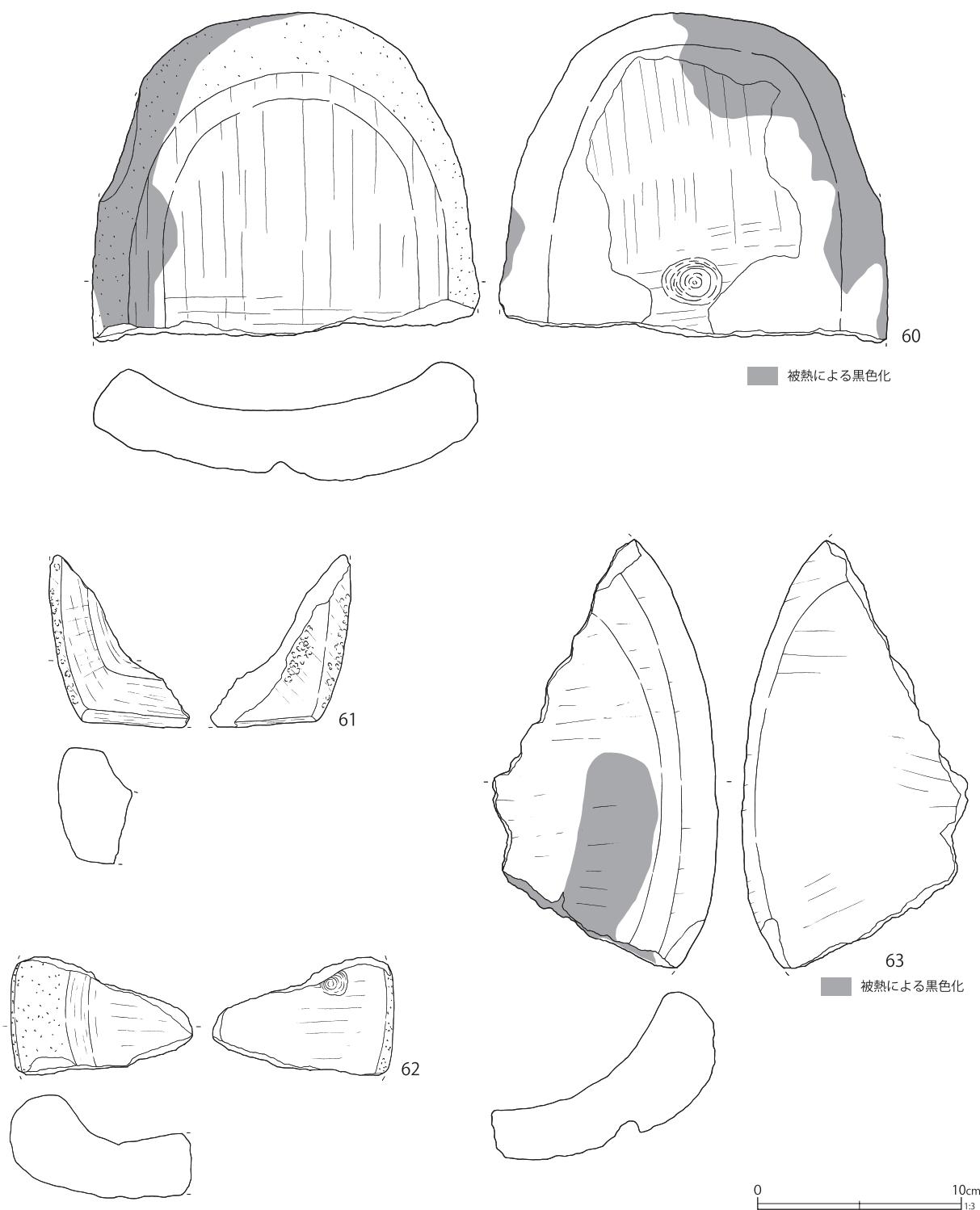
第133図 縄文時代の石器（4）



第134図 繩文時代の石器（5）



第135図 縄文時代の石器（6）



第136図 縄文時代の石器（7）

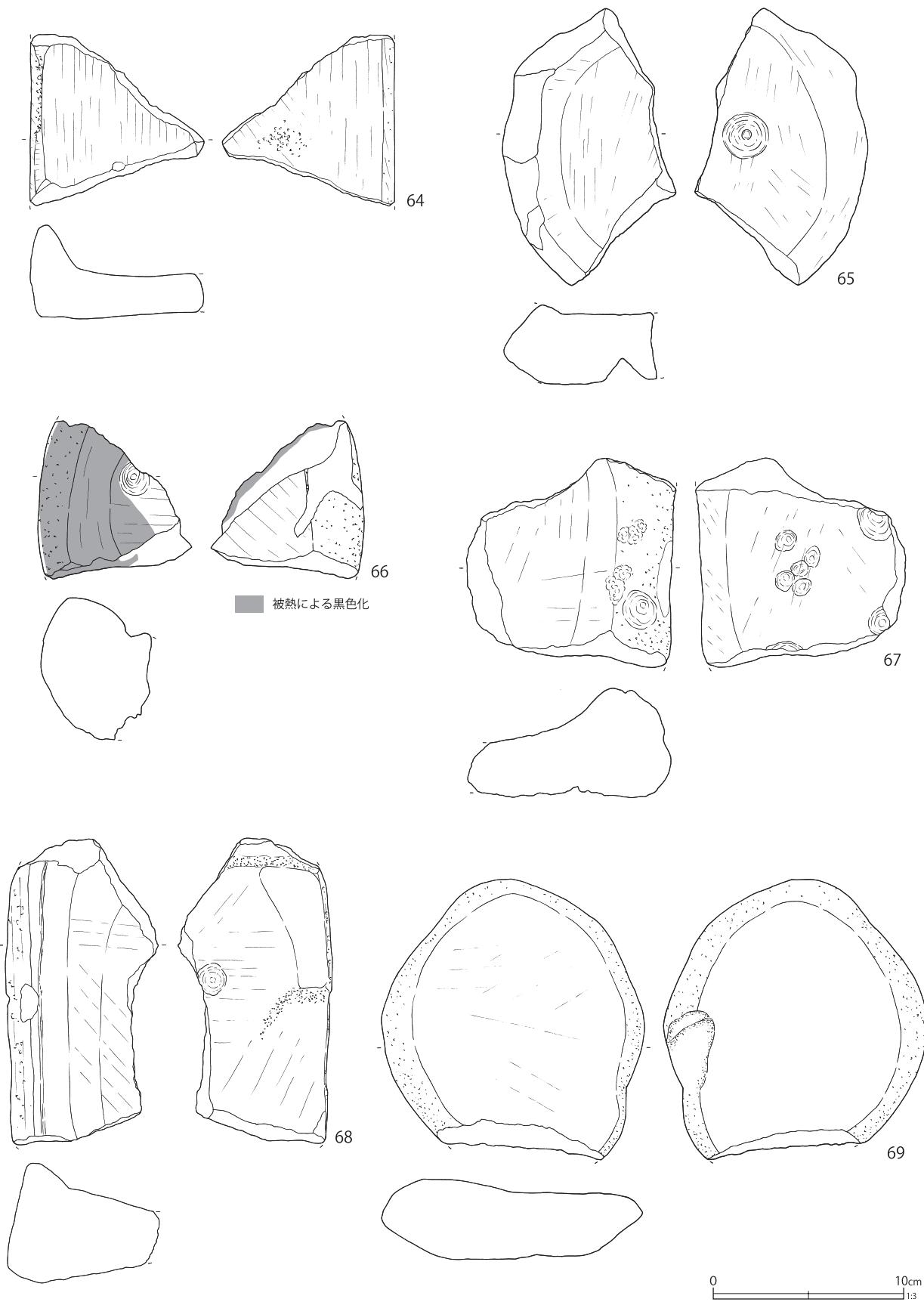
磨製石斧（第130図7～9）

3点出土しているが、7、8は折れて研磨面が剥離したもので、一部研磨痕が残る。9は両側面からの調整剥離で成形途中の製品と思われ、全面

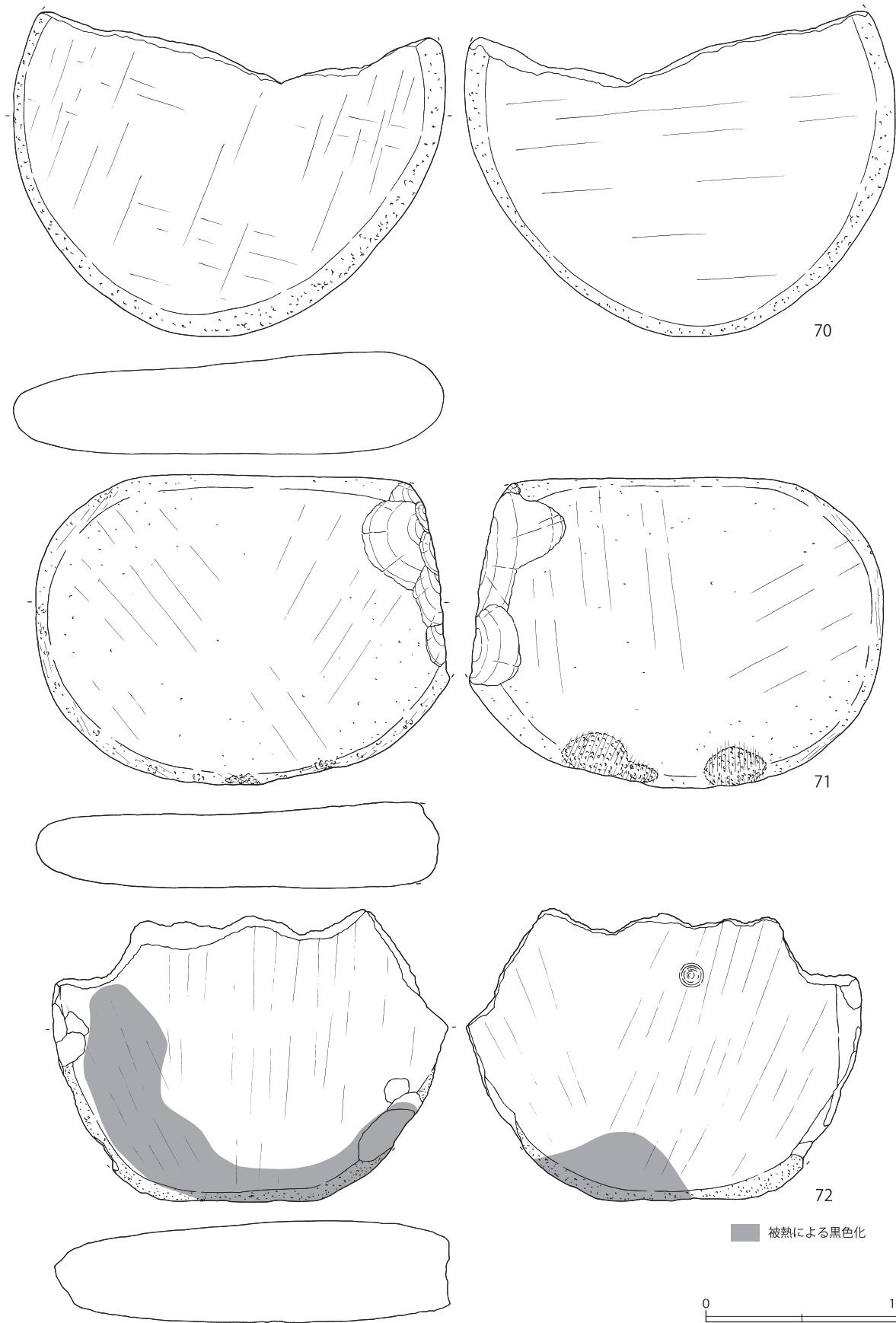
的に研磨が弱く行われている。

打製石斧（第130図10）

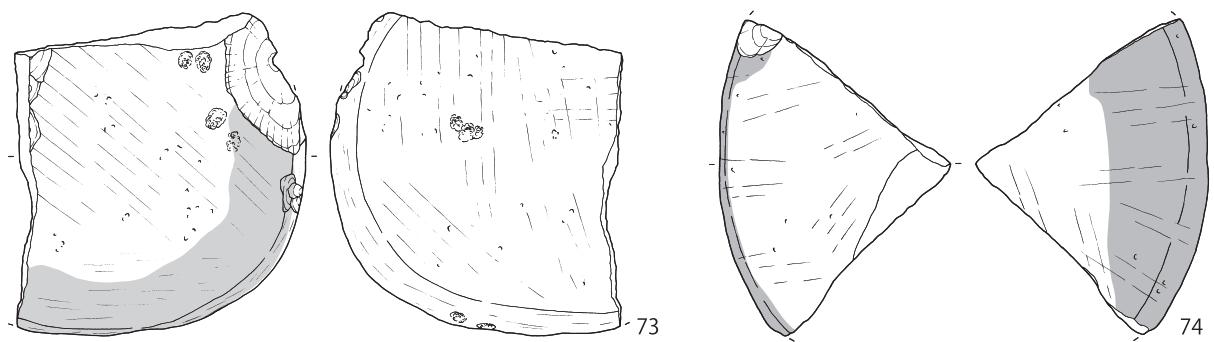
1点のみ出土した。10は分銅形打製石斧の刃部にあたり、上半部が欠損する。中央部で両側から



第137図 縄文時代の石器（8）

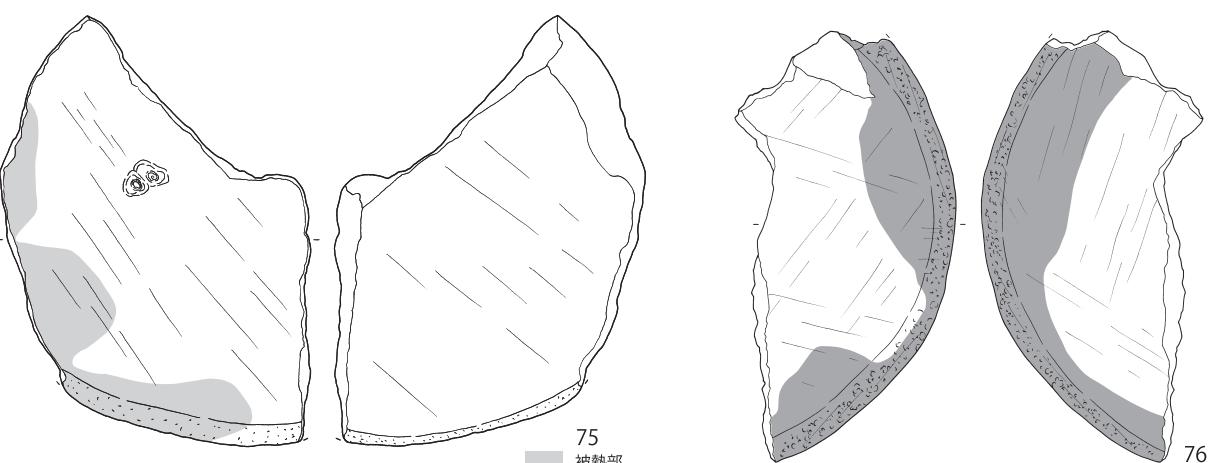


第138図 繩文時代の石器（9）



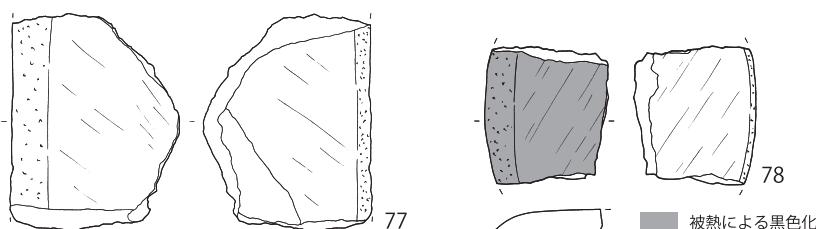
■ 被熱部

■ 炭付着範囲



■ 被熱部

■ 被熱による黒色化



■ 被熱による黒色化

0 10cm 1:3

第139図 縄文時代の石器 (10)



第140図 縄文時代の石器 (11)

調整剥離で大きな抉りを入れ、刃部は表裏面から
の大きな階段状剥離で形成され、細かな調整剥離
が施されている。

礫器 (第130図11)

1点のみ出土した。細長い扁平な礫を中心部で
分割したような形状で、手に握りやすい礫器であ
る。刃部は表裏面からの調整剥離で形成される。

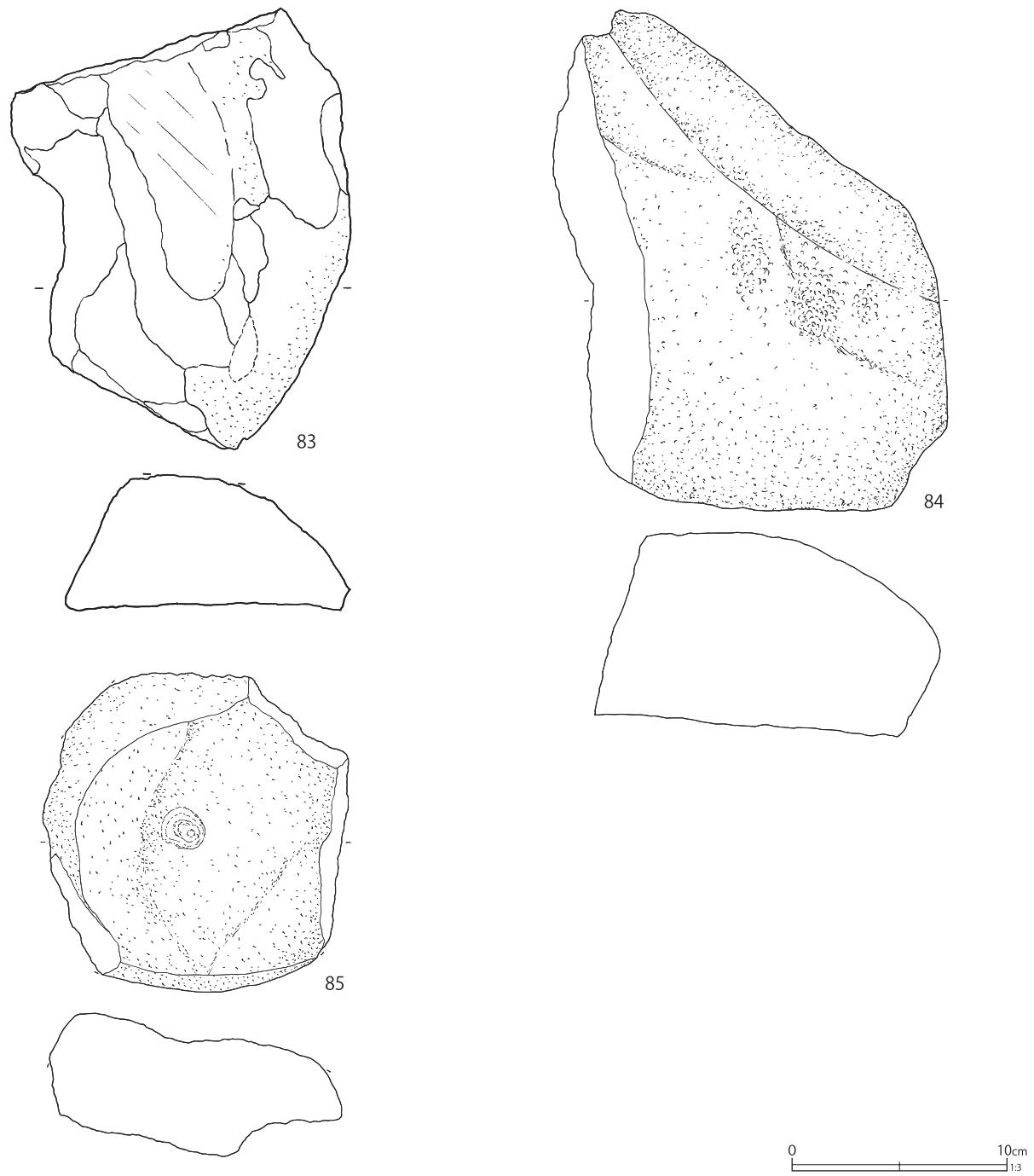
浮子 (第130図12、13)

2点出土した。いわゆる安山岩の軽石製で、小
形で扁平な12には、円孔が穿たれる。13は周囲が
軽く成形された原石状を呈するが、浮子の未製品

の可能性がある。

石錘 (第130図14~17)

4点が出土している。いずれも扁平な礫が使用
されている。14は頁岩製の石錘で、長軸方向の両
端部に表裏面から細かな剥離が施されて、糸掛け
部が作られている。15も同様に糸掛け部が作られ
ており、扁平で菱形状の礫が使用されている。16
は円形に近い不整橢円形のやや大形の礫が使用さ
れ、長軸部の両端部と両側縁のほぼ中央部に粗い
剥離が施されて、糸掛け部が作り出されている。
特に、側面の剥離は粗く、糸が滑らない程度のも



第141図 縄文時代の石器 (12)

のと思われる。17は扁平な礫の長軸方向の両端部に刻みを施すものであるが、擦切りによる刻みが施されるものであり、上端では調整剥離で形状が整えられてから擦切りの刻みが施されている。

敲石 (第131図18~133図39)

各グリッドから、合計22点が出土した。形状等様々であるが、基本的には細長い柱状の礫が用い

られ、その端部が使用に供されている。打製の石器を作る際に使用されたものと思われるが、他の石器からの転用品もある。

18は菱形状の礫で、その細く尖る先端部が使用されている。20、37、橢円形の礫が、21~24、26、28~30、32、36、39は長橢円形の棒状礫が使用されている。25はやや扁平な磨石状を呈し、側面